作業室用

茨城県教育財団文化財調査報告第188集

宮後遺跡1

やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

上巻

平成14年3月

茨城県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第188集

宮後遺跡1

やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

上巻

平成14年3月

茨城県
財団法人 茨城県教育財団

遺　跡　遠　景

第151号土坑出土遺物

第637号土坑出土遺物

第297号土坑出土遺物

第312号土坑出土遺物

第362号土坑出土遺物

第456号土坑出土遺物

序

茨城県は，21世紀の社会として，高齢者や障害者をはじめ，誰もが安心して生き生きと生活できるよう福祉・医療・健康増進・生きがいづくり等の機能を備えた，総合的な「人にやさしいまちづくり」のモデルとなる新たなまちづくりを計画しています。このような状況の中で，やさしさのまち「桜の郷」整備推進事業が計画されたもので，その予定地内には宮後遺跡をはじめ，石原遺跡，大塚遺跡，綱山遺跡等多くの遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県と埋蔵文化財発掘調査事業についての委託契約を結び，平成10年4月から平成12年3月まで宮後遺跡の発掘調査を実施してまいりました。この調査によって貴重な遺構，遺物が検出され，郷土の歴史を解明する上で多大な成果をあげることができました。

本書は，平成12年3月刊行された『石原遺跡』の報告書に続き，宮後遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより，教育，文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお発掘調査から報告書の刊行に至るまで，委託者である茨城県から多大なるご協力を賜りましたことに対し，厚く御礼申し上げます。

また茨城県教育委員会，茨城町教育委員会，茨城町特定開発課をはじめ，関係各機関及び関係各位からいただいた御指導，御協力に対し，衷心より感謝の意を表します。

平成14年3月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　齋　藤　佳　郎

例　　言

1　本書は，茨城県の委託により，財団法人茨城県教育財団が，平成10・11年度に発掘調査した，茨城県東茨城郡茨城町大字近藤に所在する宮後遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書が報告の対象とするのは，宮後遺跡１・３・４・５区の縄文時代の遺構と遺物である。

3　当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は，以下の通りである。

調　査　平成10年４月１日～平成12年３月31日

整　理　平成12年４月１日～平成13年３月31日

4　当遺跡の発掘調査は，平成10年４月１日～平成11年３月31日まで調査第一課長沼田文夫の指揮のもと，調査第１班長瓦吹堅，主任調査員村上和彦，川又清明，長谷川聡，副主任調査員菅川修，田原康司が，平成11年４月１日～平成12年３月31日まで調査第一課長阿久津久の指揮のもと，調査第１班長瓦吹堅，主任調査員廣崎紀雄，川又清明，野田良直，藤田哲也，和田清典，吹野富美夫，長谷川聡，副主任調査員浅野和久，田原康司，荒蒔克一郎が担当した。

5　当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は，整理課長川井正一の指揮のもと，主任調査員野田良直，川又清明，吹野富美夫，浅野和久が担当した。執筆は，第１・２章，第３章第２節を川又が，第３章第３節3(1)フラスコ状土坑(第１～352号土坑，第683～948号土坑)，(2)土坑墓，(3)陥し穴，(4)その他の土坑を野田が，第３章第１節，第３節3(1)フラスコ状土坑(第353～682号土坑)，４遺物包含層，第４節を吹野が，第３章第３節１竪穴住居跡，２屋外炉，５遺構外遺物を浅野が担当した。レイアウト及び校正については，主任調査員和田清典，副主任調査員荒蒔克一郎の協力を得た。

6　本書の作成にあたり，縄文土器の地域的様相については，財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター塚本師也氏・江原英氏，財団法人いわき市教育文化事業団中山雅弘氏・小幡成雄氏，財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団押山雄三氏・工藤健吾氏・日塔とも子氏に，石器と石製品の石質については，高野淳氏にそれぞれ御指導いただいた。

7　発掘調査及び整理に際し，御指導，御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標を用いて区画し，宮後遺跡はX軸＝＋36,040m，Y軸＝＋51,840mの交点を基準点(A 1 a1)とした。

大調査区は，この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西，南北に各々10等分し，4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C…，西から東へ1，2，3…とし，その組み合わせで「A 1 区」，「B 2 区」のように呼称した。さらに，小調査区も同様に北から南へa，b，c…j，西から東へ1，2，3…0と小文字を付し，名称は，大調査区の名称を冠し，「A 1 a1」，「B 2 b2」のように呼称した。

2　遺構，遺物，土層に使用した記号は，次の通りである。

遺構　住居跡―S I　土坑―S K　堀・溝―S D　掘立柱建物跡―S B　遺物包含層―S X

遺物　土器―P　土製品―D P　石器・石製品―Q　金属製品―M　拓本土器―T P

土層　撹乱―K

3　遺構及び遺物の実測図中の表示は，次のとおりである。

炉・焼土　－－－－－硬化面　●土器　○土製品　□石器・石製品　△堅果類・種子

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社)を使用した。

5　遺構・遺物実測図の掲載方法については，以下のとおりである。

(1)　遺構全体図は縮尺250分の1とし，各遺構の実測図は，60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2)　遺物は，原則として3分の1に縮尺した。種類や大きさにより異なる場合もあり，それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

6　「主軸方向」は，炉を通る軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とみなし，その主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例　N - 10°　- E)。なお，現存値は（　）で，推定値は［　］を付して示した。

7　土器の計測値は，口径―A　器高―B　底径―Cとし，単位はcmである。なお，推定値は［　］を付して示した。

8　遺物観察表の備考の欄は，土器の残存率，実測番号(P)，その他必要と思われる事項を記した。

9　遺構番号については，調査区を5地区に分けて調査を併行して進めたため，番号の4ケタに地区の数字を冠して付けた。報告では，遺構ごとに全地区をまとめた番号に改めた。なお，発掘番号と報告番号の対照については，一覧表で記載した。

抄　　録

ふりがな	みやうしろいせき
書名	宮後遺跡1
副書名	やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	Ⅱ
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第188集
著者名	川又清明，野田良直，吹野宮美夫，浅野和久
編集機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310-0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　TEL　029-225-6587
発行機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310-0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　TEL　029-225-6587
発行日	2002（平成14）年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村番号	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
宮後遺跡 （みやうしろいせき）	茨城県東茨城郡茨城町大字（いばらきけんひがしいばらぎぐんいばらきまちおおあざ） 近藤字宮附222番地の3ほか（こんどうあざみやつけ）	08302 228	36度 19分 21秒	140度 24分 45秒	24 ～ 29m	19980401 ～ 20000331	39,064m²	やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮後遺跡	集落跡	縄文時代前期	竪穴住居跡　1軒	縄文土器（深鉢）	縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。縄文時代には，中期中葉から後葉にかけて，大規模な環状集落が形成され，その中央部に土坑墓群が分布していた。土坑墓からは，翡翠製の大珠が出土している。
		縄文時代中期	竪穴住居跡　42軒 屋外炉　8基 土坑　948基 陥し穴　6基 遺物包含層　1か所	縄文土器（深鉢・浅鉢），土製品（土器片円盤・土錘），石器（石斧・石鏃・石皿・磨石・凹石），石製品（翡翠製大珠・石棒・石錘）	

総　目　次

—上　巻—

序
例　言
凡　例
抄　録
第1章　調査経緯 …… 1
　第1節　調査に至る経緯 …… 1
　第2節　調査経過 …… 1
第2章　位置と環境 …… 3
　第1節　地理的環境 …… 3
　第2節　歴史的環境 …… 3
第3章　調査の成果 …… 9
　第1節　遺跡の概要 …… 9
　第2節　基本層序 …… 9
　第3節　遺構と遺物 …… 11
　　1　竪穴住居跡 …… 11
　　2　屋外炉 …… 80
　　3　土坑 …… 89
　　(1)　フラスコ状土坑 …… 89

—下　巻—

　　(1)　フラスコ状土坑 …… 329
　　(2)　土坑墓 …… 562
　　(3)　陥し穴 …… 563
　　(4)　その他の土坑 …… 566
　　4　遺物包含層 …… 571
　　5　遺構外出土遺物 …… 591
　第4節　まとめ …… 608
　　1　縄文時代中期中葉の土器について …… 608
　　2　土坑墓から出土した大珠について …… 617
写真図版

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経緯

やさしさのまち「桜の郷」整備事業は，福祉・医療・健康増進・生きがいづくり等の機能を備えた，高齢化社会に対応できる総合的な「人にやさしいまちづくり」のモデルとなる新しいまちづくりプロジェクトであり，茨城県のほぼ中央に位置する茨城町において整備を目指している。

工事に先立ち，平成９年１月20日，茨城県は，茨城町教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。茨城県教育委員会は，平成９年３月14日から，近藤・大戸地区の試掘調査を実施し，工事予定地内に宮後遺跡，石原遺跡，大塚遺跡，綱山遺跡が所在する旨を茨城県に回答した。茨城県は，平成10年３月２日，茨城県教育委員会にその取り扱いについて協議を求めた。茨城県教育委員会は，遺跡の取り扱いについて茨城県と協議を重ね，現状保存が困難であることから，平成10年３月31日，茨城県に対し，宮後遺跡，石原遺跡，大塚遺跡，綱山遺跡を記録保存とする旨の回答を行い，調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県と茨城県教育財団は，埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び，平成10年４月１日から平成11年３月31日にかけて，宮後遺跡，石原遺跡の発掘調査を実施することとなった。そのうち宮後遺跡については，表土除去後に確認された業務量をもとに委託者及び茨城県教育委員会文化課と協議の結果，調査期間が１年間（平成12年３月31日まで）延長された。平成11年度は，宮後遺跡の残り２・４・５区，大塚遺跡，綱山遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節　調　査　経　過

宮後遺跡の発掘調査は，平成10年４月１日から平成12年３月31日までの２年間にわたって実施した。以下，宮後遺跡の調査の経過について月ごとに略述する。

平成10年度

４　月　６日に現地踏査をし，茨城町教育委員会・特定開発課・建設課との打ち合わせを行った。20日に進入路工事を開始し，27日に事務所建設が終了した。調査区域内に存在する樹木を伐開するための数量調査を行った。

５　月　６日から調査補助員を雇用し，諸設備の整備，遺跡内の清掃を開始した。10日には，発掘調査の円滑な推進と作業の安全を願って安全祈願祭を挙行した。式後，トレンチ及びグリッドを設定し，試掘を開始した。試掘終了後の22日から，１区の人力表土除去及び遺構確認作業に入った。

６　月　人力表土除去及び遺構確認作業を進めるとともに，17日から１区の遺物包含層の調査に入った。24日から重機を導入し，１区から表土除去及び遺構確認作業に入った。

７　月　１日から業者委託による山林部（５区）の伐開作業に入った。引き続き重機による表土除去及び遺構確認作業，遺構調査（竪穴住居跡１軒，土坑14基終了）を行った。１・２区の遺構確認状況から，遺構の重複が激しいことが分かった。

８　月　３日に重機による表土除去が終了した。３～５区の遺構確認作業を急ぎ進めた。遺構調査も行い，竪

穴住居跡３軒，土坑41基の調査を終了した。

9　月　引き続き遺構調査を行うとともに，全体の業務量を算出した。29日までに竪穴住居跡１軒，土坑64基，溝２条，遺物包含層１か所の調査を終了した。

10　月　今後の業務量検討の結果から，７日に調査期間の変更連絡があり，本年度の調査は宮後遺跡の１・３区及び石原遺跡となり，２・４・５区の調査は，次年度に延期された。引き続き遺構調査を行い，29日までに竪穴住居跡７軒，土坑94基，溝３条の調査を終了した。

11　月　継続して遺構調査を行い，竪穴住居跡14軒，土坑117基，溝３条，遺物包含層１か所の調査を終了した。

12　月　引き続き遺構調査を行い，土坑65基，溝３条の調査を終了した。

1　月　３区の遺構調査に入った。竪穴住居跡11軒，土坑98基，溝３条の調査を終了した。

2　月　25日に航空写真撮影を，27日には現地説明会を行った。竪穴住居跡20軒，土坑159基，溝１条の調査を終了した。

3　月　15日に委託者並びに茨城町教育委員会に対する業務報告会を行った。24日に整理センターに遺物搬出をし，安全対策を含めた撤収作業を完了し，現場事務所を閉鎖して本年度の現地調査をすべて終了した。

平成11年度

4　月　諸準備後，15日からフラスコ状土坑が密集する２区の遺構調査及び１区の補足調査に入った。

5　月　１区の補足調査終了後，４区の遺構調査及び５区の伐根に入った。竪穴住居跡３軒，土坑102基，溝３条の調査を終了した。

6　月　引き続き２・４区の遺構調査を行うとともに，５区の遺構調査に入った。竪穴住居跡16軒，土坑75基，掘立柱建物跡１棟，溝３条の調査を終了した。

7　月　引き続き遺構調査を行い，竪穴住居跡18軒，土坑49基，遺物包含層等の調査を終了した。

8　月　継続して遺構調査を行い，竪穴住居跡11軒，土坑106基等の遺構調査を終了した。

9　月　引き続き遺構調査を行い，竪穴住居跡25軒，土坑197基，掘立柱建物跡７棟等の遺構調査を終了した。

10　月　継続して遺構調査を行い，竪穴住居跡６軒，土坑112基，掘立柱建物跡６棟等の遺構調査を終了した。

11　月　２区北側では，遺構の重複が激しく，当初予定していた業務量より多いことが判明したので，再度宮後遺跡，大塚遺跡，網山遺跡の残りの総業務量を算出し，業務変更の打ち合わせを持った。協議の結果，大塚遺跡の遺構調査を途中で終了し，宮後遺跡の２区南側の調査に入ることになった。竪穴住居跡５軒，土坑217基，掘立柱建物跡５棟等の遺構調査を終了した。

12　月　大塚遺跡調査班が，２区南側の遺構調査に入った。27日までに竪穴住居跡８軒，土坑201基，掘立柱建物跡12棟，溝７条等の遺構調査を終了した。

1　月　５日から調査を開始し，竪穴住居跡８軒，土坑201基，掘立柱建物跡12棟，溝７条等の遺構調査を終了した。

2　月　６日に現地説明会を行い，２・４・５区の遺物及び出土遺物を公開した。28日に５区の調査が終了し，２区の調査を残すだけになった。竪穴住居跡22軒，土坑331基，掘立柱建物跡12棟，溝１条の調査を終了した。

3　月　２日に委託者並びに茨城町教育委員会に対する業務報告会を，９日に航空写真撮影を行った。24日には，２区の補足調査を終了させるとともに，整理センターに遺物搬出をし，安全対策を行った。27日には撤収作業を完了し，現場事務所を閉鎖してすべての現地調査を終了した。

第2章 位 置 と 環 境

第1節 地 理 的 環 境

宮後遺跡は，茨城県東茨城郡茨城町大字近藤字宮附222番地の3ほかに所在している。

茨城町の地形は，町のほぼ中央部を東流する涸沼川と，その東に展開する涸沼によって，台地を南北に二分されている。北部の台地は，標高25～30mの東茨城郡北部台地の先端部を形成し，北西から流れる涸沼前川を含む大小の支谷が涸沼を中心に南面して開口している。南部に発達する台地は，西から大谷川，南から寛政川が涸沼に流入し，その間に大小多数の支谷が台地深くまで侵入し，北部台地に比べて起伏も多く一層複雑な地勢を成している。これらの河川流域の沖積低地は水田として，台地は畑地・果樹園として利用されている。

地質をみると，台地を形成している最も古い地層は新生代第三紀の地層で，岩質は泥岩で水戸層と呼ばれている。水戸層の上には第四紀の地層が不整合に堆積している。粘土・砂からなる見和層，礫からなる上市層，灰褐色の常総粘土層，関東ローム層の順に重なっており，これらの地層はいずれもほぼ水平層である。

当遺跡は，茨城町の北西部の近藤，大戸地区にあり，涸沼前川の支流である小橋川に開析された標高25～29mの台地縁辺部に位置している。当遺跡の東側は小橋川から延びる小支谷が入り込んでおり，水田として利用されている。調査前の現況は陸田・畑地・山林である。

第2節 歴 史 的 環 境

当町周辺は，涸沼を中心として，涸沼川，涸沼前川など水運に恵まれ，古代から人々が生活を営む場としては絶好の舞台となってきたため，縄文時代から中・近世にかけての遺跡が数多く存在している(第1図)。ここでは，宮後遺跡に関連する主な遺跡について，時代別に述べることにする。

(1) 縄文時代

宮後遺跡〈1〉に当時の人々の痕跡が確認されるようになった縄文時代前期前半は，縄文海進により海水面が現在より高かったことが想定される。涸沼川及び涸沼前川流域では，小鶴遺跡〈14〉，東山遺跡〈16〉，シッペイ沢遺跡〈17〉，奥谷遺跡〈27〉などに小集落が営まれ，越安貝塚〈23〉，シッペイ沢遺跡，南小割遺跡〈41〉などでは貝塚が形成された。

中期後半になると，前期より遺跡数が増加し，当遺跡のような大きな集落が営まれるようになった。塚越遺跡〈12〉，茶坂南坪遺跡〈26〉，矢古崎遺跡など，町内全域で見られるようになる。

後期になると遺跡数が減る傾向にあり，当遺跡でも後期の土器片は数片が確認されただけである。

(2) 弥生時代

当遺跡と同時期の後期後半（十王台式期)の集落として，涸沼前川流域には，平成7年度に調査された矢倉遺跡〈8〉，平成8年度に調査された大畑遺跡〈9〉，平成10年度に調査された石原遺跡〈2〉，平成11年度に調査された綱山遺跡〈4〉，平成11・12年度に調査された大塚遺跡〈3〉，その他には稲荷宮遺跡〈5〉，大戸下郷遺跡〈7〉，台畑遺跡などがあり，遺跡数が多い。この時期には，涸沼川流域を中心とする文化圏があったことが想定されている。十王台式期の遺物を比べると，矢倉遺跡，大畑遺跡，石原遺跡，綱山遺跡，大塚遺跡及び当遺跡とでは頸部文様の施文及び範囲などに違いが見られることから，遺跡間の継続的なつながりが考

えられる。また，十王台式土器と違う文様の土器も出土しており，他地域との交流が想定される。

（3）古墳時代

古墳時代になると遺跡数が増加する。平成10年度に調査された石原遺跡，平成11年度に調査された綱山遺跡，平成11・12年度に調査された大塚遺跡では，弥生土器と土師器が一緒に出土した住居跡が確認され，弥生時代から古墳時代に移ると地域の様相を知る手がかりになると思われる。涸沼前川の下流に位置する奥谷遺跡からは，古墳時代前期の豪族居館跡の溝や住居跡が，涸沼前川を挟んで対岸の台地上に位置する南小割遺跡からも，前期の小波状口縁をもつ土器や住居跡が確認され，近くには昭和60年の周溝の調査で，茨城町地方では最も古い時期（4世紀末～5世紀初頭）に位置づけられた前方後円墳である宝塚古墳〈25〉がある。それに続く中期から後期にかけての古墳が61基，埴輪製作跡の小幡北山埴輪製作址〈31〉がある。後期の大きな集落として前述の奥谷遺跡・南小割遺跡などがある。

（4）奈良・平安時代

律令制下の奈良・平安時代の茨城町域は，那賀郡八部郷，茨城郡島田・安侯・白川郷，鹿島郡宮前郷に属していた。この時期の遺跡は，町内全域に確認され，100遺跡を数える。奥谷遺跡からは，百数十点の墨書土器のほか円面硯や刀子が出土している。特に，墨書の「曹司」は，宮中・官衙などの庁舎・宿直所・局・部屋などの意味が，当時の奥谷遺跡が官衙的あるいは公共的な施設を含む集落であったことを示している。雨山遺跡〈28〉からは，「土師神主」と書かれた墨書土器が，大山原からは，「前家□□」と書かれた須恵器坏が出土している。接続する大塚遺跡からは「コ」の字状に並ぶこの地域の中心的な遺構と考えられる掘立柱建物跡群が確認され，墨書土器や円面硯・灰釉陶器も出土している。綱山遺跡でも掘立柱建物跡が確認され，円面硯・灰釉陶器・墨書土器も出土しているので，3遺跡の関連が注目される。

（5）中世・近世

常陸大掾氏系の青田清幹に始まる大戸氏一族の所領であった前田地区の万東山地区からは，13世紀前半と思われる「青白磁迦牡丹文梅瓶」が出土している。涸沼前川・涸沼川沿いには，当時も有力な氏族がいたことがうかがえる。

中世の遺跡は，主に城館跡である。現存する町内の城館跡の中で小幡城跡が最大規模であるが，築城者については不明である。他に，宮ケ崎城跡，海老沢館跡，鳥羽田城跡，奥谷館跡，厳沼城跡，谷田部城跡，水戸市平須館跡〈32〉などが所在している。奥谷遺跡からは，堀，地下式壙，方形竪穴状遺構，土坑，井戸跡が確認され，土師質土器や陶器が出土している。大畑遺跡からは，堀を除く同様な遺構・遺物が出土している。

近世になると，町の中心部を南北に走る水戸街道に沿って，長岡，小幡は宿駅として発展した。涸沼南岸の網掛，宮ケ崎，海老沢は水上交通の要所として栄え，水戸藩をはじめ，仙台藩など奥州諸藩と江戸を結ぶ物資輸送の中継地として重要な役割を果たしていた。

※　文中の（　）内の番号は，表1，第1図の該当番号と同じである。

註

1）茨城県教育財団　「一般国道6号改修工事地内埋蔵文化財調査報告書　奥谷遺跡　小鶴遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第50集　1989年3月

2）茨城県教育財団　「茨城中央工業団地造成工事地内文化財調査報告書　南小割遺跡　權現堂遺跡　親塚古墳　後原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第129集　1998年3月

3） 茨城県教育財団　「北関東自動車道(友部～水戸)建設地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　矢倉遺跡　後口原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第135集　1998年３月

4）茨城県教育財団　「北関東自動車道(友部～水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　大作遺跡　大畑遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第136集　1998年３月

5）茨城県教育財団　「やさしさのまち『桜の郷』整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　石原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第163集　2000年３月

6）茨城町史編さん委員会　『茨城町史　通史編』　1995年２月

7）茨城町教育委員会　『小幡北山埴輪製作遺跡』　1989年２月

8）６）に同じ

9）６）に同じ

10）６）に同じ

11）６）に同じ

12）茨城県教育財団　「主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書２　宮ケ崎城跡」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第141集　1998年３月

参考文献

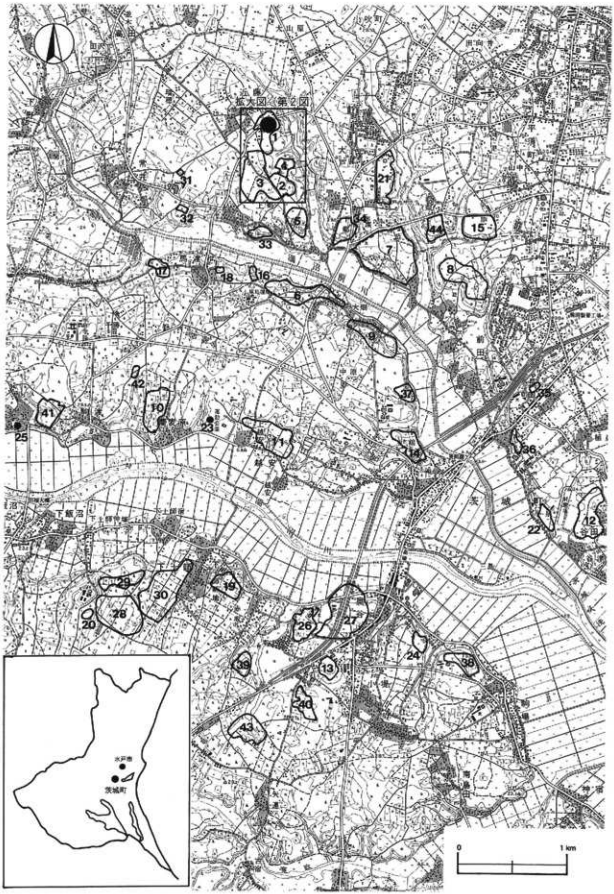
・竹内理三　『角川日本地名大辞典　８茨城県』　角川書店　1983年

・中山信名(栗田寛　補訂)　『新編常陸国誌』　崇書房　1997年

・茨城県教育委員会　『茨城県遺跡地図』　2001年3月

・水戸市史編さん委員会　『水戸市史　上・下巻』　1991年

・内原町史編さん委員会　『内原町史　通史編』　1996年

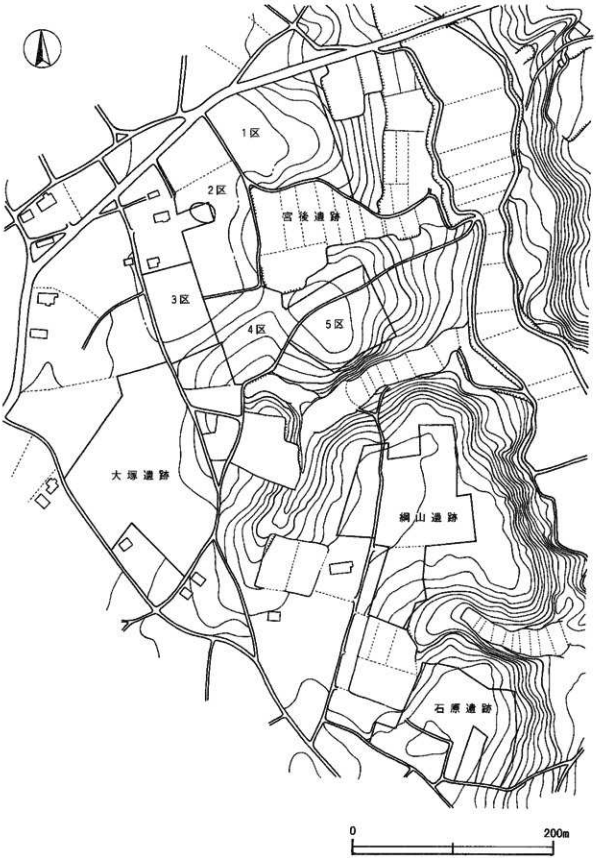


第１図　宮後遺跡周辺遺跡分布図（１）

表1　宮後遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	市町村遺跡番号	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近世
①	宮後遺跡	302-093	○	○	○	○	○	○
2	石原遺跡	302-220		○	○	○	○	
3	大塚遺跡	302-107		○	○	○	○	○
4	鋼山遺跡	302-219		○	○	○	○	○
5	稲荷宮遺跡	302-094			○	○	○	
6	上の前遺跡	302-118		○	○	○	○	
7	大戸下郷遺跡	302-077		○	○	○	○	
8	矢倉遺跡	302-109		○	○	○	○	
9	大畑遺跡	302-078	○	○	○	○	○	○
10	宮上遺跡	302-119		○	○	○	○	
11	中畑遺跡	302-032		○	○	○	○	
12	塚越遺跡	302-111		○		○	○	
13	富士山遺跡	302-031		○		○	○	
14	小鶴遺跡	302-134		○	○			
15	山中遺跡	201-157		○	○	○		
16	東山遺跡	302-092		○	○	○	○	
17	シッペイ沢遺跡	302-138		○		○		
18	東畑遺跡	302-091		○	○	○	○	
19	下士師東遺跡	302-122		○		○	○	
20	高山遺跡	302-120		○		○	○	
21	大戸神宮寺遺跡	302-108		○		○	○	
22	上野堀ノ内遺跡	302-110					○	

番号	遺跡名	市町村遺跡番号	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近世
23	越安貝塚	302-066		○				
24	小堤貝塚	302-067		○	○	○		○
25	宝塚古墳	302-017				○		
26	赤坂南坪遺跡	302-030		○		○	○	
27	奥谷遺跡	302-123		○	○	○	○	
28	面山遺跡	302-039		○		○	○	
29	小山台遺跡	302-121		○		○	○	
30	下士師遺跡	302-029		○		○	○	
31	近藤前遺跡	302-182		○		○	○	
32	八幡山遺跡	302-183		○		○	○	
33	猫崎遺跡	302-185		○	○	○		
34	寺坪遺跡	302-187		○	○	○	○	
35	後久保遺跡	302-189		○				
36	長岡神宮寺遺跡	302-190		○		○		
37	蔵作遺跡	302-195		○		○		
38	二ツ塚遺跡	302-197		○	○	○	○	
39	仲丸遺跡	302-201		○		○		
40	北山東遺跡	302-203		○			○	
41	南小制遺跡	302-216	○	○		○	○	○
42	大作遺跡	302-218	○	○		○		
43	小野北山横穴墓跡遺跡	302-080				○		
44	平須館跡	201-158						○



第2図　宮後遺跡周辺遺跡分布図（2）

第3章 調 査 の 成 果

第1節 遺 跡 の 概 要

宮後遺跡は、東茨城郡茨城町大字近藤字宮前222番地の3ほかに所在し、茨城町の北西部に位置している。遺跡の時期は、旧石器時代から近世にまでわたり、主体は縄文時代と奈良・平安時代である。特に、縄文時代の遺構は、調査区北部の1区と2区に集中している。

検出された縄文時代の遺構は、竪穴住居跡105軒、屋外炉12基、その他の土坑を含めたフラスコ状土坑2015基、土坑墓238基、陥し穴9基、遺物包含層1か所等である。それらの遺構の時期は、前期前葉に比定されるもの、中期中葉から後葉までに比定されるもの、そして出土遺物がなく時期が特定できないものに大別できる。前期前葉の遺構は調査区南部の5区から竪穴住居跡1軒が検出され、良好な一括遺物が出土している。中期中葉から後葉にかけての遺構は1区と2区の北部に密集し、直径が160mに及ぶ環状集落を形成している。調査区内における遺構の分布状況をみると、集落は全体の約半分にあたり、集落は調査区の北側にも広がっていることが考えられる。環状集落の中央部にあたる径40mの範囲には土坑墓が密集し、墓域をなしている。墓域は1区と2区にまたがっており、1区では撹乱が著しいため残存状況は不良であるが、調査2区では土坑墓が墓域の中央部を中心に放射状に配列されていた。墓域の周囲には竪穴住居跡とフラスコ状土坑が巡っている。竪穴住居跡とフラスコ状土坑は濃密に分布しているため重複が著しく、中葉の遺構に後葉の遺構に掘り込まれているものがほとんどで全容が確認できるものは少ない。特に、1区における竪穴住居跡は、撹乱部分が多いためそのほとんどが炉とピットだけを確認したにとどまっている。時期が特定できない縄文時代の遺構としては陥し穴があり、その分布は疎らである。今回の報告は1・3・4・5区における縄文時代の遺構と遺物であるため、その内竪穴住居跡43軒、屋外炉8基、その他の土坑を含めたフラスコ状土坑588基、土坑墓1基、陥し穴6基、遺物包含層1か所を報告する。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に638箱が出土している。縄文時代の遺物は、縄文土器(深鉢・鉢・浅鉢・甕・台付土器・器台)、土製品(耳飾り・土器片錘・土器片円盤)、石器(石皿・磨石・敲石・打製石斧・磨製石斧・石匙・石鏃・スタンプ形石器)、石製品(大珠)である。本遺跡における遺物の特徴としては、中期中葉の時期に在地の阿玉台式Ⅲ・Ⅳ土器と共に大木8a式土器と七郎内Ⅱ群土器が出土し、それにわずかではあるが勝坂Ⅲ式土器が伴出すること、土坑墓から出土した翡翠製大珠を含め4点の翡翠製大珠が出土していることである。これらの資料は、茨城県中央部における中期中葉の土器様相と拠点的集落の様相を解明するための好資料となるであろう。

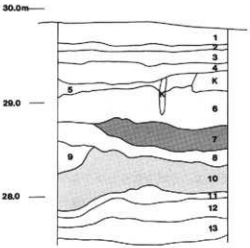
第2節 基 本 層 序

当遺跡の2区中央部(E3区)にテストピットを設定し、深さ2.5mまで掘り下げて、土層堆積状況(第3図)を確認した。

第1～3層は、40cm前後の厚さで、黒褐色の耕作土層である。

第4層は、8～20cmの厚さで、ローム小ブロックを微量含んだ黒色土である。

第5層は、6～14cmの厚さで、白色礫を微量含んだ褐色のソフトローム層である。



第3図　基本土層図

第6層は，30～48cmの厚さで，褐色のハードローム層である。

第7層は，18～24cmの厚さで，褐色のハードローム層である。第二黒色帯(ＢＢⅡ)と考えられる。

第8層は，16～40cmの厚さで，鹿沼パミス小ブロックを中量含んだ褐色のハードローム層である。

第9層は，30～38cmの厚さで，鹿沼パミス中ブロックを中量含んだ褐色のハードローム層である。

第10層は，32～40cmの厚さで，橙色の鹿沼パミス層である。

第11層は，10～16cmの厚さで，暗褐色のハードローム層である。

第12層は，10～20cmの厚さで，黒色粒子を微量含んだ褐色のハードローム層である。

第13層は，12～24cmの厚さで，褐色のハードローム層である。

住居跡・土坑等の遺構は，第5層上面で確認した。

第3節　遺構と遺物

1　竪穴住居跡

1・3・4・5区の調査において，縄文時代の竪穴住居跡43軒を検出した。以下，それらの住居跡について記載する。

第2号住居跡（第4・5図）

位置　調査1区の北西部，B4b3区。

重複関係　第128・129・272号土坑の上に本跡が構築されており，本跡が新しい。第44・74・130号土坑と重複するが，本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径6.12m，短径4.88mの楕円形である。

主軸方向　N－40°－W

壁　壁高は8～25cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦で，中央部から北部にかけて一部が硬化している。

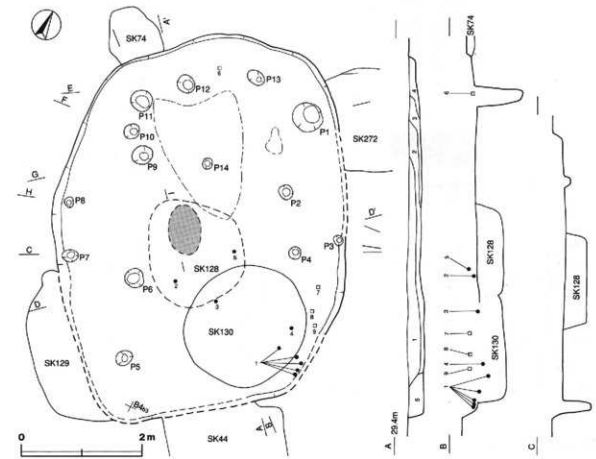
ピット　14か所(P1～P14)。その性格はいずれも不明である。

炉　中央部に付設されている。南東側のほぼ半分が撹乱を受け，長径及び短径は不明であるが，楕円形を呈する地床炉と考えられる。床面を18cmほど掘りくぼめており，炉床は，火熱により赤変硬化している。

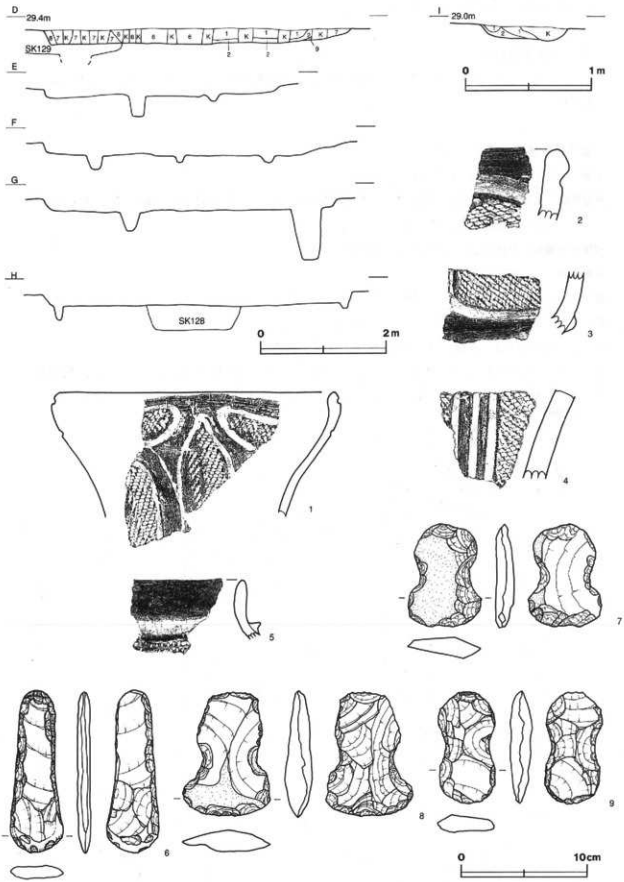
炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，炭化粒子少量

2　赤 褐 色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，炭化粒子微量



第4図　第2号住居跡実測図



第5図　第2号住居跡・出土遺物実測図

覆土 9層からなり，レンズ状に堆積することから，自然堆積である。

土層解説

1 黒 色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化材少量
2 暗褐色 ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
3 褐 色 ローム粒子多量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，炭化粒子少量
4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子・ローム中ブロック微量
5 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子少量
6 黒褐色 ローム小ブロック多量，炭化粒子・ローム粒子中量，炭化粒子少量
7 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子少量
8 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
9 明褐色 ローム大ブロック多量

遺物 復元可能土器1点を含む縄文土器片180点，打製石斧4点が出土している。うち，縄文土器5点，打製石斧4点を抽出・図示した。4は深鉢の胴部片で床面から，2は深鉢の口縁部片，3は深鉢の頸部片でいずれもほぼ床面から，1は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片で，南東壁際の床面から覆土中層にかけて，5は波の口縁部片で覆土中層から出土している。6～9は打製石斧で，6は覆土下層から，7～9は覆土上層から出土している。

所見 時期は，出土土器及び住居の形態から，中期後葉(加曽利EⅢ式期)と考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表（第5図）

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
1	深 鉢 縄文土器	A 22.0 B (9.8)	口縁部から頸部にかけての破片。頸部は外傾して立ち上がり，口縁部は開きながら内弯する。口縁部は格円形の区画文が，頸部以下は「∩」字状文の磨消懸垂文が，それぞれ8単位づつ施されている。 RLの単節縄文が，区画文内には横方向に，頸部以下には縦方向に充填されている。	長石・石英 にぶい褐色 普通	P2002 20% PL21
2	深 鉢 縄文土器	B (5.6)	口縁部片。隆帯と沈線により文様を描出している。地文はLRの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	TP2001 5%
3	深 鉢 縄文土器	B (5.0)	頸部片。隆帯と沈線により文様を描出している。地文はRLの単節縄文を横方向に施している。	長石・石英・雲母 灰白色 普通	TP2002 5%
4	深 鉢 縄文土器	B (6.6)	胴部片。3条一組の沈線を懸垂させ，沈線間を磨り消している。地文はLRの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	TP2003 5%
5	波 縄文土器	B (4.6)	口縁部片。口縁部は直立する。口縁部と胴部の境に2列の刻交文を有する隆帯を巡らしている。	長石・石英・雲母 橙色 普通	TP2004 5%

図版番号	器 種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 質	特 徴	備 考
6	磨製石斧	12.9	4.1	1.3	85.4	緑泥片岩	撥形。刃部を研磨している。	Q2001 PL45
7	打製石斧	8.2	5.9	1.6	77.4	粘 板 岩	分銅形。下端がやや広く，抉入部は深い。	Q2002 PL45
8	打製石斧	10.0	6.9	2.2	132.1	安 山 岩	分銅形。下幅が広く，抉入部は深い。	Q2003 PL45
9	打製石斧	8.9	4.5	1.7	84.6	粘 板 岩	分銅形。上下幅がほぼ均等。抉入部は浅い。	Q2004 PL45

第5号住居跡（第6・7図）

位置 調査1区の北西部，B4f6区。

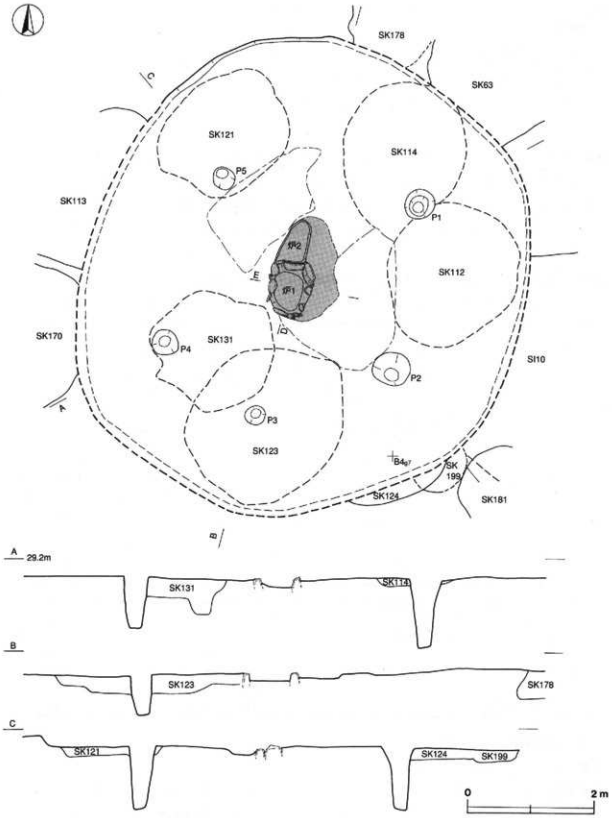
重複関係 第63・112・114・121・123・124・131・199号土坑の上に本跡が構築されており，本跡が新しい。第10号住居跡及び第113・170・178号土坑と重複するが，本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形 ピットの配列から，長径7.32m，短径6.93mの楕円形と推定される。

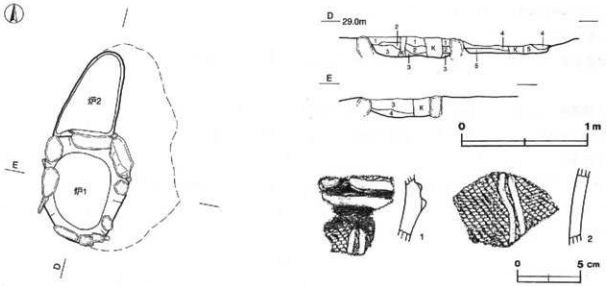
主軸方向 N－9°－E

壁 北壁の一部が残存しており，壁高は18cmで，外傾して立ち上がる。

床 残存する床面は平坦で，中央部にある炉の北西部及び南東部の一部が硬化している。



第6図　第5号住居跡実測図



第７図　第５号住居跡・出土遺物実測図

ピット　５か所(Ｐ１～Ｐ５)。Ｐ１・Ｐ３～Ｐ５は径30～48cmの円形，Ｐ２は長径62cm，短径54cmの楕円形で，深さは68～100cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。

炉　石囲炉(炉１)及び地床炉(炉２)が重複して検出された。ともに中央部に付設されている。地床炉は南側を石囲炉に掘り込まれており，石囲炉の炉石の内側のみが火を受けて赤変していることから，地床炉が石囲炉より古いと考えられる。地床炉の現存部は長径72cm，短径48cmで，楕円形を呈すると考えられ，22cmほど床面を掘りくぼめている。石囲炉は隅丸長方形を呈し，長軸86cm，短軸69cmであり，32cmほど床面を掘りくぼめている。炉石のほとんどが花崗岩で，特に炉石の内側部分が火を受け，ぼろぼろの状態で出土している。炉の東側に偏って焼土の範囲が認められる。

炉１土層解説

1　極暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量，ローム粒子微量
2　極暗赤褐色　焼土小ブロック中量，焼土粒子少量，ローム粒子微量
3　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，ローム粒子微量

炉２土層解説

4　暗赤褐色　焼土粒子少量，焼土小ブロック微量，炭化粒子微量，ローム粒子微量
5　暗赤褐色　焼土小ブロック中量，焼土中ブロック・焼土粒子少量，ローム粒子微量

遺物　縄文土器片９点が出土している。うち，縄文土器２点を抽出・図示した。１の深鉢口縁部片及び２の深鉢胴部片が，覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から，中期後葉(加曽利ＥⅠ式期)と考えられる。

第５号住居跡出土遺物観察表（第７図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	Ｂ（5.5）	口縁部片。隆帯と沈線により文様を描出している。地文はＬＲの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母にぶい黄褐色 普通	TP2005　5％
2	深　鉢 縄文土器	Ｂ（6.0）	胴部片。縦方向に２条一組の沈線により文様を描出している。地文はＲＬの単節縄文を横方向に施している。	長石・石英・雲母にぶい黄褐色 普通	TP2006　5％

第６号住居跡（第８・９図）

位置　調査１区の西部，Ｃ４b4区。

確認状況　壁は残存していないが，炉と床の硬化面が確認されたこと，及びピットの配列から住居跡と判断した。

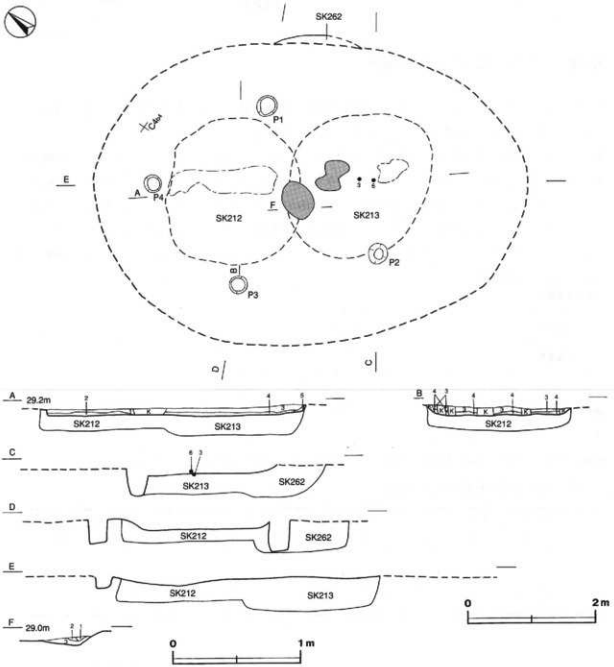
重複関係　第212・213・262号土坑の覆土上面が本跡の床として踏み固められており，本跡が新しい。

規模と平面形　ピットの配列から，長径6.86m，短径4.76mの楕円形と推定される。

主軸方向　Ｎ－35°－Ｗ

床　中央部にある炉の周囲及び北西部に一部残存しており，ほぼ平坦で一部が硬化している。

ピット　４か所(Ｐ１～Ｐ４)。Ｐ１～Ｐ４は径27～35cmの円形で，深さは43～48cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。



第８図　第６号住居跡実測図

炉　中央部に付設されている。長径63.0cm，短径48.0cmで，楕円形を呈する地床炉である。約10cmほど床面を掘りくぼめている。炉床は赤変硬化している。

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土中ブロック多量
2　極暗褐色　焼土粒子中量，ローム粒子微量
3　極暗褐色　焼土粒子・ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

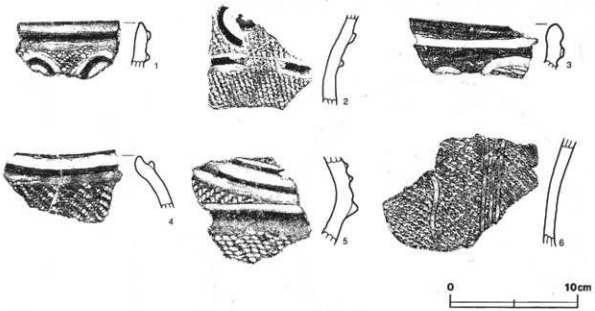
覆土　5層に分層され，レンズ状に堆積することから自然堆積である。

土層解説

1　黒 褐 色　ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子微量
2　暗 褐 色　ローム粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
3　黒 褐 色　ローム粒子微量
4　極暗褐色　ローム粒子微量
5　黒 褐 色　ローム粒子少量

遺物　縄文土器片37点が出土している。うち，縄文土器６点を抽出・図示した。３は深鉢口縁部片で中央部床面から，６は深鉢胴部片で中央部のほぼ床面から，１は深鉢口縁部片でＰ２の覆土中から，２は深鉢口縁部から頸部にかけての破片でＰ３の覆土中から，４・５は深鉢口縁部片で覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から，中期後葉(加曽利ＥⅠ～Ⅱ式期)の可能性が考えられる。



第９図　第６号住居跡出土遺物実測図

第６号住居跡出土遺物観察表（第９図）

図版番号	器　様	胴測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B（3.2）	口縁部片。口縁部は直立する。口唇部直下に隆帯を巡らしている。地文はＬＲの単節縄文を横方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	TP2007　5％
2	深　鉢 縄文土器	B（7.2）	口縁部から頸部にかけての破片。口縁部は隆帯により渦巻文を施し，頸部と胴部の境に隆帯を巡らしている。	長石・石英・雲母・ 赤色粒子・礫 にぶい黄褐色，普通	TP2008　5％
3	深　鉢 縄文土器	B（3.6）	口縁部片。口縁部は直立する。沈線と隆帯により文様を描出している。	長石・石英・雲母 にぶい黄褐色 普通	TP2009　5％
4	深　鉢 縄文土器	B（4.5）	口縁部片。口縁部は内傾する。口唇部直下に隆帯を巡らしている。地文はＬＲの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母・ 礫 にぶい褐色，普通	TP2010　5％

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
5	深　鉢 縄文土器	B（6.9）	口縁部から頸部片。頸部は外傾して立ち上がり，口縁部は内彎する。沈線と隆帯により文様を描出している。地文はＬＲの羊歯縄文を，口縁部では横方向に，頸部では縦方向に施している。	長石・石英・雲母・礫 橙色，普通	TP2011　5％
6	深　鉢 縄文土器	B（8.5）	頸部片。頸部は外傾して立ち上がる。３条一組の沈線を垂下させている。地文はＬＲＬの複節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 褐色 普通	TP2012　5％

第７号住居跡（第10～12図）

位置　調査１区の北西部，Ｂ４h7区。

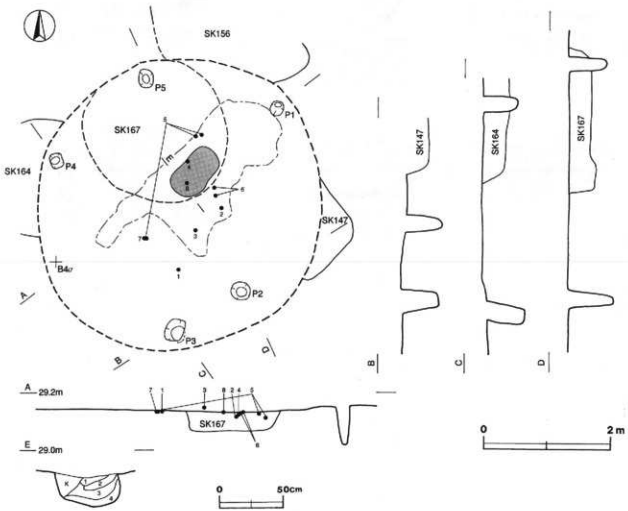
確認状況　壁は残存していないが，炉とその周りを巡るピット，及び中央部の床の硬化面を確認したことから，住居跡と判断した。

重複関係　第164号土坑が出土土器から，第167号土坑が本跡の床面下より検出されたことから，ともに本跡が新しい。第147・156号土坑と重複するが，本跡との新旧関係は不明である。

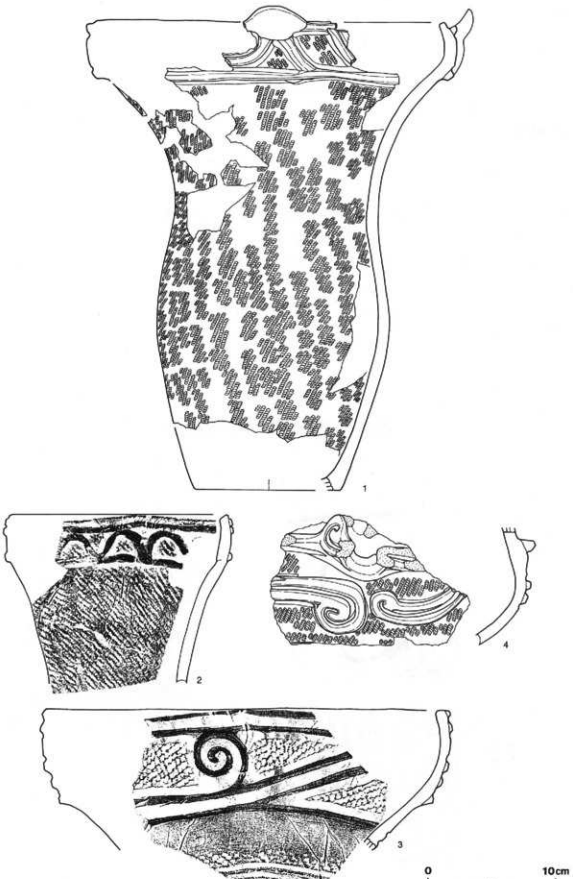
規模と平面形　ピットの配列から，長径4.84m，短径4.43mの楕円形と推定される。

主軸方向　Ｎ－42°－Ｅ

床　残存する床面は平坦であり，中央部にある炉の周囲が硬化している。



第10図　第７号住居跡実測図



第11図　第７号住居跡出土遺物実測図（１）

ピット　5か所(Ｐ１～Ｐ５)。Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４は径20～32cmの円形で，深さは58～72cmである。Ｐ３・Ｐ５は長径24～42cm，短径20～32cmの楕円形で，深さは60～63cmである。いずれも規模と配列から主柱穴と考えられる。

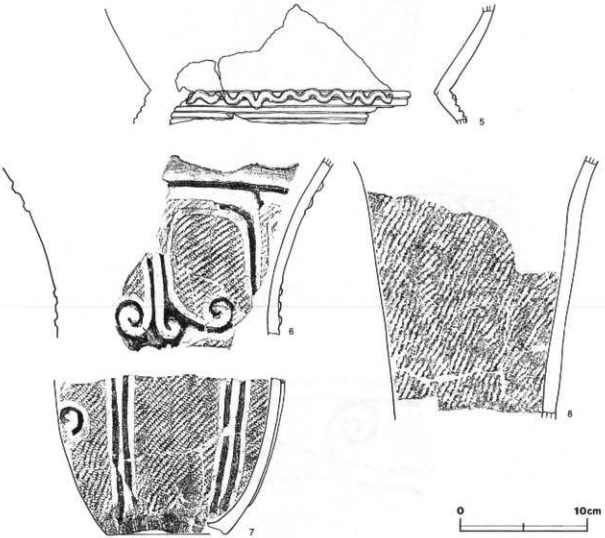
炉　地床炉が中央部に付設されている。長径87cm，短径48cmの楕円形を呈し，25cmほど床面を掘りくぼめている。炉床の一部は赤変硬化している。

炉土層解説

1　黒 褐 色　焼土小ブロック多量
2　明赤褐色　焼土粒子多量
3　にぶい赤褐色　焼土粒子多量
4　褐　　色　焼土粒子中量

遺物　復元可能土器３点を含む縄文土器片258点が出土している。うち，縄文土器８点を抽出・図示した。１は口縁部及び底部の一部を欠損する深鉢，７は深鉢の胴部下半の破片で，ともに南部の床面から，２は深鉢の口縁部から頸部片，３・４は深鉢の口縁部片，５は壺の口縁部片，６・８は深鉢の胴部片で，いずれも中央部の床面から出土している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から，中期後葉(加曽利ＥⅠ式期)と考えられる。



第12図　第７号住居跡出土遺物実測図（２）

第7号住居跡出土遺物観察表（第11・12図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A [27.5] B (38.2) C [11.5]	口縁部及び底部の一部を欠損する。胴部は内弾気味に立ち上がり，胴部で外反し，口縁部は内弾する。短状肥手を有する。口唇部直下及び口縁部と頸部の境に沈線と隆帯を巡らし，口縁部文様帯を形成している。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P2005 70% Pl.21
2	深鉢 縄文土器	A [17.0] B (13.3)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は直立する。口縁部直下及び口縁部と胴部の境に隆帯を巡らして口縁部文様帯を形成している。文様帯内には隆帯による波状文を施している。地文はＲＬの単節縄文を横方向に施している。	雲母・パミス にぶい赤褐色 普通	P2006 20%
3	深鉢 縄文土器	A [31.6] B (11.2)	口縁部から頸部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は内弾する。口縁部は隆帯と沈線による渦巻文を施している。胴部は無文で研磨している。地文はＬＲの単節縄文で，口縁部は横方向に，胴部は縦方向に施している。	石英・雲母 にぶい橙色 普通	P2007 10%
4	深鉢 縄文土器	B (10.0)	把手を有する口縁部片。口縁部は内弾する。隆帯により渦巻文を施している。地文はＬＲの単節縄文を横方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P2008 10%
5	深鉢 縄文土器	B (9.4)	口縁部から頸部にかけての破片。頸部は内傾して立ち上がり，頸部と口縁部の境で屈曲し，口縁部は外傾する。口縁部は無文でよく研磨されている。頸部は沈線を施し，頸部と口縁部の境に隆帯による波状文を巡らしている。	石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P2009 10%
6	深鉢 縄文土器	B (14.0)	胴部片。胴部は外反して立ち上がる。胴部には２条一組の隆帯により頸部が渦巻文となる文様を施している。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	雲母・パミス にぶい赤褐色 普通	P2010 10%
7	深鉢 縄文土器	B (12.4) C 9.4	胴部下半の破片。胴部は内弾気味に立ち上がる。２条一組の隆帯及び沈線を縦位に施している。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	石英・雲母 にぶい褐色 普通	P2011 20%
8	深鉢 縄文土器	B (20.8)	胴部の破片。胴部は外傾して立ち上がる。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	石英・雲母・針状鉱物 にぶい橙色，普通	P2012 20%

第10号住居跡（第13・14図）

位置　調査１区の北西部，Ｂ４f7区。

重複関係　第112号土坑に掘り込まれており，本跡が古い。第５号住居跡及び第181号土坑と重複しているが，本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　径4.10mほどの円形である。

壁　壁高は５～８cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦で，わずかに踏み固められている。

ピット　５か所（Ｐ１～Ｐ５）。Ｐ１～Ｐ５は，長径25～47cm，短径20～46cmの楕円形で，深さは28～95cmである。

炉　北壁寄りに１基（炉１），南東壁寄りに１基（炉２）検出されている。炉１は長径107cm，短径53cmの楕円形で，床面を10cmほど掘りくぼめている。炉２は長径68cm，短径47cmの楕円形で，床面を16cmほど掘りくぼめている。ともに地床炉で，炉床は火を受けて赤変している。炉１と炉２の新旧は不明である。

炉１土層解説

1　黒褐色　ローム粒子少量，焼土小ブロック微量
2　極暗褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，炭化粒子微量
3　黒褐色　焼土粒子・ローム粒子微量
4　赤褐色　焼土大ブロック多量

炉２土層解説

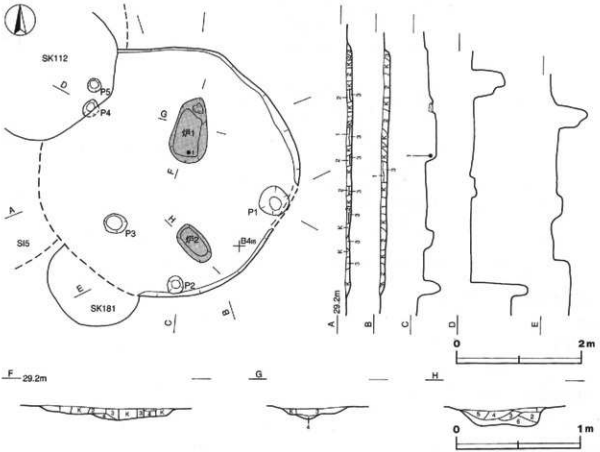
1　黒　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子少量
3　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
4　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム大ブロック微量
5　黒　色　ローム小ブロック少量
6　暗褐色　ローム小ブロック少量，焼土粒子微量

覆土　3層からなり，レンズ状に堆積することから自然堆積である。

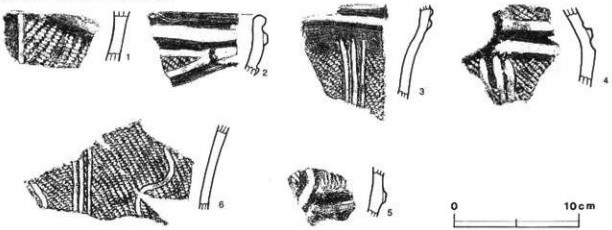
土層解説
1　黒褐色　炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
2　暗褐色　ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
3　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子，ローム中ブロック少量，炭化粒子微量

遺物　縄文土器片55点が出土している。うち，縄文土器8点を抽出・図示した。1は深鉢の胴部片で，炉1の中層から，2・5は深鉢の口縁部片，4は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片，3は深鉢の頸部から胴部にかけての破片，6は深鉢の胴部片でいずれも覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から，中期後葉(加曽利ＥⅠ～Ⅱ式期)の可能性が考えられる。



第13図　第10号住居跡実測図



第14図　第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表（第14図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B（3.9）	胴部片。胴部は沈線による懸垂文を磨り消している。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・礫 にぶい橙色 普通	TP2013　5％
2	深鉢 縄文土器	B（4.8）	口縁部片。口縁部はわずかに内彎する。隆帯と沈線により文様を描出している。地文はＲＬの単節縄文を横方向に施している。	長石・石英・礫 にぶい黄橙色 普通	TP2014　5％
3	深鉢 縄文土器	B（7.4）	頸部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，頸部に至る。頸部と胴部の境に隆帯を巡らしている。胴部には３条一組の沈線を垂下させている。地文はＬＲの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・礫 浅黄色 普通	TP2015　5％
4	深鉢 縄文土器	B（6.4）	口縁部から頸部にかけての破片。口縁部と頸部の境に隆帯と沈線により文様を描出している。頸部以下には３条一組の沈線を垂下させている。地文はＬＲの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・礫 にぶい褐色 普通	TP2016　5％
5	深鉢 縄文土器	B（3.6）	口縁部片。隆帯と沈線により文様を描出している。地文はＲＬの単節縄文を横方向に施している。	長石・雲母・礫 にぶい橙色 普通	TP2017　5％
6	深鉢 縄文土器	B（6.7）	胴部片。胴部は３条一組の沈線を垂下させている。地文はＬＲの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・礫 にぶい褐色 普通	TP2018　10％

第11号住居跡（第15・16図）

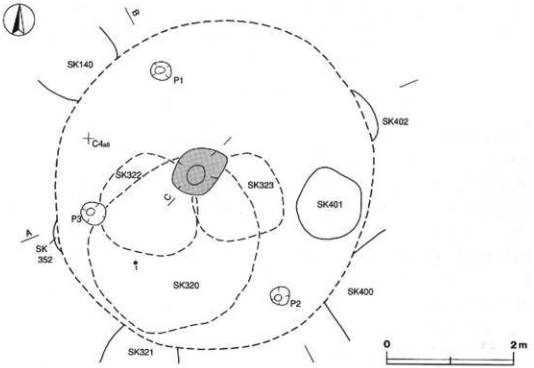
位置　調査１区の西部，Ｃ４a8区。

確認状況　壁や床は残存していないが，炉とピットを確認したことから住居跡と判断した。

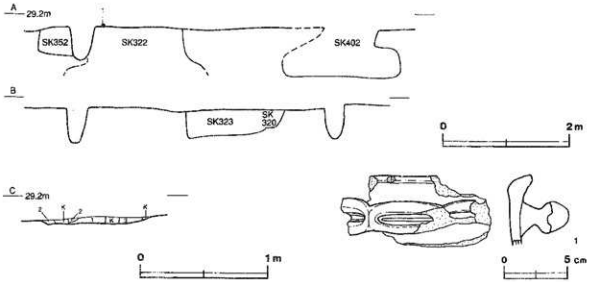
重複関係　第320・322・323・352号土坑の上に本跡が構築されており，本跡が新しい。第13号住居跡及び第140・321・400・401・402号土坑と重複しているが，本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　径5.20mの円形と推定される。

ピット　３か所(Ｐ１～Ｐ３)。Ｐ１～Ｐ３は径29～40cmの円形で，確認面からの深さは51～56cmである。



第15図　第11号住居跡実測図



第16図　第11号住居跡・出土遺物実測図

炉　中央部に付設されている。長径94cm，短径71cmの楕円形を呈する地床炉である。床面を5cmほど掘りくぼめており，炉床は，火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，焼土小ブロック・炭化粒子微量
2　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子微量
3　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子少量，ローム小ブロック・ローム粒子微量

遺物　縄文土器片3点が出土している。うち，縄文土器1点を抽出・図示した。1は深鉢の口縁部片で，南西部の遺構確認面から出土している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から，また，阿玉台Ⅲ式期と考えられる第322号土坑の上に構築されていることから，中期中葉以降の可能性が考えられる。

第11号住居跡出土遺物観察表（第16図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B（5.5）	口縁部片。口縁部は直立して立ち上がり，口唇部内面に稜がある。口唇部直下に縦点が「X」字状になる縄状の貳帯を巡らしている。	石英・雲母 褐色 普通	P2013　5%

第12号住居跡（第17図）

位置　調査1区の南西部，B4i6区。

確認状況　壁や床は残存していないが，炉とピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　本跡の範囲は不明であるが，炉とピットの配置状況から，第151・152・153・166・246・247・248・287・306号土坑と重複している可能性が考えられる。いずれも本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　重複が激しく覆土も確認できなかったため，不明である。

ピット　2か所(P1・P2)。ともに径28～30cmの円形で，確認面からの深さはP1が33cm，P2が36cmである。

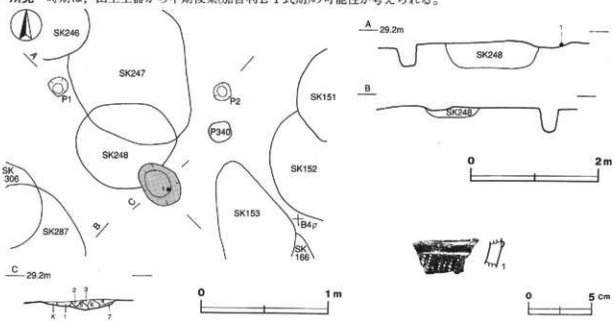
炉　長径71cm，短径69cmで，ほぼ円形を呈する地床炉である。床面を8cmほど掘りくぼめており，炉床は火を受けて赤変している。

炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック少量
2　赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量
3　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック・炭化粒子中量
4　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量

5　暗 褐 色　焼土粒子少量
6　暗赤褐色　焼土粒子少量，焼土中ブロック微量
7　極暗赤褐色　焼土粒子中量

遺物　縄文土器片４点が出土している。うち，縄文土器１点を抽出・図示した。１は深鉢の口縁部片で，炉の覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期後葉(加曽利ＥⅠ式期)の可能性が考えられる。



第17図　第12号住居跡・出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表（第17図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B（2.3）	頭部片。頭部には隆帯を施している。地文はＬＲの単節縄文を横方向に施している。	長石・石英 橙色 普通	TP2053　5％

第13号住居跡（第18・19図）

位置　調査１区の中央部，Ｂ４j8区。

確認状況　壁や床は残存していないが，炉とピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　本跡の範囲は不明であるが，炉とピットの配置状況から，第11・15号住居跡及び第146・295・296・324・378・402号土坑と重複している可能性が考えられる。第295・378・402号土坑の出土土器から，本跡が新しい。第11・15号住居跡及び第146・296・324号土坑との新旧関係は不明である。

ピット　２か所。Ｐ1は，径26cmの円形で，確認面からの深さは34cm，Ｐ２は径50cmの円形で，確認面からの深さは35cmである。

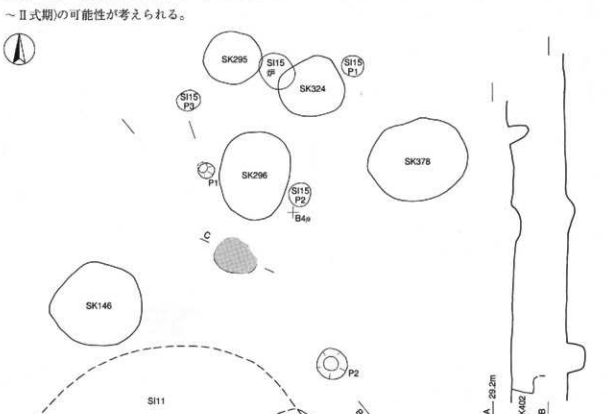
炉　長径6.90cm，短径5.30cmで，楕円形を呈する地床炉である。床面を８cmほど掘りくぼめており，炉床は，火を受けて赤変している。

炉土層解説
1　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
2　暗 褐 色　焼土粒子少量
3　暗 褐 色　焼土粒子中量，焼土小ブロック微量
4　にぶい赤褐色　焼土粒子少量
5　暗 褐 色　焼土粒子少量，焼土小ブロック微量
6　暗 褐 色　焼土粒子・炭化粒子微量

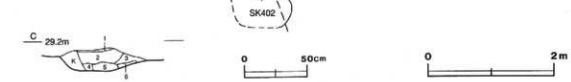
遺物　縄文土器片18点が出土している。うち，縄文土器３点を抽出・図示した。１は深鉢の口縁部片，２は口

縁部から頸部にかけての破片，3は扇状把手部でいずれも炉の覆土中から出土している。

所見　本跡は遺存状況が悪く，また，出土遺物も少ないため，時期は明確ではないが，中期後葉(加曽利EⅠ～Ⅱ式期)の可能性が考えられる。



第18図　第13号住居跡実測図



第19図　第13号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表（第19図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B（3.3）	口縁部片。口縁部は直立する。口縁部は隆帯と沈線で文様を描出している。地文はRLの単節縄文を横方向に施している。	長石・石英 橙色 普通	TP2021　5％
2	深　鉢 縄文土器	B（4.3）	口縁部片から頸部にかけての破片。頸部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに内湾する。口縁部と頸部の境に2条一組の隆帯を巡らしている。地文は，口縁部にはRLの単節縄文を横方向に，頸部以下にはRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石 にぶい橙色 普通	TP2022　5％
3	深　鉢 縄文土器	B（4.5）	扇状把手部。把手部は外傾し，無文である。	長石・石英 にぶい褐色 普通	TP2023　5％

第14号住居跡（第20図）

位置　調査１区の南部，Ｃ４f4区。

確認状況　壁や床は残存していないが，炉とその周りを巡るピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　第292・294・300・376・457号土坑と重複しているが，いずれも新旧関係は不明である。

規模と平面形　径4.30mの円形と推定される。

ピット　４か所(Ｐ1～Ｐ４)。Ｐ1・Ｐ3・Ｐ４は径27～40cmの円形，Ｐ2は長径37cm，短径30cmの楕円形で，確認面からの深さは19～36cmである。

炉　長径59cm，短径46cmで，ほぼ楕円形を呈する地床炉である。確認面から５cmほど下に炉床が見られる。炉床面は，火を受けて赤変硬化している。

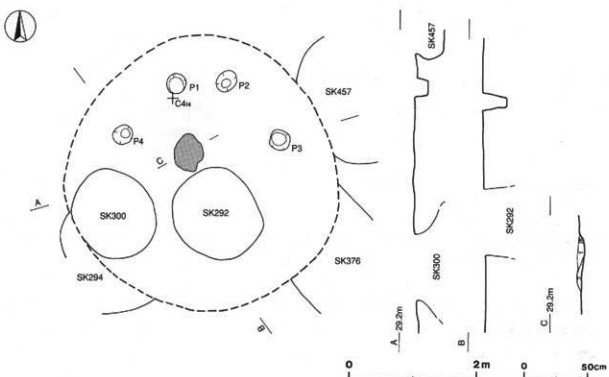
炉土層解説

1　暗褐色　焼土粒子多量，焼土中ブロック中量，ローム小ブロック少量，ローム小ブロック微量

2　褐　色　ローム小ブロック中量，ローム粒子少量

遺物　縄文土器片４点が出土している。いずれも細片で図示できなかった。

所見　時期は，住居の形態から縄文時代と考えられる。



第20図　第14号住居跡実測図

第15号住居跡（第21図）

位置　調査１区の中央部，Ｂ４i8区。

確認状況　壁や床は残存しないが，炉とその周りを巡るピットを確認したことから住居跡と判断した。

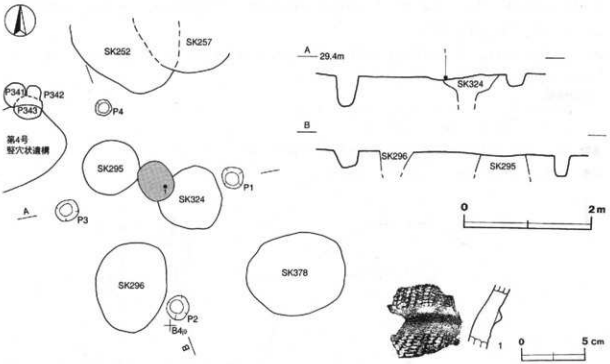
重複関係　第295・378号土坑の出土土器から，また，第324号土坑の上に本跡の炉が構築されていることから，本跡が新しい。第４号竪穴状遺構に掘り込まれており，本跡が古い。第13号住居跡及び第252・257・296号土坑，第341・342・343ピットと重複しているが，本跡との新旧関係は不明である。

ピット　４か所(Ｐ1～Ｐ4)。Ｐ1～Ｐ4は，径25～49cmの円形で，確認面からの深さは20～48cmである。

炉　長径75cm，短径52cmで，楕円形を呈する地床炉である。確認面から約6cmほど下に炉床が見られるが，焼土がわずかに認められるのみである。

遺物　縄文土器片35点が出土している。うち，縄文土器1点を抽出・図示した。1は深鉢の胴部から頸部にかけての破片で，炉床面から出土している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から，中期後葉(加曽利ＥⅠ式期)の可能性が考えられる。



第21図　第15号住居跡・出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表（第21図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B（5.0）	胴部から頸部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり，頸部は外傾する。胴部と頸部の境に隆帯を巡らしている。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	TP2024　5％

第18号住居跡（第22図）

位置　調査1区の中央部，Ｃ4b7区。

確認状況　壁や床は残存していないが，炉とその周りを巡るピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　第365・434・435・518・519号土坑の上に構築されており，本跡が新しい。第19号住居跡の炉の上の本跡の炉が構築されており，本跡が新しい。第308・336・375・383・436・446・517号土坑及び第327・344・345号ピットと重複しているが，いずれも本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径5.19m，短径5.08mの円形と推定される。

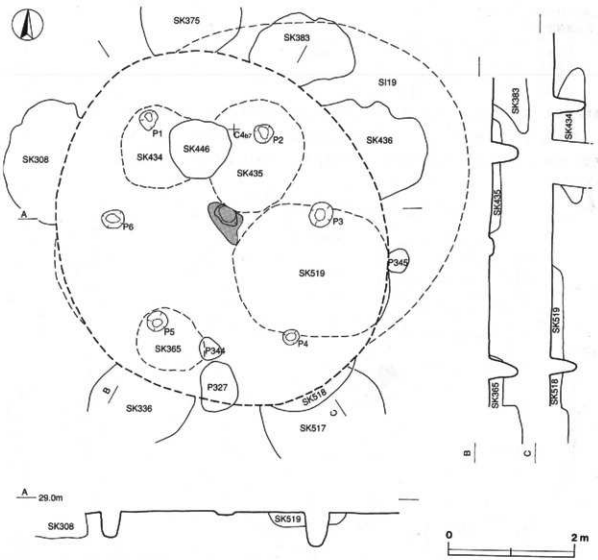
主軸方向　N－37°－W

ピット　6か所(P1～P6)。P1・P6はそれぞれ長径35cm，短径25cm及び30cmの楕円形，P2～P5は径23～39cmの円形であり，確認面からの深さは41～56cmである。炉の周りをほぼ等間隔に巡っており，配列から主柱穴と考えられる。

炉　中央部に付設されている。長径40cm，短径36cmで，ほぼ楕円形を呈する地床炉である。確認面において炉

を中心に長軸77cm，短軸46cmの不整形の範囲で焼土が認められる。確認面から約8cmほど下に炉床が見られる。炉床は，火を受けて赤変硬化している。

所見　時期は，遺物が出土していないため明確ではないが，阿玉台Ⅳ式期と考えられる第434・519号土坑の上に構築されていることから，それ以降の縄文時代と考えられる。



第22図　第18号住居跡実測図

第19号住居跡（第23・24図）

位置　調査1区の西部，C4b7区。

確認状況　第22号住居跡の炉の下に本跡の炉が存在した。壁や床は残存していないが，炉とその周りを巡るピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　本跡が第435・436・518・519号土坑の上に構築されており，本跡が新しい。第18号住居跡の炉が本跡の炉の上に構築され，本跡が古い。第308・336・365・375・382・383・434・446・517号土坑及び第327・344・345号ピットと重複しているが，本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径6.97m，短径5.55mの楕円形と推定される。

主軸方向　N－68°－E

ピット　5か所(P1～P5)。P1は長径40cm，短径34cmの楕円形，P2～P5は径26～34cmの円形であり，確認面からの深さは14～34cmである。

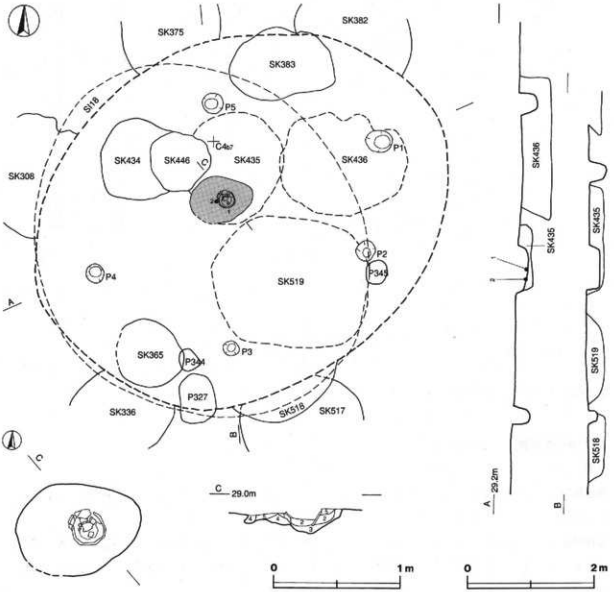
炉　中央部に付設されている。長径100cm，短径72cmの楕円形で，ほぼ中央部に深鉢の上半部を埋設させた土器埋設炉である。炉の深さは，埋設された深鉢の口唇部から18cmで，炉の覆土は5層に分層された。深鉢及び炉床は火を受けて赤変している。

炉土層解説

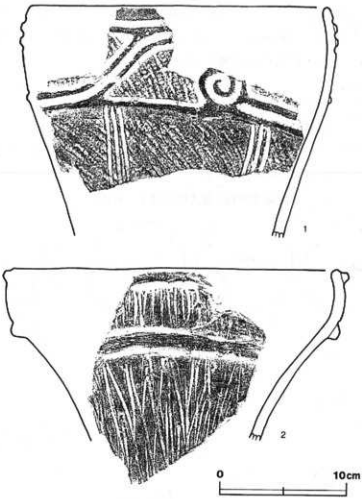
1　赤 褐 色　焼土小ブロック多量，焼土粒子中量，炭化粒子微量
2　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，炭化粒子微量
3　暗赤褐色　焼土粒子・ローム粒子少量
4　暗赤褐色　焼土粒子少量，炭化粒子微量
5　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子微量

遺物　縄文土器片32点が出土している。うち，縄文土器2点を抽出・図示した。1は埋設土器の深鉢の口縁部から胴部片で，正位に埋設されている。2は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片で覆土から出土している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から，中期後葉（加曽利ＥⅠ式期）と考えられる。



第23図　第19号住居跡実測図



第24図　第19号住居跡出土遺物実測図

第19号住居跡出土遺物観察表（第24図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	A［23.4］ B（18.2）	口縁部から胴部片。胴部は外傾して立ち上がり,口縁部は内彎する。口縁部には隆帯と沈線で渦巻文や区画文を施している。胴部には3条一組の沈線を垂下させている。地文として口縁部区画内にはRLの単節縄文を横方向に,胴部にはRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P2016　40% PL21
2	深　鉢 縄文土器	A［25.8］ B（13.6）	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり,口縁部は内彎する。口唇部直下及び口縁部と胴部の境に隆帯を巡らしている。口縁部内及び胴部以下には地文として縦方向の条線文を施している。	石英・雲母 にぶい橙色 普通	P2017　10%

第20号住居跡（第25・26図）

位置　調査１区の西部，Ｂ４i0区。

確認状況　壁や床は残存していないが，炉とその周りを巡るピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　第326・335・350・379・384・423・635号土坑がピット付近に検出され，本跡と重複している可能性が考えられる。第326・335・384・423号土坑が出土土器から，本跡が新しい。第350・379・635号土坑との新旧関係は不明である。

ピット　４か所(Ｐ1～Ｐ４)。Ｐ1は径30cmの円形，Ｐ2～Ｐ４は長径36～43cm，短径29～38cmの楕円形で，確認面からの深さは20～39cmであり，配列から主柱穴と考えられる。

炉　４か所のピットのほぼ対角線交点上に付設されている。口径40cmの深鉢上半部を埋設する土器埋設炉であ

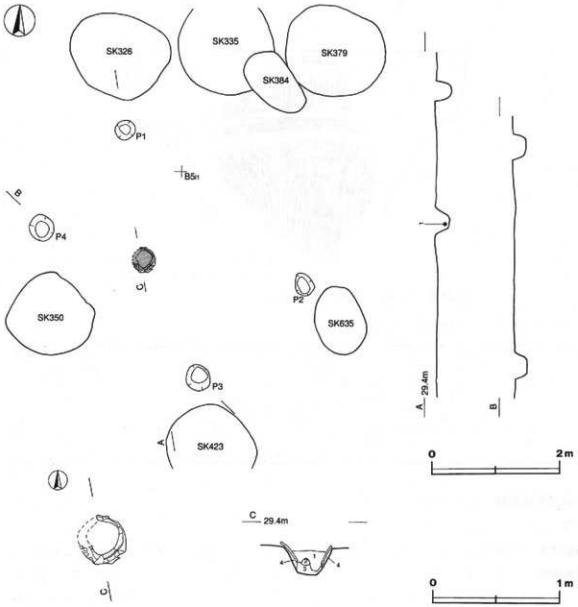
る。埋設された深鉢口縁部の東側に三日月状の焼土の範囲が認められる。炉の深さは，深鉢口唇部から約26cmで，炉の覆土は4層に分層された。覆土中に多くの焼土は認められないが，特に深鉢口縁部の内側が二次焼成により赤変している。なお，第4層は掘り方の覆土である。

炉土層解説

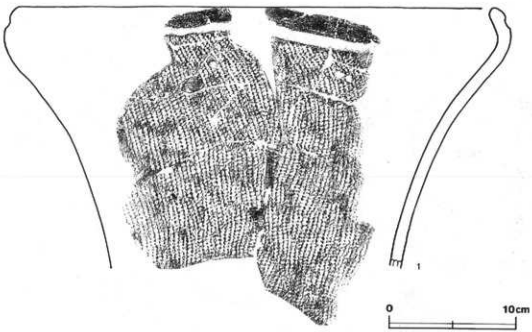
1　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
2　極暗褐色　焼土粒子少量，焼土小ブロック微量
3　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック微量
4　極暗褐色　焼土粒子・ローム粒子微量

遺物　縄文土器片16点が出土している。うち，縄文土器1点を抽出・図示した。1は炉の埋設土器で深鉢の口縁部から胴部にかけての破片を正位に埋設している。

所見　時期は，出土土器から，中期後葉(加曽利EⅢ式期)と考えられる。



第25図　第20号住居跡実測図



第26図　第20号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡出土遺物観察表（第26図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	A〔38.0〕 B（20.5）	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は内彎する。口唇部直下に沈線を巡らしている。施文はＲＬの単節縄文を全面に施してる。	長石・雲母 橙色 普通	P2018　30% PL21

第21号住居跡（第27図）

位置　調査１区の南西部，Ｃ４d7区。

確認状況　壁や床は残存していないが，炉とその周りを巡るピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　第22号住居跡及び第377・380・441・512・513・615・624・625・659号土坑，第346ピットが本跡のピット付近に検出され，本跡と重複している可能性が考えられる。いずれも新旧関係は不明である。

ピット　５か所(Ｐ１～Ｐ5)。Ｐ1～Ｐ5 は長径29～39cm，短径25～34cmの楕円形であり，確認面からの深さは16～36cmである。

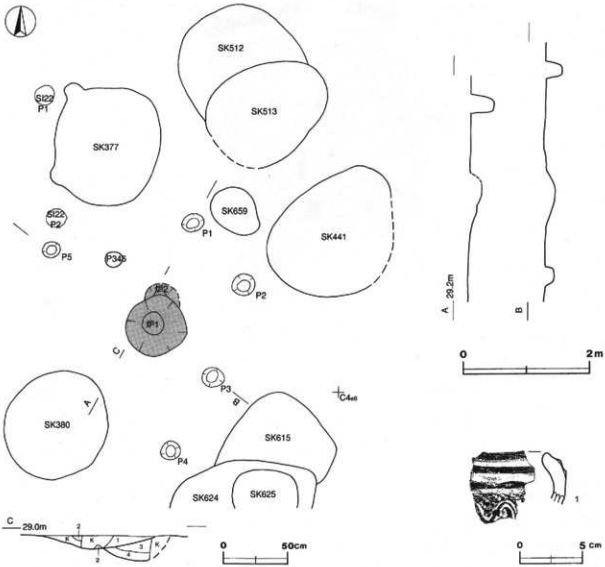
炉　２基の地床炉が重複して検出された。炉１が炉２をこわしてその南東側に所在する。炉１は径100cmの円形で，確認面から10cmほど下に炉床が見られる。炉２は，長径が62cm，短径が54cmと推定される楕円形で，確認面から19cmほど下に炉床が見られる。炉床はともに火を受けて赤変硬化している。

炉１土層解説
1　赤 褐 色　焼土小ブロック多量，焼土中ブロック・焼土粒子中量
2　暗赤褐色　焼土中ブロック・焼土粒子微量

炉２土層解説
3　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量，炭化物微量
4　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム中ブロック少量，炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量

遺物　縄文土器片19点が出土している。うち，縄文土器１点を抽出・図示した。１は深鉢の口縁部片で，炉１の覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から，中期後葉(加曽利ＥⅠ式期)と考えられる。



第27図　第21号住居跡・出土遺物実測図

第21号住居跡出土遺物観察表（第27図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B（4.5）	口縁部片。口縁部は内彎する。口唇部直下に２条一組の隆帯を巡らしている。口縁部には半截竹管による波状沈線を施している。地文はＲＬの単節縄文を横方向に施している。	長石・石英 にぶい橙色 普通	TP2026　5％

第23号住居跡（第28図）

位置　調査１区の中央部，Ｂ５i2区。

確認状況　壁や床は残存していないが，炉とピットが確認されたことから住居跡と判断した。

重複関係　第386・387・389・405号土坑及び第347・348号ピットと重複しているが，本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　不明である。

主軸方向　不明である。

壁　確認されなかった。

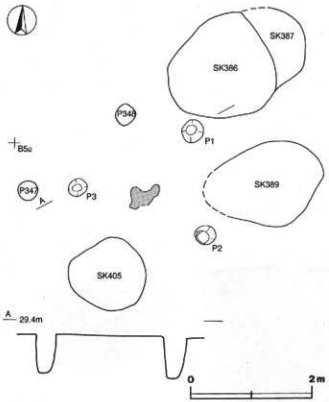
床　確認されなかった。

ピット　3か所(P1～P3)。P1～P3は長径32～39cm，短径28～36cmの楕円形で，確認面からの深さは66～68cmである。その性格は不明である。

炉　長軸59cm，短軸38cmで，不定形を呈する地床炉である。確認面において炉床を検出した。炉床面は，火を受けて赤変硬化している。

遺物　確認面において，炉の北部近くから，いずれも図示できないが縄文土器細片1点及び炉石と考えられる拳大の花崗岩1点が出土している。

所見　時期は，確認面において縄文土器片が出土していることから，縄文時代の可能性が考えられる。



第28図　第23号住居跡実測図

第24号住居跡（第29・30図）

位置　調査1区の中央部，B5i3区。

確認状況　壁や床は残存していないが，炉とその周りのピットを確認したことから住居跡と判断した。

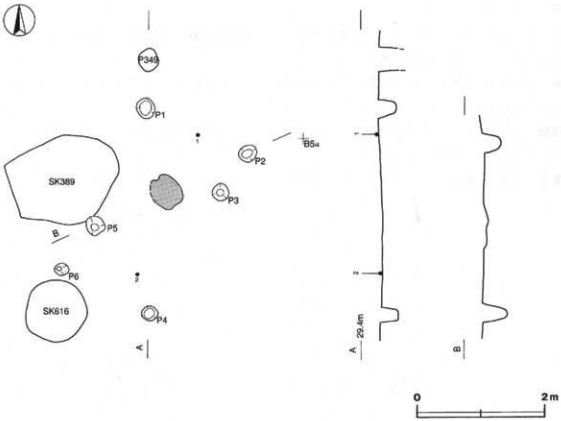
重複関係　第616号土坑を掘り込んでおり，本跡が新しい。第389号土坑及び第349号ピットが本跡のピット付近に検出され重複する可能性が考えられるが，本跡との新旧関係は不明である。

ピット　6か所(P1～P6)。P1・P3～P6は径21～32cmの楕円形，P2は長径30cm，短径25cmの円形であり，確認面からの深さは21～48cmである。

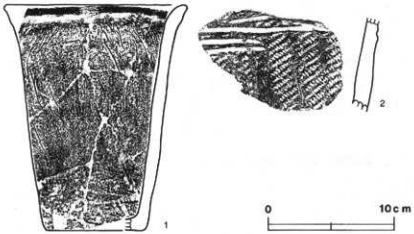
炉　長径53cm，短径45cmで，ほぼ楕円形を呈する地床炉である。確認面から5cmほど下に炉床が見られる。炉床は，火を受けて赤変硬化している。

遺物　縄文土器片7点が出土している。うち，縄文土器2点を抽出・図示した。1は深鉢の口縁部から底部にかけての破片で炉の北東部から，2は深鉢の胴部片で炉の南東部から，いずれも遺構確認面で出土している。

所見　時期は，出土遺物及び住居の形態から，中期後葉(加曽利E I式期)の可能性が考えられる。



第29図　第24号住居跡実測図



第30図　第24号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡出土遺物観察表（第30図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	A［14.0］ B　17.7 C　［7.8］	口縁部から底部にかけての破片。胴部はわずかに外傾して立ち上がり，口縁部は外反する。口唇部直下に沈線を巡らしている。口縁部から底部は無文である。	長石・石英・雲母にぶい橙色 普通	P2019　40%
2	深　鉢 縄文土器	B　（7.2）	胴部片。胴部はわずかに外傾して立ち上がる。横方向の沈線により文様を描出している。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母・赤色粒子 にぶい褐色，普通	TP2028　5%

第28号住居跡（第31・32図）

位置　調査１区の中央部，Ｃ４a9区。

確認状況　壁や床は残存していないが，炉とその周りを弧状に巡るピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　第400号土坑を掘り込んでおり，本跡が新しい。第４号屋外炉及び第401・402号土坑と重複しているが，本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径6.00m，短径5.20mの楕円形と推定される。

主軸方向　N－30°－E

ピット　5か所(P1～P5)。P1・P4・P5は長径40～45cm，短径30～36cmの楕円形，P2・P3はそれぞれ径30cm及び28cmの円形であり，確認面からの深さは21～125cmである。配列から主柱穴と考えられる。

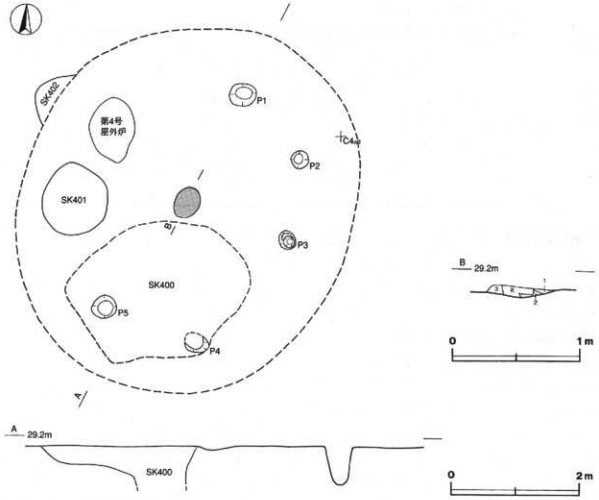
炉　中央部に付設されている。長径52cm，短径40cmで，楕円形を呈する地床炉である。確認面から８cmほど下に炉床が見られる。炉床面は，火を受けて赤変している。

炉土層解説

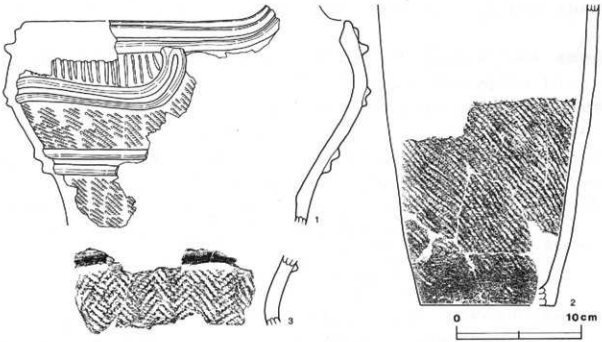
1　暗赤褐色　焼土粒子・ローム粒子中量，焼土小ブロック微量
2　赤 褐 色　焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量
3　赤 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子微量

遺物　縄文土器片31点が出土している。うち，縄文土器３点を抽出・図示した。１は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片，３は深鉢の頸部片，２は深鉢の胴部から底部片で，いずれもＰ１の覆土から出土している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から，中期後葉(加曽利ＥⅠ式期)と考えられる。



第31図　第28号住居跡実測図



第32図　第28号住居跡出土遺物実測図

第28号住居跡出土遺物観察表（第32図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	A［25.4］ B（17.5）	口縁部から頸部片。頸部は外傾して立ち上がり，口縁部は開きながら内彎する。波頂部は欠損するが，波状口縁を呈している。口唇部直下及び口縁部と頸部の境に２条一組の隆帯を巡らしている。口縁部は２条一組の隆帯により区画され，区画内は縦位の沈線が施されている。地文はR無節縄文を横方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P2022　10%
2	深　鉢 縄文土器	B（24.0） C［10.6］	胴部から底部にかけての破片。胴部はわずかに外傾して立ち上がる。地文はLの無節縄文を縦方向に施している。	石英・雲母 にぶい橙色 普通	P2023　30% PL21
3	深　鉢 縄文土器	B（5.0）	頸部片。頸部は外反する。口縁部と頸部の境に隆帯を巡らしている。RLの単節縄文を施文方法をかえることにより，羽状縄文を施している。	長石・雲母 にぶい褐色 普通	TP2035　5%

第30号住居跡（第33・34図）

位置　調査１区の西部，Ｂ４j0区。

重複関係　第424・590号土坑を掘り込んでおり，本跡が新しい。第422号土坑と重複しているが，本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　径4.60mの円形と推定される。

壁　東部及び西部の壁の一部が残存している。残存する壁高は16cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦である。

ピット　４か所(Ｐ１～Ｐ４)。Ｐ１・Ｐ３は径28cm及び31cmの円形，Ｐ２・Ｐ４はそれぞれ長径30cm及び34cmの楕円形で，床面からの深さは16～48cmである。配列から主柱穴と考えられる。

炉　中央部に付設されている。長径65cm，短径52cmのやや不整な楕円形を呈する。炉の北東部に人頭大の花崗岩の炉石が２個，東及び南西部に拳大の炉石がそれぞれ１個残存している。中央部が攪乱されていることから炉石が失われた可能性もあり，第５号住居跡のような，炉の外周に石を配する石囲炉であったことも推察される。床面を30cmほど掘りくぼめており，炉床は，火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1　黒 褐 色　炭化物中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量
2　黒 褐 色　炭化物・炭化粒子中量
3　黒 褐 色　炭化物中量，炭化粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子微量
4　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
5　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
6　褐　　色　炭化粒子中量，炭化材・炭化物少量，ローム小ブロック・ローム粒子微量
7　黒 褐 色　焼土粒子・ローム中ブロック・小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子微量

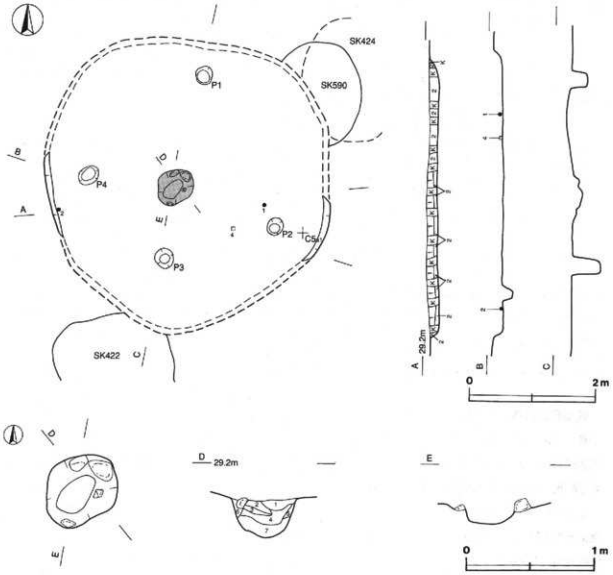
覆土　2層からなり，レンズ状に堆積することから自然堆積である。

土層解説

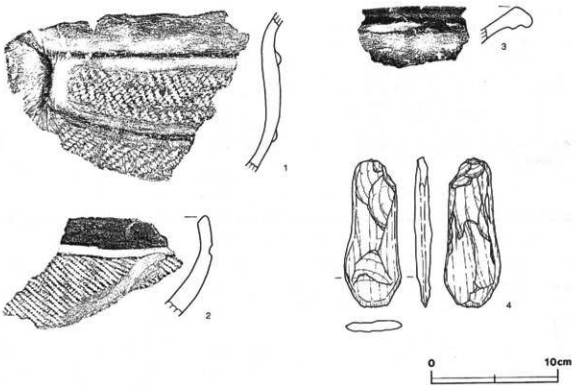
1　黒 褐 色　炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック少量，焼土粒子・ローム粒子微量
2　暗 褐 色　ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム粒子微量

遺物　縄文土器片201点，磨製石斧1点，磨石1点，凹石の小片1点が出土している。うち，縄文土器3点，石器1点を抽出・図示した。2は深鉢の口縁部片で西壁際の床面から，1は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，4の磨製石斧とともに東部の覆土下層から，3は浅鉢の口縁部で，覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から，中期後葉(加曽利EⅢ式期)と考えられる。



第33図　第30号住居跡実測図



第34図　第30号住居跡出土遺物実測図

第30号住居跡出土遺物観察表（第34図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B（12.9）	口縁部から胴部片。口縁部は内彎し，口唇部は短く外反する。口縁部は微隆起線により区画され，区画内はＲＬの羊歯縄文を横方向に，胴部はＲＬの羊歯縄文を縦方向に施している。	長石・雲母・礫 橙色 普通	TP2037　5％
2	深　鉢 縄文土器	B（8.0）	口縁部片。口縁部は内彎する。口縁部は幅狭の無文帯を形成している。無文帯直下に沈線を巡らしている。	長石・礫 灰白色 普通	TP2038　5％
3	浅　鉢 縄文土器	B（3.7）	口縁部片。口縁部は外傾する。口唇部外面は突出している。無文。	長石・雲母 灰白色 普通	TP2039　5％

図版番号	器　種	計測値				石　質	特　徴	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
4	磨製石斧	11.7	4.5	1.3	83.2	粘　板　岩	基部欠損。	Q2008

第39号住居跡（第35図）

位置　調査１区の中央部，Ｃ５c8区。

確認状況　壁や床は残存していないが，炉とその周りを巡るピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　第10号竪穴状遺構に掘り込まれており，本跡が古い。第587・593・598号土坑と重複しているが，本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径5.60m，短径4.60mの楕円形と推定される。

主軸方向　N－67°－W

ピット　11か所(Ｐ１～Ｐ11)。Ｐ１～Ｐ11は径25～40cmの円形であり，確認面からの深さは14～40cmである。配列から主柱穴と考えられる。

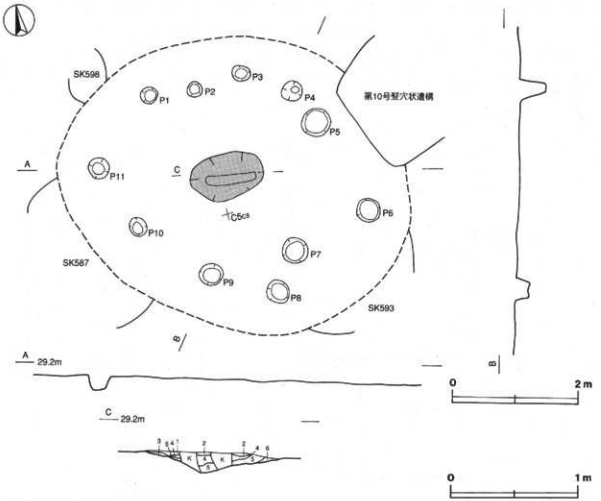
炉　中央部に付設されている。長径115cm，短径75cmで，楕円形を呈する地床炉である。確認面から16cmほど下に炉床が見られる。炉床は，火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土粒子微量
2　暗赤褐色　焼土粒子少量，焼土小ブロック微量
3　赤 褐 色　焼土粒子多量，焼土小ブロック少量
4　赤 褐 色　焼土粒子多量，焼土中・小ブロック少量
5　赤 褐 色　焼土粒子多量，焼土中・小ブロック少量，焼土大ブロック微量
6　暗暗赤褐色　焼土粒子少量

遺物　縄文土器小片１点が出土している。小片のため図示できなかった。

所見　時期は，出土遺物が少量であるため明確ではないが，出土土器及び住居の形態から中期の可能性が考えられる。



第35図　第39号住居跡実測図

第40号住居跡（第36・37図）

位置　調査１区の東部，Ｂ５i6区。

重複関係　第26号住居跡及び第１号堀に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形　現存する長軸は3.69mであり，短軸が2.73mの長方形を呈するものと考えられる。

主軸方向　N－17°－W

壁　壁高は33～35cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦で，全体的に硬化している。

ピット　6か所(P１～P６)。P１～P４は長径24～51cm，短径19～41cmで，コーナー部及び壁際に検出されている。P５・P６はそれぞれ長径25cm及び19cm，短径20cm及び15cmで，長軸線上に検出されている。比較的規則的な配列が見られ，いずれも柱穴と考えられる。

炉　確認されなかった。

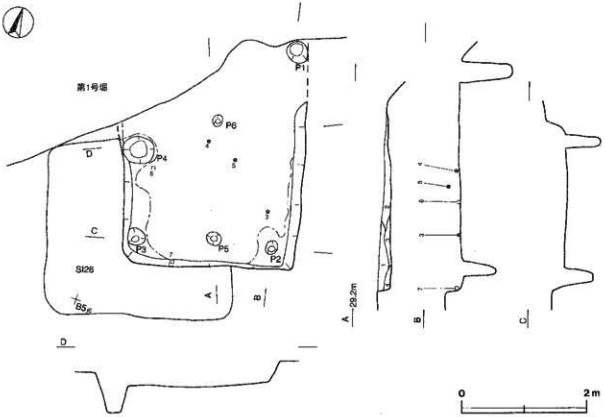
覆土　残存する土層は４層からなり，不規則な堆積状況を示していることから，人為堆積である。

土層解説

1　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子・ローム大ブロック・ローム中ブロック微量
3　黒褐色　ローム粒子微量
4　暗褐色　ローム粒子中量

遺物　縄文土器片232点が出土している。うち，縄文土器５点，石製品２点を抽出・図示した。３は深鉢の口縁部片で東壁際，４は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で中央部，６は石鏃で西部，７は磨石で南壁際のそれぞれ覆土下層から出土している。５は深鉢の口縁部片で東壁寄りの覆土中層から出土している。１は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片，２は深鉢の口縁部片で，覆土中からそれぞれ出土している。

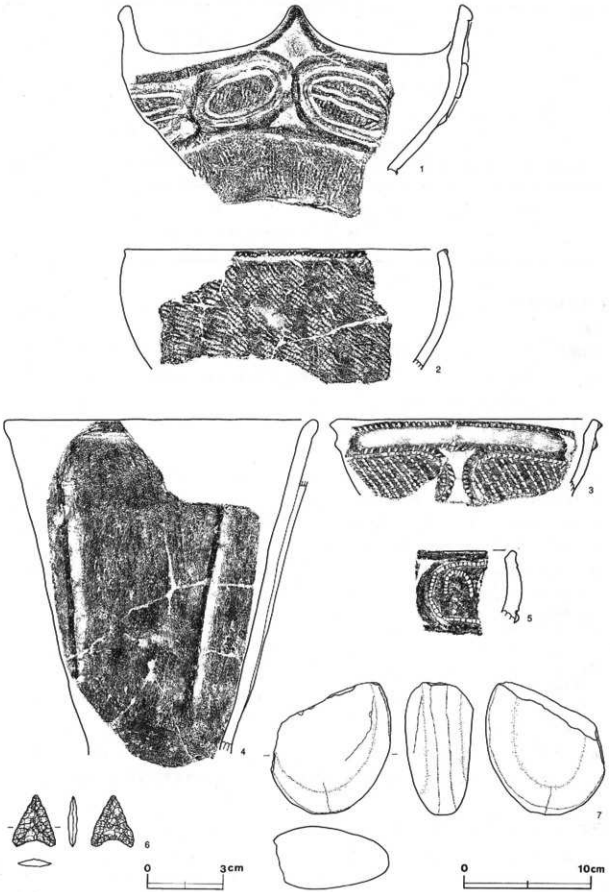
所見　時期は，出土土器及び住居の形態から，中期中葉(阿玉台Ⅱ式期)と考えられる。



第36図　第40号住居跡実測図

第40号住居跡出土遺物観察表（第37図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A［26.4］ B（18.4）	口縁部から頸部片，頸部は外傾し，口縁部は開きながら内弯する。4単位の波状口縁を呈し，口縁部外面及び口縁部と頸部の境に隆帯を巡らしている。口縁部内は隆帯により8単位の楕円区画文を形成し，隆帯に沿って2条の沈線を施している。縄文はLの無節縄文を口縁部内は横方向に，頸部以下は縦方向に施している。	長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P2024　20%
2	深鉢 縄文土器	A［25.4］ B（9.5）	口縁部片。口縁部は内弯する。口唇部にキザミを施している。Lの無節縄文を縦方向に施している。	石英・雲母 灰褐色 普通	P2025　10%



第37図　第40号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	出土・色調・硬度	備考
3	深鉢 縄文土器	A〔20.3〕 B (6.1)	口縁部片。口唇部は外反する。内面に稜を有する。口唇部にキザミを有する隆帯を巡らしている。口縁部はキザミを有する隆帯により楕円区画を施し，隆帯に沿って結節沈線文を施している。区画内には結束沈線文を新方向に充填している。	長石・雲母 褐色 普通	P2026 10%
4	深鉢 縄文土器	A〔24.6〕 B (26.6)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり，口縁部に至る。口唇部外面に隆帯を巡らしている。胴部には断面三角形の隆帯を垂下させている。	長石・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	P2027 25%
5	深鉢 縄文土器	B (5.7)	口縁部片。口唇部はわずかに内傾する。口唇部外面に隆帯を巡らしている。口縁部内は隆帯により区画され，隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	TP2113 5%

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
6	石鏃	2.0	1.6	0.3	0.9	チャート	無茎鏃。基部に抉入がある。	Q2010 PL48
7	磨石	(10.4)	(9.0)	5.4	(629.8)	砂岩	欠損部あり。楕円形を呈すると考えられる。	Q2011

第41号住居跡（第38図）

位置　調査1区の中央部，C 4 b8区。

重複関係　第394・398・461・663・666号土坑の上に構築されており，本跡が新しい。第51号住居跡と重複し，出土土器から本跡が新しい。また，本跡の推定範囲と第49号住居跡が隣接し，重複していた可能性が考えられるが，本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径5.75m，短径4.90mの楕円形と推定される。

主軸方向　N－57°－E

壁　北壁及び北西壁の一部が残存しており，壁高は12～24cmで，外傾して立ち上がる。

床　残存する床面はほぼ平坦で，硬化面は確認されなかった。

ピット　5か所(P 1～P 5)。P 1～P 3は径35～45cmの円形，P 4・P 5はそれぞれ長径46cm・35cm，短径39cm・30cmの楕円形で，深さは24～74cmである。P 1～P 4は配列から主柱穴と考えられる。

炉　中央部から北東寄りに付設されている。長径90cm，短径57cmで，楕円形を呈する地床炉である。床面を5cmほど掘りくぼめており，炉床面は，火を受けて赤変している。

炉土層解説

1　黒褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック微量
2　黒褐色　焼土粒子微量

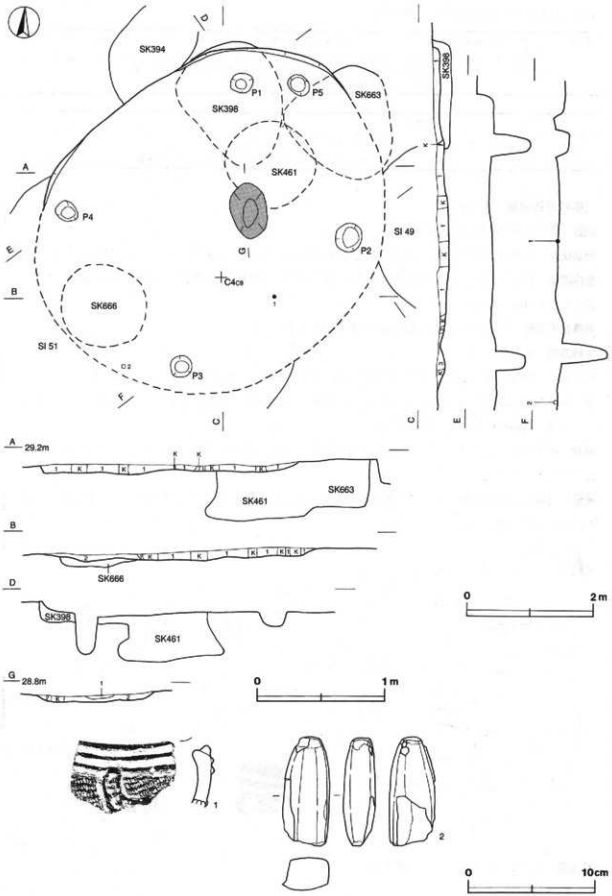
覆土　残存する土層は3層からなり，レンズ状に堆積することから自然堆積である。

土層解説

1　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
2　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，炭化粒子微量
3　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量

遺物　縄文土器片105点，磨製石斧1点が出土している。うち，縄文土器1点，磨製石斧1点を抽出・図示した。1は深鉢の口縁部片で炉南側の床面から，2の磨製石斧は推定される南壁際の床面から，それぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から，中期後葉(加曽利ＥⅠ式期)と考えられる。



第38図　第41号住居跡・出土遺物実測図

第41号住居跡出土遺物観察表（第38図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B（4.9）	口縁部片。波頂部を欠損するが波状口縁を呈する。口唇部直下に３条一組の隆帯を巡らせている。口縁部には隆帯により文様を描出している。地文はＲＬの単節縄文を横方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	TP2040　５％

図版番号	器　種	計測値				石　質	特　徴	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
2	磨製石斧	(8.7)	(3.6)	2.6	(132.1)	凝　灰　岩	基部及び刃部欠損。定角式磨製石斧。	Q2012

第42号住居跡（第39図）

位置　調査１区の東部，Ｃ５b4区。

確認状況　壁や床は残存していないが，炉とその周りを巡るピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　第52号住居跡に掘り込まれており，本跡が古い。第44号住居跡及び第640号土坑と重複しているが，本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径4.10m，短径3.80mの不整楕円形と推定される。

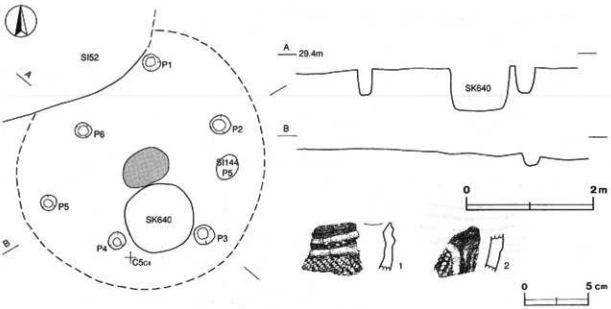
主軸方向　Ｎ－24°－Ｅ

ピット　６か所(Ｐ１～Ｐ６)。Ｐ１～Ｐ６は径26～30cmの円形で，確認面からの深さは19～41cmである。

炉　中央部に付設されていたと考えられる。長径78cm，短径56cmで，楕円形を呈する地床炉である。確認面において焼土の範囲が認められるのみである。

遺物　縄文土器片11点が出土している。うち，縄文土器２点を抽出・図示した。１・２は深鉢の口縁部片で覆土中から出土している。

所見　時期は，出土遺物が少ないため明確ではないが，出土土器及び住居の形態から，中期後葉(加曽利ＥⅡ式期)の可能性が考えられる。



第39図　第42号住居跡・出土遺物実測図

第42号住居跡出土遺物観察表（第39図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B（3.8）	口縁部片。口縁部はほぼ直立する。波頂部を欠損するが波状口縁を呈している。口縁部内面に稜をもつ。口唇部直下には2条一組の沈線を巡らしている。地文はRLの羽節縄文を横方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	TP2054　5％
2	深鉢 縄文土器	B（3.0）	口縁部片。口縁部はやや外傾する。沈線により文様を描出している。地文はRLの羽節縄文を横方向に施している。	長石・石英・雲母・ 赤 橙色，普通	TP2055　5％

第44号住居跡（第40図）

位置　調査1区の東部，C5b4区。

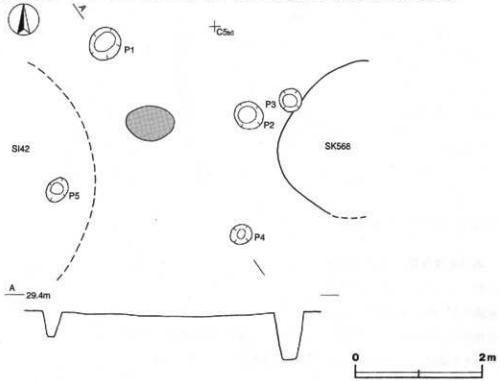
確認状況　壁や床は残存していないが，炉とその周りを巡るピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　第42号住居跡及び第568号土坑と重複しているが，本跡との新旧関係は不明である。

ピット　5か所(P1～P5)。P1・P5はそれぞれ長径54cm・40cm，短径46cm・31cmの楕円形，P2～P4は径31～48cmの円形で，確認面からの深さは30～79cmである。

炉　中央部に付設されていると考えられる。長径75cm，短径55cmで，楕円形を呈する地床炉である。確認面において焼土の範囲が認められるのみである。

所見　時期は，遺物が出土していないため明確ではないが，住居の形態から，縄文時代と考えられる。



第40図　第44号住居跡実測図

第45号住居跡（第41図）

位置　調査1区の東部，C5a4区。

重複関係　第1号掘及び第636号土坑に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形　北西部が第1号掘に掘り込まれているが，長径が4.20mと推定される。短径が3.34mであり，楕円形を呈すると推定される。

主軸方向　N－8°－W

壁　壁高は5～8㎝で，外傾して立ち上がる。

床　中央部がなだらかにくぼんでいる。西部を除いて硬化している。

ピット　4か所(P1～P4)。P1・P2・P4は長径21～32㎝，短径19～26㎝の楕円形，P3は径45㎝の円形で，確認面からの深さは32～54㎝である。

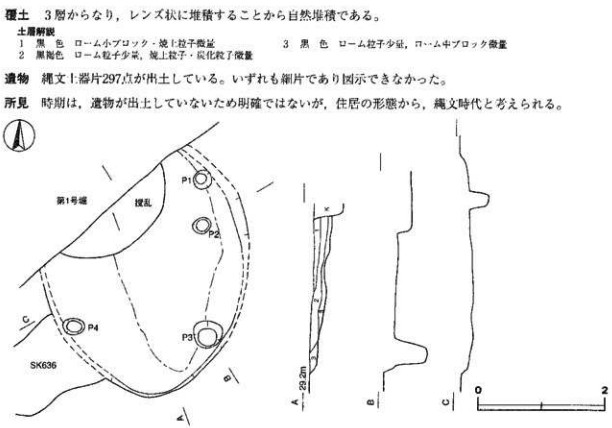
炉　検出されなかった。中央部から北側にかけて第1号掘及び第636号土坑に撹り込まれており，これらにこわされた可能性も考えられる。

覆土　3層からなり，レンズ状に堆積することから自然堆積である。

土層解説
1　黒　色　ローム小ブロック・焼土粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒　色　ローム粒子少量，ローム中ブロック微量

遺物　縄文土器片297点が出土している。いずれも細片であり図示できなかった。

所見　時期は，遺物が出土していないため明確ではないが，住居の形態から，縄文時代と考えられる。



第41図　第45号住居跡実測図

第48号住居跡（第42・43図）

位置　調査1区の南部，C5f2区。

確認状況　壁や床は残存していないが，炉とその周りを巡るピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　第544号土坑と重複しているが，本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径4.56m，短径3.59mの不整楕円形と推定される。

主軸方向　N－54°－W

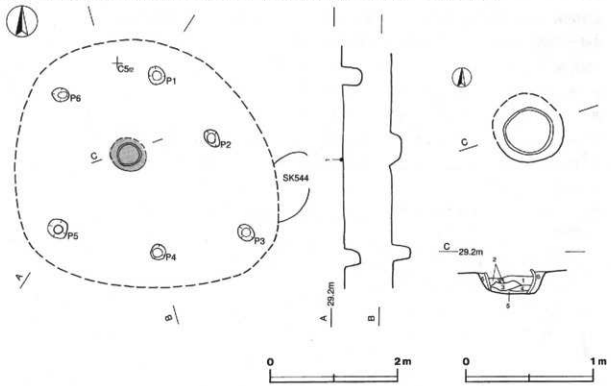
ピット　6か所(P1～P6)。P1は径27㎝，P4は径26㎝，P6は径25㎝の円形で，P2・P3はそれぞれ長径30㎝・28㎝，短径25㎝・22㎝の楕円形，P5は長径34㎝，短径28㎝の楕円形で，確認面からの深さは27～44㎝である。

炉　中央部に付設されている。径40㎝の円形で，ほぼ中央部に深鉢の胴部を埋設させた土器埋設炉である。炉の深さは，埋設された深鉢胴部片の最高部から20㎝を測り，覆土は6層に分層された。深鉢及び炉床は火を受けて赤変している。なお，第6層は掘り方の覆土である。

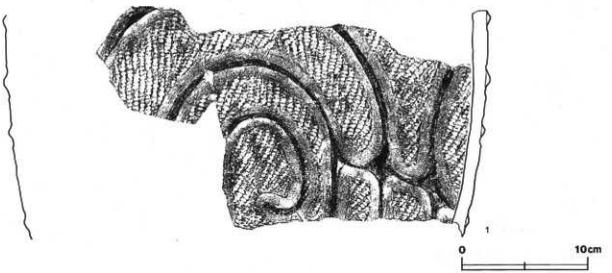
炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子微量
2　黒 褐 色　ローム粒子微量
3　暗赤褐色　焼土大ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子微量
4　暗赤褐色　ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子微量
5　暗赤褐色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
6　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土小ブロック微量

遺物　縄文土器片22点が出土している。うち，縄文土器１点を抽出・図示した。１は炉の埋設土器で深鉢の胴部片を正位に埋設している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から，中期後葉（加曽利ＥⅢ式期）と考えられる。



第42図　第48号住居跡実測図



第43図　第48号住居跡出土遺物実測図

第48号住居跡出土遺物観察表（第43図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B（17.9）	胴部片。胴部はわずかに内弯して立ち上がる。胴部は微粒雲母により文様を描出している。	長石・石英・雲母にぶい赤褐色 普通	P2033　30% PL21

第49号住居跡（第44・45図）

位置　調査1区の西部，C4b0区。

重複関係　第41号住居跡と重複している可能性が考えられるが，本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径2.66m，短径3.06mの不整楕円形である。

主軸方向　N－35°－W

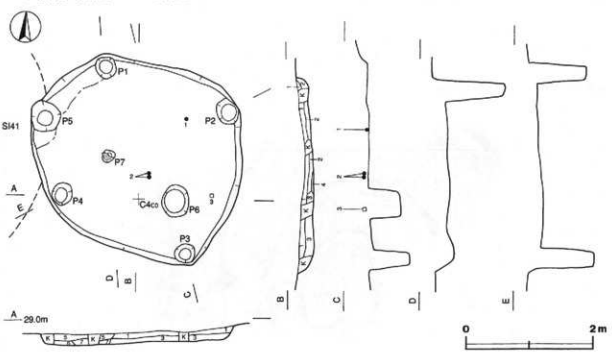
壁　壁高は12～22cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦で，北西部の壁際を除いて硬化している。

ピット　7か所(P1～P7)。P1～P5は長径44～51cm，短径31～42cmの楕円形，P6は長径50cm，短径44cmの楕円形，P7は長径22cm，短径18cmの楕円形である。P1～P5は配列から柱穴と考えられる。P6・P7の性格は不明である。

覆土　7層からなり，不自然な堆積状況を示すことから人為堆積である。

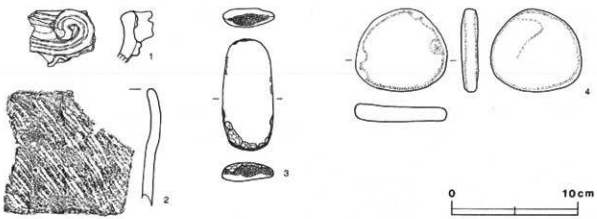
土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・小ブロック少量，焼土粒子・ローム大ブロック微量
2　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・ローム中ブロック・小ブロック微量
3　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
4　橙　色　表土パミス小ブロック・粒子微量
5　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
6　暗褐色　焼土粒子・ローム中ブロック・小ブロック・ローム粒子微量
7　暗褐色　焼土粒子・ローム粒子微量



第44図　第49号住居跡実測図

遺物　縄文土器片68点，敲石１点，磨石１点が出土している。うち，縄文土器２点，敲石１点，磨石１点を抽出・図示した。１は深鉢の口縁部片で北東部の覆土下層から，２は深鉢の口縁端部片で中央部の覆土中層から，３は敲石で東壁際の床面から，４は磨石で覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から，中期後葉(加曽利ＥⅠ式期)と考えられる。



第45図　第49号住居跡出土遺物実測図

第49号住居跡出土遺物観察表（第45図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B（4.1）	口縁部片。口縁部はわずかに内彎する。２条一組の隆帯により渦巻文を描出している。	長石・石英・雲母 浅黄橙色 普通	P2034　5％
2	深鉢 縄文土器	B（9.2）	口縁部片。口縁部はほぼ直立する。Rの無節縄文を横方向に施している。	長石・石英 にぶい褐色 普通	TP2042　5％

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
3	敲石	8.8	4.1	1.5	79.4	砂岩	長径方向の上・下部に使用痕有り。	Q2013
4	磨石	6.6	7.3	1.3	95.5	砂岩	平面形は不整円形。側面全体に使用痕有り。	Q2014

第51号住居跡（第46・47図）

位置　調査１区の中央部，Ｃ４c8区。

確認状況　壁や床は残存していないが，炉とその周りを巡るピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　第41号住居跡及び第666号土坑と重複している。また，第591号土坑及び第332号ピットが本跡のピット付近に検出され，本跡と重複する可能性が考えられる。いずれも本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径5.20m，短径4.20mの不整楕円形と推定される。

主軸方向　Ｎ－50°－Ｗ

ピット　10か所(Ｐ１～Ｐ10)。Ｐ１及びＰ４～６は長径21～38cm，短径21～37cmの円形，Ｐ２・Ｐ３及びＰ７～Ｐ10は長径28～52cm，短径24～45cmの楕円形であり，Ｐ３の確認面からの深さは55cm，Ｐ１・Ｐ２及びＰ４～Ｐ10の確認面からの深さは80～162cmである。

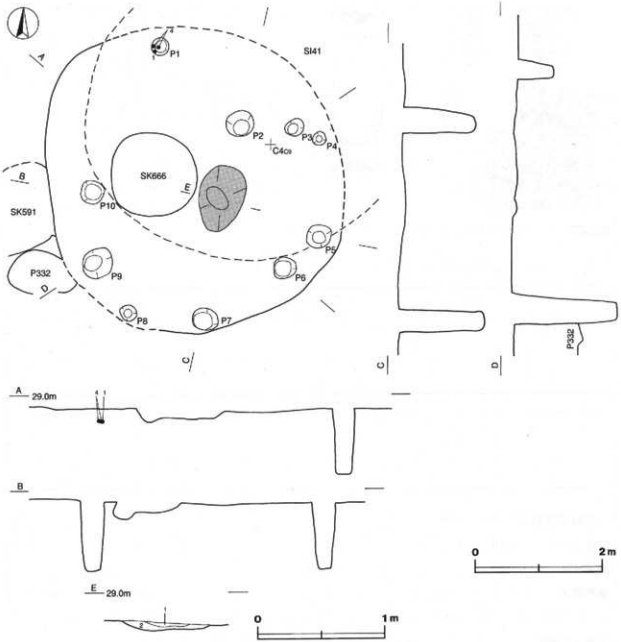
炉　中央部に付設されている。長径105cm，短径70cmの楕円形の範囲で焼土が確認され，地床炉と考えられる。

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土粒子少量，ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子微量
2　暗赤褐色　焼土粒子少量，ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック微量

遺物　縄文土器片25点，石製品１点が出土している。うち，縄文土器４点，磨製石斧１点を抽出・図示した。１は深鉢の口縁部片，４は深鉢の胴部片でともにＰ１の覆土下層から，２及び３は深鉢の口縁部片で，２はＰ１の覆土中から，３はＰ５の覆土中から出土している。５は磨製石斧で覆土中から出土している。

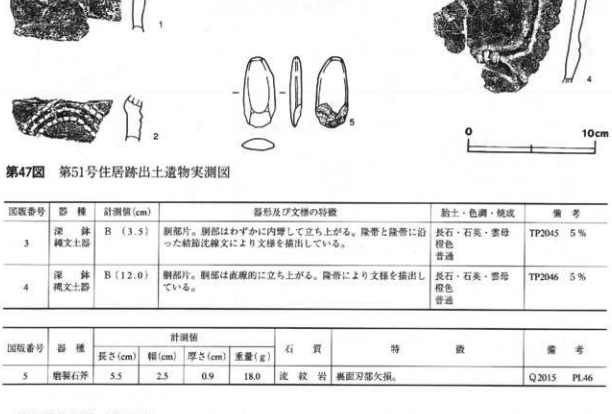
所見　時期は，出土土器及び住居の形態から，中期中葉(阿玉台Ⅱ式期)と考えられる。



第46図　第51号住居跡実測図

第51号住居跡出土遺物観察表（第47図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B（8.4）	口縁部片。口縁部はわずかに内彎する。口縁部は断面三角形の隆帯により区画され，隆帯に沿って結節沈線文を施している。	長石・雲母・礫 赤黒色 普通	TP2043　5％
2	深　鉢 縄文土器	B（3.7）	口縁部片。口縁部はわずかに内彎する。口縁部には結節沈線文を施している。	長石・雲母・礫 橙色 普通	TP2044　5％



第47図　第51号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
3	深　鉢 縄文土器	B（3.5）	胴部片。胴部はわずかに内彎して立ち上がる。隆帯と隆帯に沿った結節沈線文により文様を描出している。	長石・石英・雲母 橙色 普通	TP2045　5％
4	深　鉢 縄文土器	B（12.0）	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。隆帯により文様を描出している。	長石・石英・雲母 橙色 普通	TP2046　5％

図版番号	器　種	計測値				石　質	特　徴	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
5	磨製石斧	5.5	2.5	0.9	18.0	流　紋　岩	裏面刃部欠損。	Q2015　PL46

第52号住居跡（第48図）

位置　調査1区の中央部，C5b3区。

重複関係　第42号住居跡及び第675号土坑を掘り込んでおり，また，第679号土坑の上に構築されており，本跡が新しい。第636号土坑及び第13号地下式壙に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形　長径4.36m，短径3.65mの楕円形と推定される。

主軸方向　N－57°－E

壁　残存する壁高は6～10cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦で，硬化面は見られない。

ピット　6か所(P1～P6)。P1・P2はそれぞれ径40cm・20cmの円形，P3は長径56cm，短径43cmの楕円形，P4・P5はそれぞれ径25cm・30cmの円形，P6は長径28cm，短径22cmの楕円形であり，確認面からの深さは11～95cmである。

炉　ほぼ中央部に付設されている。長径113cm，短径83cmで，不整楕円形を呈する地床炉である。床面を19cmほど掘りくぼめており，炉床は，火を受けて赤変している。

炉土層解説

1　極暗赤褐色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量
2　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量

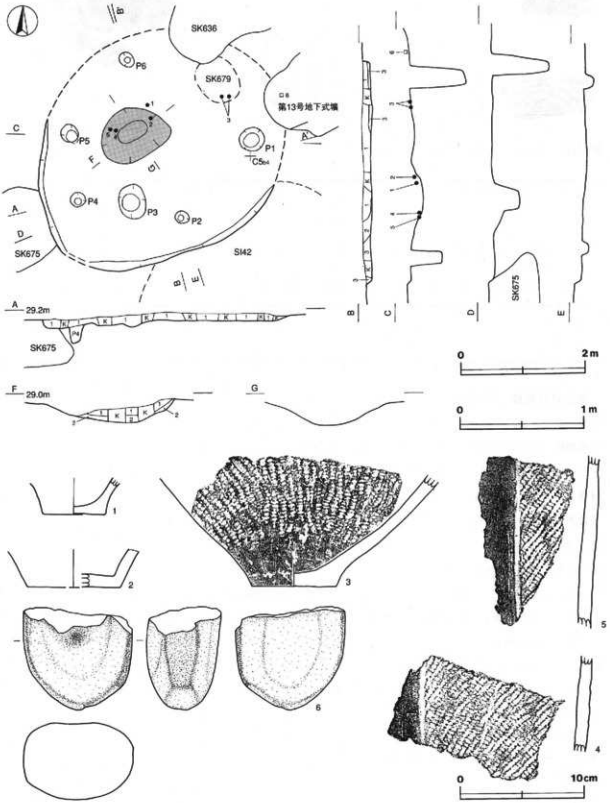
覆土　3層からなり，レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積である。

土層解説

1　黒 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
2　黒 褐 色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
3　黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子微量

遺物　縄文土器片147点，石皿１点，磨石１点が出土している。うち，縄文土器５点，磨石１点を抽出・図示した。３は深鉢の底部片で中央部の床面から，６は磨石で北東部の床面から，４・５は深鉢の胴部片で炉の覆土下層から，１・２は深鉢の底部片で炉の覆土上層から出土している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から，中期後葉(加曽利ＥⅢ式期)と考えられる。



第48図　第52号住居跡・出土遺物実測図

第52号住居跡出土遺物観察表（第48図）

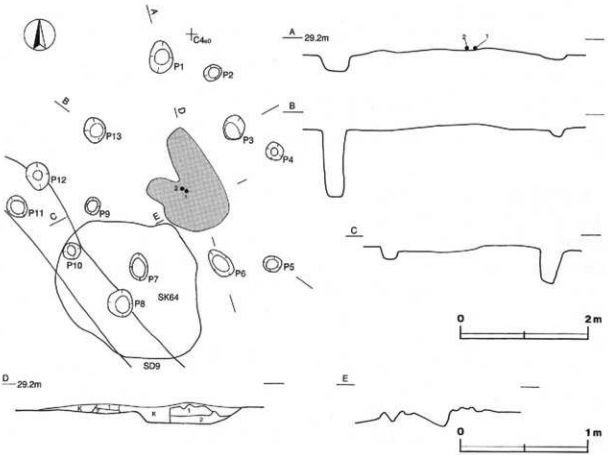
図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B（3.0） C　5.1	底部片。無文。	長石・石英 にぶい橙色 普通	P2036　5％ PL21
2	深鉢 縄文土器	B（3.2） C［7.4］	底部片。無文。	石英 にぶい橙色 普通	P2037　5％
3	深鉢 縄文土器	B［9.0］ C　6.8	底部から胴部にかけての破片。胴部は外短して立ち上がる。RLの単節縄文を縦方向に施している。	石英・雲母 にぶい褐色 普通	P2038　20％ 外面煤付着
4	深鉢 縄文土器	B（7.5）	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。胴部には沈線を垂下させ，そのわきを磨り消している。地文はRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	TP2047　5％
5	深鉢 縄文土器	B（13.5）	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。胴部には沈線を垂下させ，そのわきを磨り消している。地文はRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	TP2048　5％

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
6	磨石	(8.2)	8.8	6.2	(555.5)	砂岩	欠損部有り。残存する側面全体に使用痕有り。	Q2017

第53号住居跡（第49・50図）

位置　調査1区の南部，C4e9区。

確認状況　壁や床は残存していないが，炉とピットを確認したことから住居跡と判断した。



第49図　第53号住居跡実測図

重複関係　第64号土坑及び第９号溝と重複してるが，本跡との新旧関係は不明である。

ピット　13か所(Ｐ１～Ｐ13)。Ｐ１～Ｐ13は長径29～50cm，短径24～37cmの楕円形で，確認面からの深さは10～189cmである。炉を中心に内側と外側にピットが巡っている。

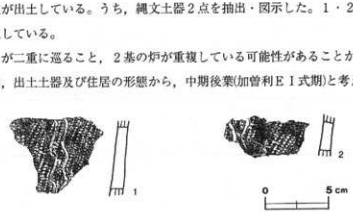
炉　回りに巡るピットのほぼ中央部に付設された地床炉と考えられる。攪乱を受けており，長軸170cm，短軸140cmの不整形の範囲で焼土が確認された。平面形から２基の炉が重複している可能性も考えられる。残存する炉床は，確認面から16cmほどの深さで，火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1　赤褐色　焼土大ブロック中量，焼土中ブロック少量
2　赤褐色　焼土大ブロック・焼土中ブロック少量

遺物　縄文土器片19点が出土している。うち，縄文土器２点を抽出・図示した。１・２は深鉢の胴部片でともに炉の覆土中から出土している。

所見　本跡は，ピットが二重に巡ること，２基の炉が重複している可能性があることから，建て替えの可能性が考えられる。時期は，出土土器及び住居の形態から，中期後葉(加曽利ＥⅠ式期)と考えられる。



第50図　第53号住居跡出土遺物実測図

第53号住居跡出土遺物観察表（第50図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	Ｂ（5.9）	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。２条一組の沈線により文様を描出している。地文はＲＬの羊歯縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 橙色 普通	TP2049　５％
2	深　鉢 縄文土器	Ｂ（3.0）	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。２条一組の沈線により文様を描出している。地文はＲＬの羊歯縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	TP2050　５％

第54号住居跡（第51図）

位置　調査１区の中央部，Ｂ５j2区。

重複関係　第１号掘に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形　南東部の半分又はそれ以上が第１号掘に掘り込まれているため，正確な規模及び平面形は不明であるが，残存する長径が1.78m，短径3.12mであり，円形又は楕円形を呈すると推定される。

壁　壁高は６～18cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦で，特に硬化面はみられない。

ピット　３か所(Ｐ１～Ｐ３)。Ｐ１・Ｐ２はそれぞれ長径35cm，短径30cm・32cmの楕円形で，深さは34cm及び40cmである。その性格は不明である。Ｐ３は長径67cm，短径58cmの楕円形で，深さは118cmであり，規模から本跡にともなわない可能性も考えられる。その性格も不明である。

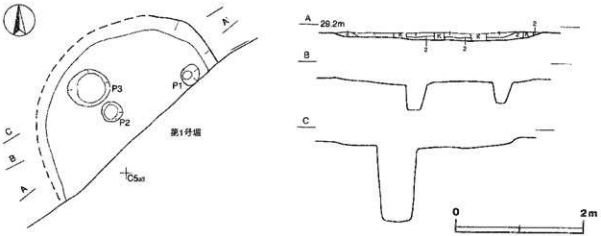
覆土　２層からなり，レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積である。

土層解説

1　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

遺物　出土していない。

所見　本跡は，遺物が出土しておらず正確な時期は不明であるが，住居の形態から，縄文時代と考えられる。



第51図　第54号住居跡実測図

第70号住居跡（第52～54図）

位置　調査３区の北東部，Ｆ３g1区。

重複関係　第697号土坑に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形　長軸4.22m，短軸4.04mの隅丸方形である。

主軸方向　N－13°－W

壁　壁高は10～16cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。特に硬化面はみられない。

ピット　１か所(Ｐ１)。長径60cm，短径44cmの楕円形で，深さは60cmである。その性格は不明である。

炉　南西壁よりに付設されている。南部を第697号土坑に掘り込まれているが，長径92cm，短径59cmの楕円形と考えられ，ほぼ中央部に深鉢の上半部を埋設した土器埋設炉である。炉の深さは22cmで，覆土は６層に分層された。深鉢は火を受けて赤変している。

炉土層解説

1　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　明褐色　ローム中ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子微量
4　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，焼土小ブロック・炭化粒子微量
5　赤褐色　焼土粒子多量，ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量，炭化材・炭化物微量
6　暗褐色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

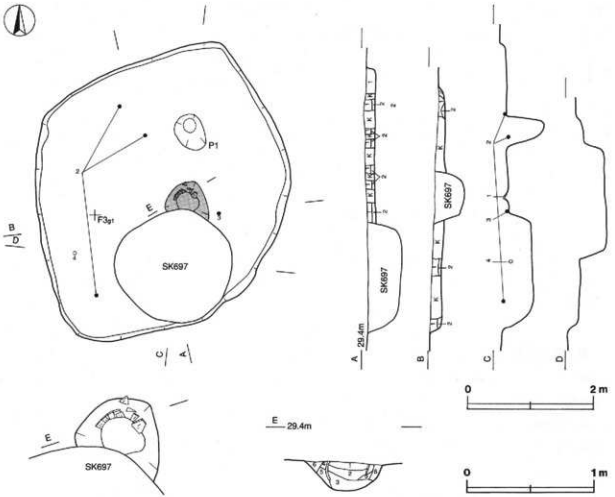
覆土　２層からなり，レンズ状に堆積することから，自然堆積である。

土層解説

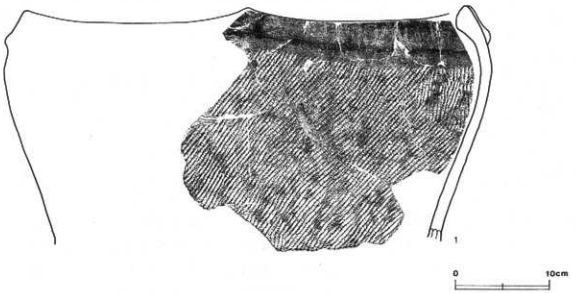
1　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
2　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量

遺物　復元可能土器２点を含む縄文土器片79点が出土している。うち，縄文土器３点，土製品１点を抽出・図示した。１は埋設土器の深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，正位に埋設されている。２は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，北西壁寄り及び南西壁寄りの覆土下層から出土している。３は深鉢の口縁部で南東壁寄りのほぼ床面から出土している。４は土製円盤で南西壁寄りの覆土下層から出土している。

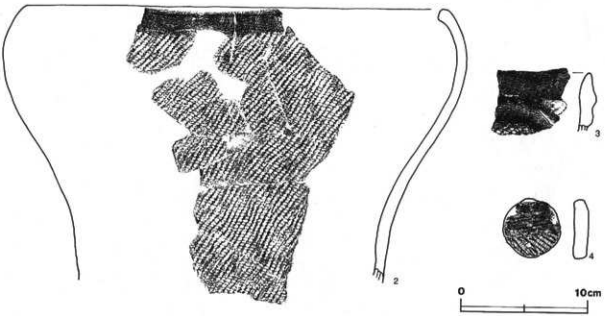
所見　時期は，出土土器及び住居の形態から，中期後葉(加曽利ＥⅣ式期)と考えられる。



第52図　第70号住居跡実測図



第53図　第70号住居跡出土遺物実測図（1）



第54図　第70号住居跡出土遺物実測図（2）

第70号住居跡出土遺物観察表（第53・54図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文上器	A［46.5］ B（24.9）	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は内彎し，波状口縁を呈する。口唇部直下に微隆帯を巡らせている。RLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 橙色 普通	P2040　10%
2	深鉢 縄文上器	A［33.4］ B（21.7）	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は内彎する。口唇部内面に稜を有する。口唇部以下にはRLの単節縄文を縦方向に施している。	石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P2041　20%
3	深鉢 縄文上器	B（4.6）	口縁部片。口縁部は直立する。微隆帯により文様を描出している。地文はRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・礫 明褐色 普通	TP2057　5%

図版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
4	土器片円盤	4.6	4.5	1.1	28.2	土製	RLの単節縄文を横方向に施している。	DP2001

第76号住居跡（第55図）

位置　調査3区の北西部，F2h2区。

規模と平面形　長径4.40m，短径4.36mの不整円形である。

主軸方向　N－33°－W

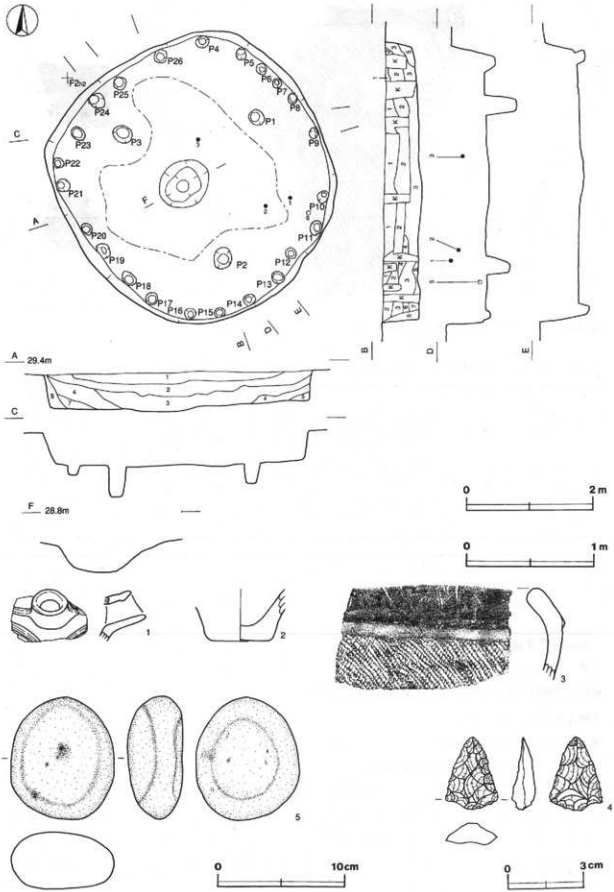
壁　壁高は44～50cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦で，中央部にある炉の周囲が硬化している。

ピット　26か所(P1～P26)。P1～P3は長径26～35cm，短径22～27cmの楕円形で，深さは31～49cmである。P4～P26は長径15～26cm，短径14～23cmの楕円形及び円形で，深さは7～20cmである。P1～P3は規模と配列から主柱穴と考えられる。P4～P26は壁際に巡らされており壁柱穴と考えられる。

炉　中央部に付設されている。長径83cm，短径72cmで，楕円形を呈する地床炉である。6cmほど床面を掘りくぼめている。

覆土　7層に分層され，レンズ状に堆積することから自然堆積である。



第55図　第76号住居跡・出土遺物実測図

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子中量，炭化粒子微量，ローム大ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物微量
3 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子微量
4 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子微量
5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
6 黒褐色 ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子微量
7 暗褐色 ローム粒子少量，ローム中ブロック・炭化粒子微量

遺物 縄文土器片648点が出土している。うち，縄文土器３点，石製品２点を抽出・図示した。５は磨石で，南東壁際の覆土下層から出土している。１は注口土器，２は深鉢の底部片で，ともに南東壁寄りの覆土中層から，３は深鉢口縁部片で，中央部の覆土中層から出土している。４は石鏃の未製品と考えられ，覆土中から出土している。

所見 時期は，出土土器及び住居の形態から，中期後葉(加曽利ＥⅣ式期)と考えられる。

第76号住居跡出土遺物観察表（第55図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	注口土器 縄文土器	B (4.0)	注口部から側部にかけての破片。側部には注口基部まで微隆帯により文様が描出されている。	長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	P2042 5%
2	深鉢 縄文土器	B (4.1) C 5.0	底部片。無文。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P2043 5%
3	深鉢 縄文土器	B (7.3)	口縁部片。口縁部は内湾する。口縁部直下に微隆帯を巡らしている。地文はＲＬの単節縄文を横方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	TP2060 5%

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
4	石鏃	2.9	2.1	0.9	3.4	チャート	円基鏃。	Q2018	
5	磨石	9.5	8.2	4.5	556.5	安山岩	平面形は不整円形。側面全体に使用痕有り。	Q2019	PL47

第77号住居跡（第56・57図）

位置 調査３区の北部，Ｆ２d5区。

確認状況 本跡の上面が攪乱を受けている。特に北部は攪乱が著しく，その下部から本跡のＰ１と第592号土坑が確認された。

重複関係 第952号土坑の上に構築されており，本跡が新しい。第725・751・752号土坑と重複しているが，本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径5.50m，短径4.90mの不整楕円形と推定される。

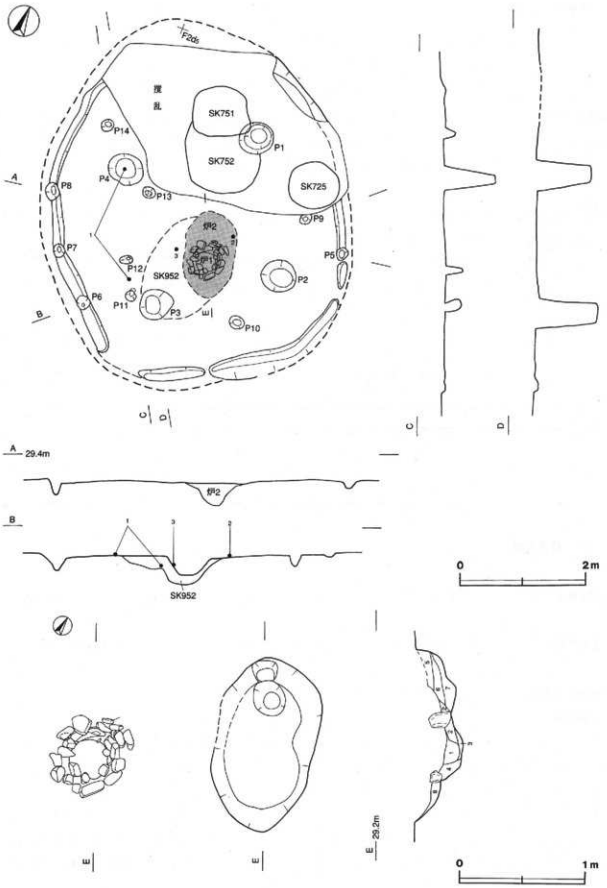
主軸方向 Ｎ－32°－Ｗ

壁 残存する壁高は24～28cmで，外傾して立ち上がる。壁溝が南部及び西部の一部，また，北部の攪乱部分を除いてほぼ全周している。

床 上面に攪乱を受けているため床の状態は不明である。

ピット 14か所(Ｐ１～Ｐ14)。Ｐ１～Ｐ４は長径56～60cm，短径46～50cmの楕円形で，深さは91～100cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。Ｐ５～Ｐ８は長径22～27cm，短径18～21cmの楕円形で，深さは12～22cmである。規模と配列から壁柱穴と考えられる。Ｐ９～Ｐ13は長径19～22cm，短径15～19cmの楕円形，Ｐ14は径20cmの円形で，深さは15～26cmである。その性格は不明である。

炉 ２か所。炉１と炉２は重複する。中央部からやや南壁寄りに付設されている。炉１は，炉２の上面に付設



第56図　第77号住居跡実測図

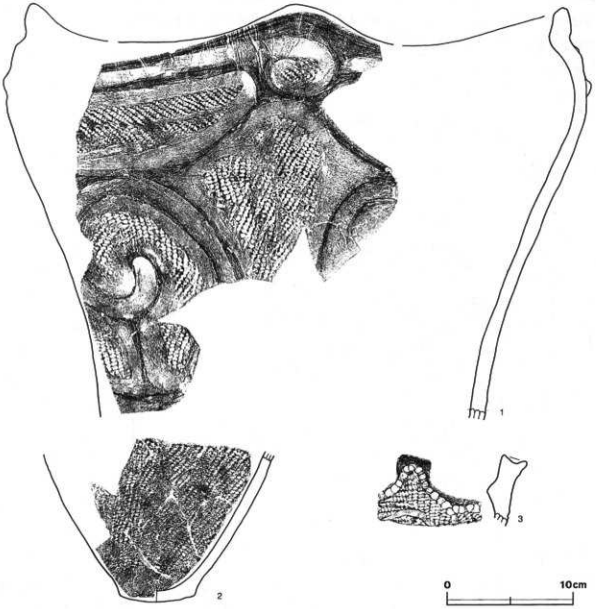
された石囲炉である。拳大から人頭大の半分ほどの大きさの炉石34個体が長径72cm，短径62cmの楕円形の範囲に巡らされている。床面から25cm掘りくぼめており，炉床及び炉石は赤変している。炉２は，炉１の下面に確認され，長径140cm，短径78cmの楕円形で，床面を38cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は赤変している。炉２が廃絶された後，炉１が付設されたものと考えられる。

炉土層解説

1　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子微量
2　赤 褐 色　焼土粒子多量，焼土小ブロック・炭化粒子微量
3　にぶい赤褐色　ローム中ブロック多量，焼土粒子中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子微量
4　暗赤褐色　焼土粒子少量，ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子微量
5　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量，ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子微量
6　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子微量
7　赤 褐 色　焼土粒子多量，焼土小ブロック少量，ローム粒子・焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子微量
8　暗 褐 色　ローム粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量

遺物　縄文土器片109点が出土している。うち，縄文土器３点を抽出・図示した。１は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片でＰ４の覆土上層及び確認面から，２は深鉢の胴部から底部にかけての破片，３は深鉢の口縁部片で中央部の確認面から，それぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から，中期後葉(加曽利ＥⅢ式期)と考えられる。



第57図　第77号住居跡出土遺物実測図

第77号住居跡出土遺物観察表（第57図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	A［42.6］ B（33.1）	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は内弯する。4単位の波状口縁を呈する。口縁部には撚糸帯及び波頂部直下に楕円区画文を施している。胴部には撚糸帯により文様を描出している。地文は，口縁部にはＲＬの単節縄文を横方向に，胴部にはＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英 灰褐色 普通	P2044　20%
2	深　鉢 縄文土器	B（12.0） C　6.0	胴部から底部にかけての破片。底部から胴部は外傾して立ち上がる。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	P2045　20%
3	深　鉢 縄文土器	B（5.6）	把手部及び口縁部片。波頂部はくぼみを有する。口唇部外面直下に刺突文を連続して施している。口縁部は沈線により文様を描出している。地文はＲＬの単節縄文を斜め方向に施している。	長石・雲母 にぶい褐色 普通	P2046　5%

第78号住居跡（第58・59図）

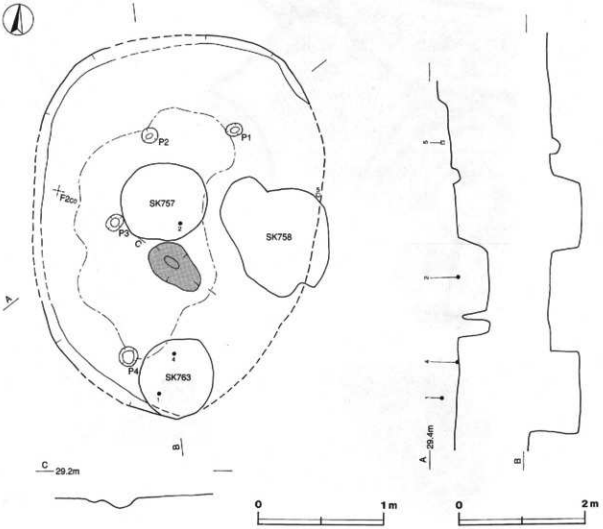
位置　調査３区の北東部，Ｆ２c0区。

確認状況　本跡の上面が攪乱を受けており，北部，東部から南東部及び西部の壁が確認できなかった。

重複関係　第757・758・763号土坑と重複しているが，本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径6.10m，短径4.56mの楕円形と推定される。

主軸方向　Ｎ－６°－Ｗ



第58図　第78号住居跡実測図

壁　壁高は14～28cmであり，外傾して立ち上がる。

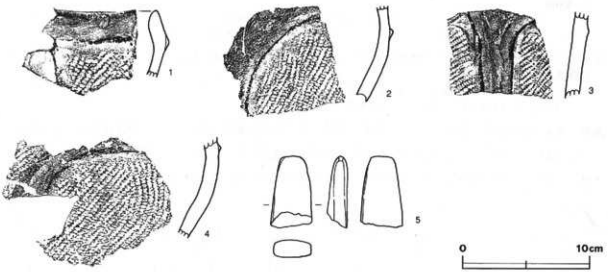
床　ほぼ平坦であり，中央部が硬化している。

ピット　4か所(P１～P４)。P１は長径27cm，短径20cmの楕円形で，深さは15cm，P３は長径30cm，短径24cmの楕円形で，深さは51cm，P２は径25cmの円形で，深さは16cm，P４は径30cmの円形で，深さは33cmである。いずれもその性格は不明である。

炉　中央部からやや南壁寄りに付設されている。長径98cm，短径53cmで，楕円形を呈する地床炉である。10cmほど床面を掘りくぼめている。炉床は赤変している。

遺物　縄文土器片88点，石器１点が出土している。うち，縄文土器片４点，石器１点を抽出・図示した。２・４は深鉢の胴部片で，２は中央部，４は南壁寄りの，それぞれ覆土下層から出土している。１は深鉢口縁部片で，南壁際の覆土上層から出土している。３は深鉢胴部片で覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から，中期後葉(加曽利ＥⅣ式期)と考えられる。



第59図　第78号住居跡出土遺物実測図

第78号住居跡出土遺物観察表（第59図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B（5.0）	口縁部片。口縁部は内弯する。口唇部外面直下には微隆帯により文様を描出している。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 橙色 普通	TP2105　5％
2	深　鉢 縄文土器	B（7.7）	胴部片。胴部は内弯して立ち上がる。胴部には微隆帯により文様を描出している。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	TP2106　5％
3	深　鉢 縄文土器	B（6.4）	胴部片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部には微隆帯により文様を描出している。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	TP2107　5％
4	深　鉢 縄文土器	B（7.9）	胴部片。胴部は内弯して立ち上がる。胴部には微隆帯により文様を描出している。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	TP2108　5％

図版番号	器　種	計測値				石　質	特　徴	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
5	磨製石斧	(5.6)	(3.2)	(1.5)	(48.3)	蛇紋岩	刃部欠損。定角式磨製石斧	Q2021

第79号住居跡（第60・61図）

位置　調査３区の北西部，Ｆ２i5区。

規模と平面形　長軸3.40m，短軸2.62mの隅丸長方形である。

主軸方向　Ｎ－70°－Ｅ

壁　壁高は８～16cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦で，硬化面は確認されなかった。

ピット　６か所(Ｐ１～Ｐ６)。Ｐ１～Ｐ５は，長径24～30cm，短径19～24cmの円形及び楕円形で，深さは14～31cmである。Ｐ６は長径61cm，短径41cmの楕円形で，深さは18cmである。その性格はいずれも不明である。Ｐ６は規模及び配列などから本跡に伴わない可能性も考えられる。

炉　中央部に付設されている。長径54cm，短径39cmの楕円形で，床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉であり，炉床は火を受けて赤変している。

炉土層解説

1　にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量，ローム中ブロック・焼土中ブロック・炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

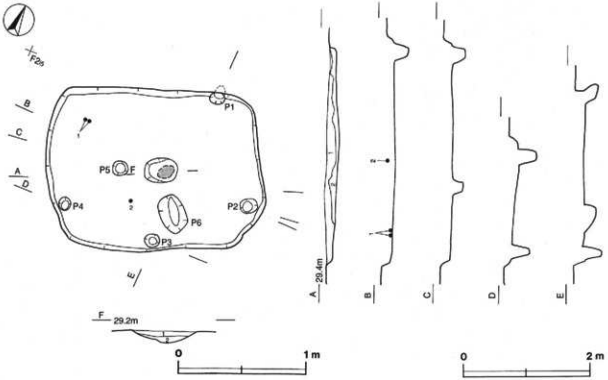
覆土　２層からなり，不規則な堆積状況を示していることから人為堆積である。

土層解説

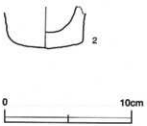
1　褐　　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　明 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物　縄文土器片26点が出土している。うち，縄文土器片２点を抽出・図示した。１は深鉢の底部から胴部にかけての破片で，西コーナー部のほぼ床面から，２は深鉢の底部片で，南東壁寄りの覆土中層から出土している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から，中期後葉(加曽利ＥⅢ～Ⅳ式期)と考えられる。



第60図　第79号住居跡実測図



第61図　第79号住居跡出土遺物実測図

第79号住居跡出土遺物観察表（第61図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B（13.3） C［8.6］	底部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。地文として縦方向の条線文を施している。	長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	P2047　10%
2	深　鉢 縄文土器	B（3.3） C　5.8	底部片。無文。	長石・石英・雲母・白色粒子 橙色，普通	P2048　5%

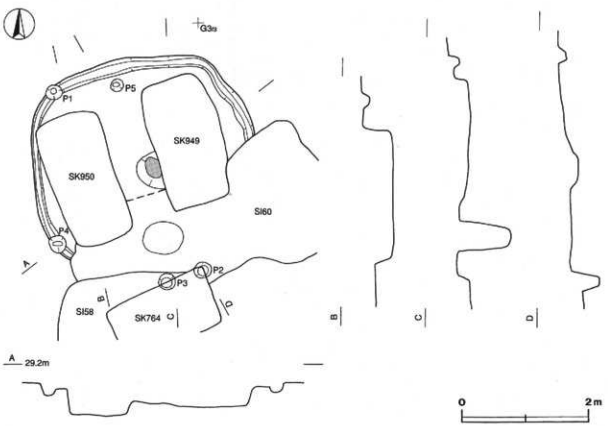
第82号住居跡（第62図）

位置　調査３区の南東部，Ｇ３f2区。

重複関係　第58・60号住居跡及び第764・949・950号土坑に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形　長軸3.56m，短軸3.50mの隅丸方形と推定される。

主軸方向　N－18°－W



第62図　第82号住居跡実測図

ピット　5か所(P１～P５)。P１～P４は長径26～32cm，短径22～30cmの楕円形で，深さは18～46cmである。配列から壁柱穴と考えられる。P５は長径21cm，短径20cmの円形で，深さは９cmであり，その性格は不明である。

炉　中央部に付設されていると考えられる。長径69cm，短径60cmの不整な楕円形を呈する地床炉である。確認面からの深さは11cmである。

遺物　出土していない。

所見　時期は，遺物が出土しておらず正確な時期は不明である。住居の形態から，縄文時代の可能性が考えられる。

第92号住居跡（第63図）

位置　調査４区の南部，Ｈ４b5区。

重複関係　第85号住居跡及び第２号粘土採掘坑に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形　長軸3.74m，短軸3.28mの隅丸方形と推定される。

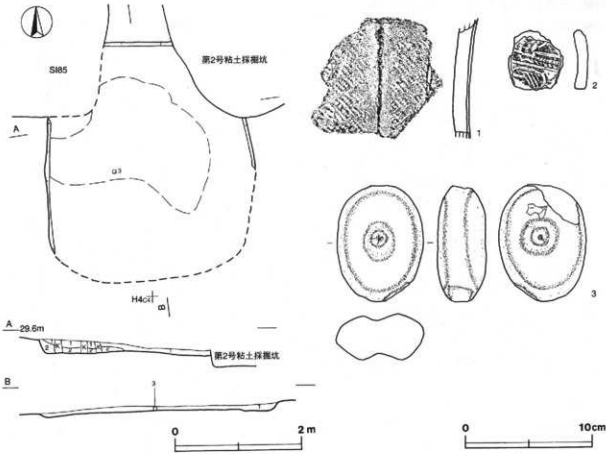
壁　北壁，西壁，東壁の一部が確認された。残存する壁高は12～22cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であり，中央部が硬化している。

ピット　確認されなかった。

炉　確認されなかった。

覆土　２層からなり，レンズ状に堆積することから，自然堆積である。



第63図　第92号住居跡・出土遺物実測図

土層解説
1　黒褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック微量
2　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・粘土小ブロック微量

遺物　縄文土器片47点，土製品１点，石製品１点が出土している。うち，縄文土器片１点，土製品１点，石製品１点抽出・図示した。３は磨石で中央部の覆土中層から，１は深鉢の胴部片，２は土器片錘でともに覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から中期中葉(阿玉台Ⅲ式期)と考えられる。

第92号住居跡出土遺物観察表（第63図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B（9.6）	胴部片。屈折はわずかに外傾して立ち上がる。胴部には縄帯を垂下させている。地文はLR の単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	TP2128　5%

図版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
2	土製円盤	4.7	4.3	0.9	23.2	土製	縄文を地文に沈線が施されている。	DP2002

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
3	磨石	9.1	6.9	3.8	325.8	砂岩	一部欠損。表裏各1孔。側面全体に使用痕有り。	Q2022　PL47

第107号住居跡（第64図）

位置　調査５区の北東部，Ｆ６g7区。

重複関係　第841号土坑と重複するが，本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径4.66m，短径3.40mの長楕円形である。

主軸方向　Ｎ－７°－Ｗ

壁　北壁及び東壁が確認された。残存する壁高は12～20cmで，外傾して立ち上がる。

床　特に硬化面は認められない。

ピット　10か所(Ｐ１～Ｐ10)。Ｐ１～Ｐ10は長径20～26cm，短径16～24cmの楕円形で，深さは13～43cmである。配列から杭穴と考えられる。

炉　確認されなかった。中央部の攪乱により，炉が壊された可能性も考えられる。

覆土　３層からなり，不規則な堆積状況を示していることから人為堆積である。

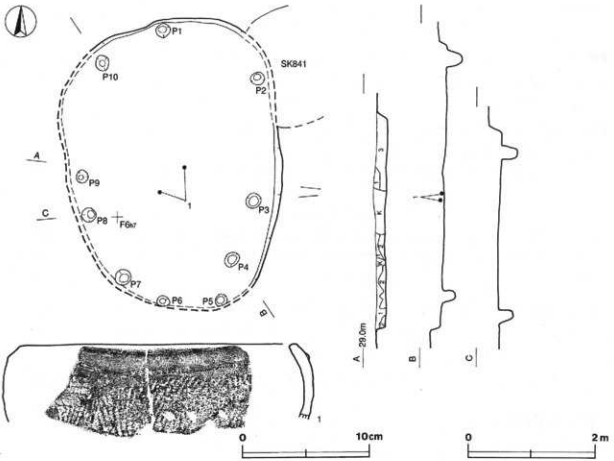
土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量
2　褐　色　ローム粒子多量
3　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子微量

遺物　縄文土器片45点が出土している。うち，縄文土器１点を抽出・図示した。１は深鉢口縁部から胴部片であり，中央部の覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から縄文時代中期後葉(加曽利ＥⅢ式期)と考えられる。

第107号住居跡出土遺物観察表（第64図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A「21.7」 B（6.1）	口縁部片。口縁部は内彎する。口唇部外面直下に微隆帯を施している。	長石・石英・雲母 明褐色 普通	P2050　5%



第64図　第107号住居跡・出土遺物実測図

第108号住居跡（第65図）

位置　調査５区の北東部，Ｆ７g1区。

重複関係　第104号住居跡に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形　北部が第104号竪穴住居跡に掘り込まれ，南東部が調査区域外になるが，長軸5.56m，短軸4.28mの隅丸長方形と推定される。

主軸方向　Ｎ－60°－Ｅ

ピット　９か所(Ｐ1～Ｐ９)。Ｐ1～Ｐ５・Ｐ７・Ｐ８は長径32～51cm，短径28～45cmの楕円形及び円形で，深さは16～92cm，Ｐ６は長径70cm，短径50cmの楕円形で，深さは56cm，Ｐ９は径18cmの円形で，深さは12cmである。

炉　長径68cm，短径61cmで，ほぼ楕円形を呈する地床炉である。床面を17cmほど掘りくぼめている。炉床は，火を受けて赤変硬化している。

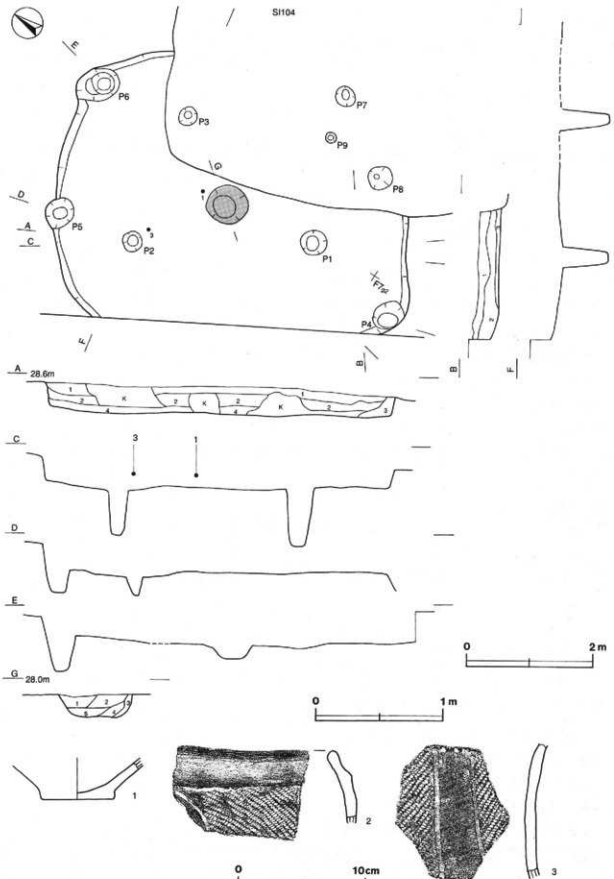
炉土層解説

1　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
3　暗褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック・粘土粒子少量
4　暗赤褐色　焼土大ブロック中量，ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量，粘土中ブロック微量
5　暗褐色　ローム小ブロック中量，ローム大ブロック・ローム粒子・焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量

覆土　４層からなり，レンズ状に堆積することから，自然堆積である。

土層解説

1　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒褐色　ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量，ローム中ブロック・炭化物微量
3　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子微量
4　暗褐色　焼土粒子・炭化粒子多量，ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量



第65図　第108号住居跡・出土遺物実測図

遺物　縄文土器片108点，石製品４点が出土している。うち，縄文土器３点を抽出・図示した。３は深鉢胴部片で南西壁寄り，１は深鉢底部片で中央部の，それぞれ覆土下層から出土している。２は深鉢の口縁部から胴部片で覆土中から出土している。図示しないが，覆土中層から火を受けて炉石と考えられる人頭大ほどの花崗岩が出土している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から中期後葉(加曽利ＥⅣ式期)と考えられる。

第108号住居跡出土遺物観察表（第65図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	D（3.3） C　5.8	底部片。無文。	長石・石英・雲母・白色粒子 橙色，普通	P2051　5％
2	深鉢 縄文土器	H（6.0）	口縁部片。口縁部は内彎する。口縁部には微隆帯及び沈線を施している。地文はＬＲの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 灰黄褐色 普通	TP2123　5％
3	深鉢 縄文土器	H（10.3）	胴部片。胴部は外傾して立ち上がる。沈線間を磨り消している。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	TP2124　5％

第109号住居跡（第66図）

位置　調査５区の北東部，Ｇ５j0区。

規模と平面形　長径5.52m，短径4.54mの楕円形と推定される。

主軸方向　Ｎ－14°－Ｅ

壁　東壁，南東壁，南壁，西壁，北西壁のそれぞれ一部が確認された。壁高は８～18cmであり，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，特に硬化面はみられない。

ピット　６か所(Ｐ１～Ｐ６)。Ｐ１～Ｐ３・Ｐ５・Ｐ６は，長径42～70cm，短径35～49cmの楕円形，Ｐ４は，径30cmの円形で，深さは25～52cmである。配列から主柱穴と考えられる。

炉　長径88cm，短径68cmで，楕円形を呈する地床炉である。床面を10cmほど掘りくぼめている。炉床はわずかに赤変している。

炉土層解説

１　褐　色　ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック少量，焼土大ブロック微量
２　黒褐色　焼土中ブロック・炭化粒子少量
３　黒褐色　焼土小ブロック中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
４　黒褐色　ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土粒子少量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・炭化粒子微量

覆土　単層である。ローム粒子を含む自然堆積と考えられる。

土層解説

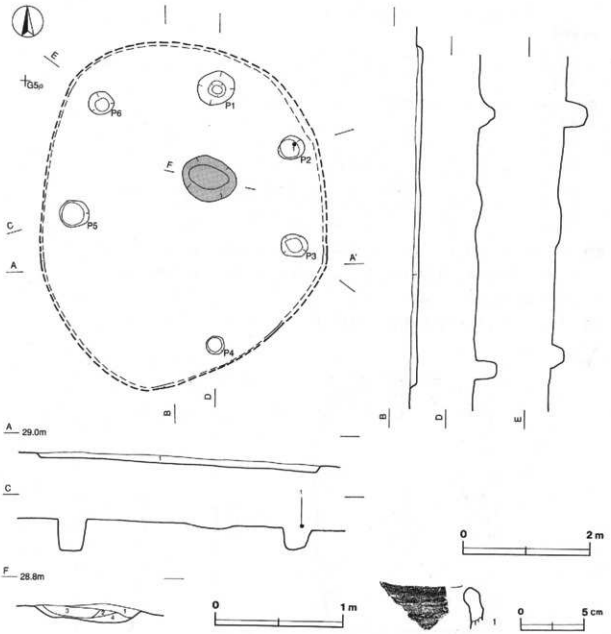
１　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック微量

遺物　縄文土器片19点が出土している。うち，縄文土器１点を抽出・図示した。１は深鉢口縁部片で北東壁際の覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から，中期後葉(加曽利ＥⅣ式期)と考えられる。

第109号住居跡出土遺物観察表（第66図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B（3.3）	口縁部片。口縁部は内彎する。口唇形外面直下に微隆帯を施している。	長石・雲母 灰褐色 普通	TP2125　5％



第66図　第109号住居跡・出土遺物実測図

第113号住居跡（第67・68図）

位置　調査５区の東部，Ｇ６h7区。

重複関係　第102号住居跡の床面下から検出され，本跡が古い。

規模と平面形　長軸4.20m，短軸2.28mの長方形である。

主軸方向　Ｎ－38°－Ｅ

壁　壁高は20～24cmであり，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，壁際を除いて全体的に硬化している。

ピット　18か所(Ｐ１～Ｐ18)。Ｐ１～Ｐ18は長径16～33cm，短径11～28cmの楕円形及び円形であり，深さは10～38cmである。Ｐ１・Ｐ３～Ｐ17は配列から柱穴と考えられる。Ｐ２・Ｐ18の性格は不明である。

炉　ほぼ中央部に付設されている。長径64cm，短径54cmで，楕円形を呈する地床炉である。床面を７cmほど掘

りくぼめている。炉床は，火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子少量
2　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック少量
3　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量，焼土大ブロック微量
4　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック少量，ローム大ブロック微量

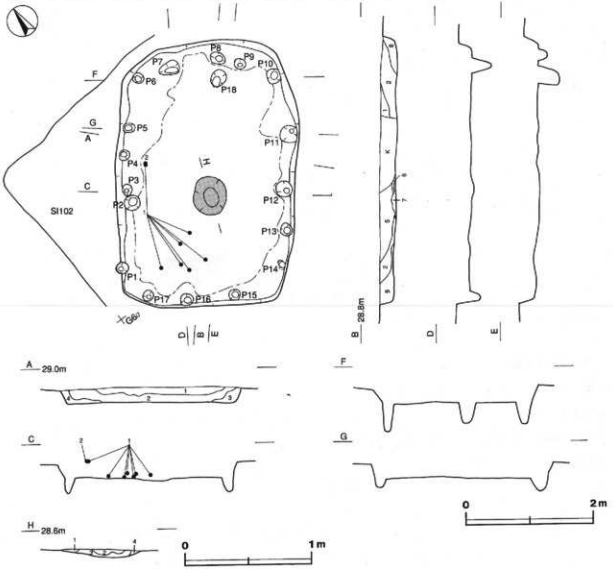
覆土　9層からなり，レンズ状に堆積することから，自然堆積である。

土層解説

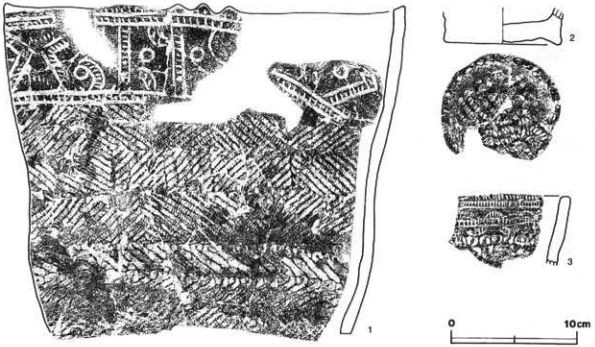
1　黒　褐　色　ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量，ローム中ブロック微量
3　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
4　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量，ローム中ブロック・炭化物微量
5　黒　　色　ローム小ブロック・焼土粒子少量，ローム中ブロック・炭化粒子微量
6　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量，焼土中ブロック・炭化粒子微量
7　黒　褐　色　焼土小ブロック中量，ローム小ブロック少量，焼土大ブロック・焼土中ブロック微量
8　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
9　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム中ブロック微量

遺物　縄文土器片94点が出土している。うち，縄文土器片３点を抽出・図示した。１は深鉢で西コーナー部の覆土下層から覆土中層にかけて出土している。２は深鉢底部片で，北西壁際の覆土中層から，３は深鉢口縁部片であり，覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から前期前葉(二ツ木式期)と考えられる。



第67図　第113号住居跡実測図



第68図　第113号住居跡出土遺物実測図

第113号住居跡出土遺物観察表（第68図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	A［31.8］ B（26.2）	口縁部から胴部にかけての破片。胴部はほぼ直線的に立ち上がり,口縁部に至る。口唇部に突起を有する。口唇部外面直下及び口縁部と胴部の境にキザミを有する平行沈線を巡らしている。口縁部にはキザミを有する平行沈線により直線的,曲線的文様を描出し,円形竹管による刺突文が配されている。胴部の上位にはRL及びLRの単節縄文により羽状縄文を施している。胴部の下位には末端に瘤の付いたRL及びLRの単節縄文により羽状縄文を施している。	長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P2052　40%
2	深　鉢 縄文土器	B（2.9） C　9.0	底部片。底部は上げ底状を呈する。底部にはRLの単節縄文を施している。	長石・石英・白色粒子 橙色，普通	P2053　5%
3	深　鉢 縄文土器	B（5.5）	口縁部から胴部にかけての破片。口縁部は直立する。口唇部外面直下にキザミを有する平行沈線を,口縁部と胴部の境にキザミを有する平行沈線及び弧状文を施している。	長石・石英 にぶい橙色 普通	TP2126　5%

第119号住居跡（第69・70図）

位置　調査５区の東部，Ｇ６h0区。

重複関係　第862号土坑と重複するが，本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径3.42m，短径3.24mの円形である。

主軸方向　Ｎ－28°－Ｗ

壁　壁高は10～14cmで，外傾して立ち上がる。

床　中央部から南西壁際にかけて硬化している。

ピット　６か所(Ｐ1～Ｐ６)。Ｐ１～Ｐ６は径18～30cmの円形で，深さは10～24cmである。その性格はいずれも不明である。

炉　ほぼ中央部に１基(炉１)，北壁寄りに１基(炉２)検出されている。炉１は長径50cm，短径40cmの楕円形で，床面を11cmほど掘りくぼめている。炉２は長径36cm，短径30cmの楕円形で，床面を５cmほど掘りくぼめている。ともに地床炉で，炉床は火を受けて赤変している。炉１と炉２の新旧は不明である。

炉1土層解説
1　極暗赤褐色　焼土小ブロック少量，ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子微量
2　暗赤褐色　焼土粒子少量，ローム粒子・焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック微量
3　極暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子微量

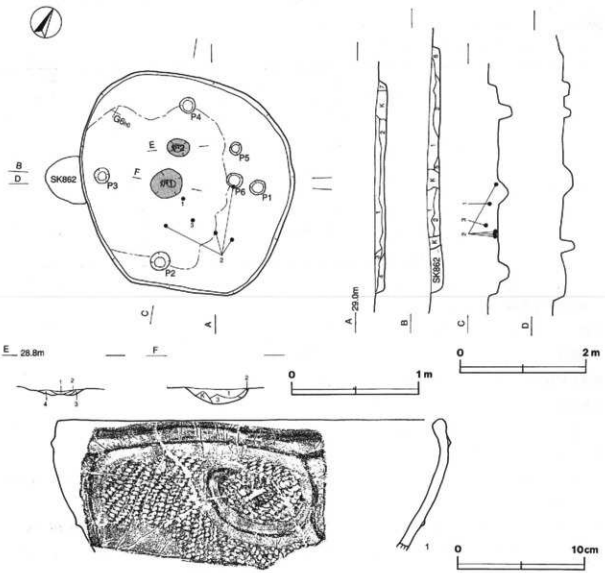
炉2土層解説
1　極暗赤褐色　ローム粒子・焼土小ブロック少量
2　暗赤褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
3　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土小ブロック微量
4　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量

覆土　7層からなり，不規則な堆積状況を示していることから人為堆積である。

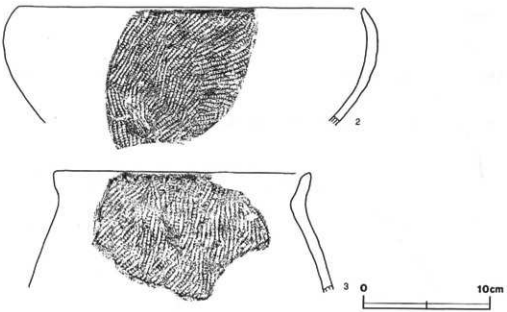
土層解説
1　黒　褐　色　ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ローム大ブロック・ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
4　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量
5　黒　褐　色　ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量
6　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量
7　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

遺物　縄文土器片403点が出土している。うち，縄文土器3点を抽出・図示した。2は深鉢口縁部片で，東壁寄りの覆土下層から出土している。1は深鉢口縁部片，3は壺口縁部から胴部にかけての破片で，それぞれ中央部の覆土中層から出土している。

所見　時期は，出土土器及び住居の形態から，中期後葉(加曽利EⅣ式期)と考えられる。



第69図　第119号住居跡・出土遺物実測図



第70図　第119号住居跡出土遺物実測図

第119号住居跡出土遺物観察表（第69・70図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A〔30.6〕 B〔10.3〕	口縁部片。口縁部は内彎する。口唇部外面直下に幾條帯を巡らせている。口縁部には微隆帯により文様を描出している。地文はＲＬの単節縄文を斜方向に施している。	石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	P2054　10% PL21
2	深鉢 縄文土器	A〔27.5〕 B　(9.1)	口縁部片。口縁部は内彎する。ＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母・白色粒子 にぶい黄橙色，普通	P2055　20%
3	壺 縄文土器	A〔20.2〕 B　(9.3)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は内傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外傾する。ＲＬの単節縄文を斜方向に施している。	石英・雲母 にぶい橙色 普通	P2056　10%

第120号住居跡（第71図）

位置　調査５区の東部，Ｇ７h1区。

規模と平面形　長径4.30m，短径4.08mの円形と推定される。

主軸方向　Ｎ－22°－Ｅ

壁　北西及び東壁の一部が確認された。残存する壁高は14～24cmであり，外傾して立ち上がる。

床　特に硬化面はみられない。

ピット　７か所(Ｐ1～Ｐ７)。Ｐ１～Ｐ７は長径22～40cm，短径21～34cmの楕円形及び円形で，深さは16～60cmであり，配列から柱穴と考えられる。

炉　南壁寄りに付設されている。長径112cm，短径75cmのほぼ楕円形で，床面を12cmほど掘りくぼめた地床炉である。

炉土層解説

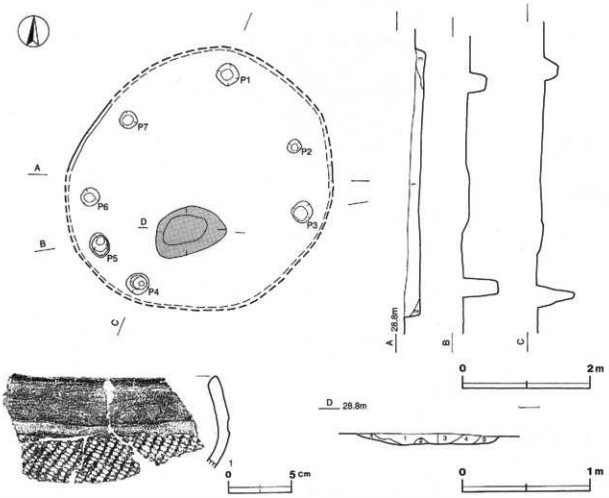
1　黒褐色　ローム小ブロック・焼土小ブロック少量，炭化物・炭化粒子微量
2　極暗褐色　焼土粒子中量，ローム粒子少量，焼土小ブロック微量
3　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
4　極暗褐色　ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
5　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

覆土　３層からなり，レンズ状に堆積することから，自然堆積である。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量，ローム大ブロック・炭化粒子微量
2　暗褐色　ローム粒子少量
3　褐　色　ローム粒子少量

遺物　縄文土器片124点が出土している。うち，縄文土器１点を抽出・図示した。１は深鉢口縁部で覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から，中期後葉(加曽利ＥⅣ式期)と考えられる。



第71図　第120号住居跡・出土遺物実測図

第120号住居跡出土遺物観察表（第71図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B（7.2）	口縁部片。口縁部は内彎する。口縁部には沈線を巡らしている。地文は Rl の羊歯縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲 灰黄褐色 普通	TP2127　5％

縄文時代住居跡一覧表

住居番号	位置	主(長)軸方向	平面型	規模(m)長軸×短軸(m)	壁高(cm)	床面	内部施設							覆土	出土遺物	重複関係(旧→新)	発掘番号
							炉	柱穴	ピット	貯蔵穴	周溝	壁柱穴	壁溝				
2	B 4 b3	N−40°−W	楕円形	6.12×4.88	8～25	平坦	−	14	−	−	1	−	一部	自然	深鉢・磨石・敲石等	SK128・129・277→本跡	SI 3
5	B 4 f6	N−9°−E	楕円形	7.32×6.93	18	平坦		−	5	−	2				深鉢	SK117・119・120・130・149→本跡	SI 8
6	C 4 b4	N−35°−W	楕円形	6.86×4.76	−	平坦	−	−	4	−	1	−	一部	自然	深鉢	SK212・213・262→本跡	SI 9
7	B 4 h7	N−42°−E	楕円形	4.84×4.43	−	平坦	−	−	5	−	1	−	−	自然	深鉢	SK164・167→本跡	SI10
10	B 4 f7		円形	4.10×[4.10]	5～8	平坦	−	5	−	−	2	−	一部	自然	深鉢	本跡→SK112	SI13
11	C 4 a8	−	円形	5.20×5.20	−	−	−	3			1		−		深鉢	SK329・322・323・352→本跡	SI14
12	C 4 e6	−	−	−	−	−	−	2	−	−	1	−	−		深鉢		SI15
13	B 4 j8		−	−	−	−	−	1	−	−	1	−	−		深鉢	SK295・378・400→本跡	SI16
14	C 4 f4	−	円形	4.30×4.30	−	−	−	7	−	−	1	−	−		縄文土器片		SI17
15	B 4 i8	−	−	−	−	−	−	4	−	−	1	−	−		深鉢	SK278・279・[illegible]→本跡	SI18
18	C 4 b7	N−37°−W	円形	[5.19×5.08]		−	−	−	6	−	1	−				SK[illegible]→本跡	SI22
19	C 4 b7	N−68°−E	楕円形	[6.97×5.55]	−	−	−	5	−	−	1	−	−	−	深鉢	SK[illegible]→本跡	SI23
20	B 4 i0		−	−	−	−	−	−	4	−	1	−	−	−	深鉢	SK326・339・344・423→本跡	SI24
21	C 4 d7		−	−	−	−	−	5	−	−	2	−	−		深鉢		SI25
23	B 5 i2	−	−				−	3		−	1				縄文土器片		SI27
24	B 5 i3	−	−	−	−	−	−	6	−	−	1	−	−		深鉢	SK616→本跡	SI28
28	C 4 a9	N−30°−E	楕円形	[6.00×5.20]	−	−	−	−	5	−	1	−	−		深鉢	SK[illegible]→本跡	SI35
30	B 4 j0	−	円形	[4.60×4.60]	16	平坦	−	4			1			自然	敲石・磨石・石匙	SK424・590→本跡	SI38
39	C 5 e8	N−67°−W	楕円形	[5.60×4.60]	−	−	−	−	11	−	1	−	−		縄文土器片	本跡→[illegible]→SK[illegible]	SI47
40	B 5 i6	N−17°−W	長方形	(3.69)×2.73	33～35	平坦	−	−	6	−	−	−		人為	深鉢・石皿・磨石	本跡→SI26,SD1	SI48
41	C 4 h8	N−57°−E	楕円形	[5.75×4.90]	12～24	平坦	−	1	4	−	1	−	一部	自然	深鉢・打製石斧	SK[illegible]→本跡	SI49
42	C 5 b4	N−24°−E	不整楕円形	[4.10×3.80]	−	−	−	6	−	−	1	−	−	−	深鉢	本跡→SI52	SI50
44	C 5 b4	−	−			平坦		5			1	−					SI52
45	C 5 a4	N−22°−W	楕円形	(3.60)×3.36	8～16	平坦	−	4	−	−	−	−	−	−	縄文土器片	本跡→第1号竪穴SK636	SI54
48	C 5 f2	N−47°−W	楕円形	4.56×4.00	−	平坦	−	6	−	−	1	−	−		深鉢		SI57
49	C 4 b0	N−67°−W	不整楕円形	3.40×3.00	10～18	平坦	−	7	−	−	−	−	−		深鉢・敲石・磨石		SI58
51	C 4 e8	−	円形	[5.16×4.80]	−	平坦		11			1				深鉢・磨製石斧		SI60
52	C 5 a3	N−42°−E	楕円形	[4.34×3.74]	8～10	平坦	−	6	−	−	1	−	−		深鉢・石皿・磨石	SK503・504・505・[illegible]→本跡	SI62
53	C 4 e9	−	−	−	−	−	−	13	−		1	−	−		深鉢		SI63
54	B 5 j3	N−65°−W	楕円形	(1.78)×3.21	6～16	平坦	−	3	−	−	−	−	−			本跡→第1号竪穴	SI65
70	F 3 f1	N−13°−W	隅丸方形	4.22×4.06	10～16	平坦	−	1	−	−	1	−	−		深鉢・[illegible]・磨石	本跡→SK697	SI3016
76	F 2 h2	−	不整円形	4.40×4.36	44～50	平坦	−	26	−	−	1	−	−		深鉢・石皿・磨石・[illegible]		SI3022
77	F 2 b0	N−32°−W	不整楕円形	5.50×[4.90]	24～28	平坦	−	14	−	−	1	−	−		深鉢	SK952→本跡	SI3023
78	F 2 e0	N−6°−W	楕円形	6.10×[4.56]	14～28	平坦	−	4	−	−	1	−	−		深鉢・磨製石斧		SI3024
79	F 2 i6	N−70°−E	隅丸長方形	3.40×2.26	8～16	平坦	−	6	−	−	1	−	−		深鉢		SI3025
82	G 3 f2	N−18°−W	隅丸方形	3.56×3.50	10	凹状	完存	5	−	−	1					[illegible]→SK[illegible]・[illegible]→本跡	SI3030
92	H 4 b5	N−3°−W	隅丸長方形	3.74×3.28	12～22	平坦	−	−	−	−	−	−	−		深鉢・[illegible]・敲石	[illegible]→SK[illegible]・[illegible]→本跡	SI4012
107	F 6 g7	N−7°−W	楕円形	4.66×3.40	12～20	平坦		10	−	−	−	−			深鉢		SI5013
108	F 7 g1	N−60°−E	隅丸長方形	5.56×(4.28)	30～40	平坦		9	−	−	1	−	−		深鉢・[illegible]・敲石	本跡→SI104	SI5014
109	G 5 j0	N−5°−E	楕円形	[5.40×4.60]	8～18	平坦	−	6	−	−	1	−	−		深鉢		SI5015
113	G 6 h7	N−38°−E	長方形	4.20×2.82	20～24	平坦	−	18	−	−	1	−	−		深鉢	本跡→SI102	SI5019
119	G 6 b0	−	円形	3.42×3.24	10～14	平坦	−	6	−	−	2	−	−		深鉢・壺		SI5025
120	G 7 h1	−	円形	[4.30×4.08]	14～24	平坦	−	7	−	−	1	−	−		深鉢		SI5027

2　屋外炉

1・3・4・5区の調査で，壁や床，ピットが確認できず，炉のみを検出した遺構8基を屋外炉とした。以下，それらについて記載する。

第1号屋外炉（第72図）

位置　調査1区の北西部，B4a6区。

確認状況　焼土及び埋設土器を検出した。竪穴住居跡の可能性も考えられるが，住居の壁や床，ピットが確認されないことから，屋外炉とした。

重複関係　第27号土坑を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　長径118cm，短径60cmと推定され，楕円形を呈すると考えられる。確認面からの深さは13cmである。

主軸方向　N－52°－E

壁　外傾して立ち上がる。

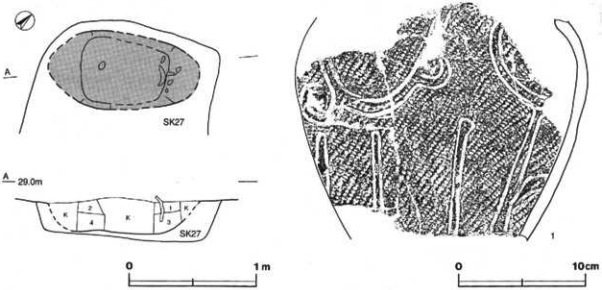
底面　ほぼ平坦である。

覆土　4層からなる。

土層解説
1　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子多量，ローム粒子・焼土中ブロック少量，炭化粒子微量
2　暗赤褐色　焼土小ブロック多量，ローム粒子・焼土粒子中量，焼土中ブロック少量，ローム中ブロック微量
3　暗 褐 色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量，炭化物微量
4　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物　縄文土器片9点が出土している。うち，縄文土器1点を抽出・図示した。1は深鉢胴部片で，北東部に正位で埋設させている。土器は火を受けて赤変している。

所見　時期は，出土土器から，中期後葉(加曽利EⅡ式期)と考えられる。



第72図　第1号屋外炉・出土遺物実測図

第1号屋外炉出土遺物観察表（第72図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B（15.7）	胴部片。胴部は内彎して立ち上がる。胴部には2条一組の沈線により文様を描出している。垂下させた沈線間を磨り消している。	長石・雲母 橙色 普通	P2001　15% 全面被熱

第２号屋外炉（第73図）

位置　調査１区の北西部，Ｂ４e7区。

確認状況　焼土及び埋設土器を検出した。竪穴住居跡の可能性も考えられるが，住居の壁や床，ピットが確認されないことから，屋外炉とした。

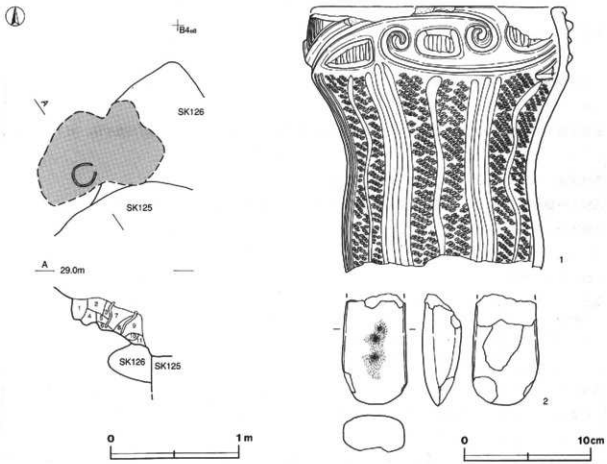
重複関係　第126号土坑を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　長軸101cm，短軸55cmの不定形で，確認面からの深さは31cmである。

主軸方向　Ｎ－67°－Ｅ

壁　外傾して立ち上がる。

底面　凹凸である。



第73図　第２号屋外炉・出土遺物実測図

第２号屋外炉出土遺物観察表（第73図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A 19.6 B (20.6)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は内彎気味に外傾して立ち上がり，口縁部は開きながら内彎する。口縁部には隆帯による区画文，渦巻文及び楕円形文が施されている。胴部には３条一組の沈線による懸垂文と波状の沈線による懸垂文が施され，沈線文間は磨り消されている。地文はＬＲＬの横節縄文を横方向に施している。	長石・雲母 橙色 普通	P2004　70% 内面上半被熱 PL21

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	特徴	備考
2	磨製石斧	(8.7)	5.2	(3.0)	(215.8)	粘板岩	基部欠損。定角式磨製石斧。	Q2008

覆土　11層からなる。特に第２・３層が赤変硬化している。

土層解説

1　暗 褐 色　ローム小ブロック多量，ローム大ブロック・ローム中ブロック少量，焼土粒子微量
2　暗赤褐色　ローム中ブロック中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量，ローム大ブロック微量
3　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土中ブロック・焼土小ブロック中量
4　暗 褐 色　ローム小ブロック多量，ローム大ブロック・ローム中ブロック少量，焼土粒子微量
5　暗赤褐色　ローム小ブロック多量，焼土粒子少量，焼土小ブロック微量
6　暗赤褐色　ローム小ブロック多量，焼土粒子中量
7　暗 褐 色　ローム小ブロック多量，焼土粒子微量
8　明赤褐色　ローム小ブロック多量，焼土粒子中量
9　明赤褐色　焼土粒子中量，ローム中ブロック・焼土小ブロック微量
10　褐　　色　焼土粒子中量，焼土小ブロック微量
11　黒 褐 色　焼土粒子少量，炭化粒子微量

遺物　縄文土器片50点，石器１点が出土している。うち，縄文土器１点，磨製石斧１点を抽出・図示した。１は深鉢で，南西部に正位に埋設されている。土器は火を受けて赤変している。２は磨製石斧で北部の覆土上層から出土している。

所見　時期は，出土土器から，中期後葉(加曽利ＥⅡ式期)と考えられる。

第３号屋外炉（第74・75図）

位置　調査１区の南部，Ｃ４h0区。

確認状況　焼土及び埋設土器を検出した。竪穴住居跡の可能性も考えられるが，住居の壁や床，ピットが確認されないことから，屋外炉とした。

重複関係　第552号土坑を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　長径63㎝，短径42㎝であり，不整楕円形を呈する。確認面からの深さは17㎝である。

主軸方向　Ｎ－62°－Ｅ

壁　外傾して立ち上がる。

底面　凹凸である。

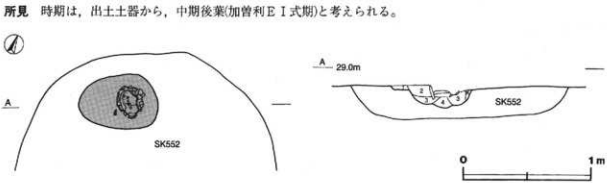
覆土　４層からなる。

土層解説

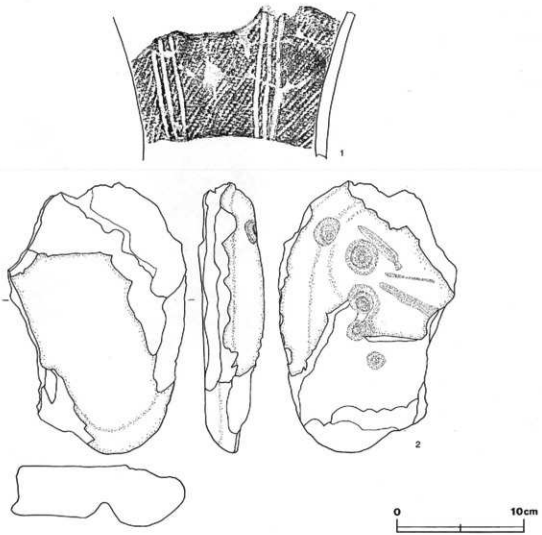
1　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子微量
2　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，炭化粒子少量，ローム粒子・炭化物微量
3　暗赤褐色　炭化粒子中量，焼土小ブロック少量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
4　黒 褐 色　焼土小ブロック・焼土粒子少量，ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子微量

遺物　縄文土器片20点，石器１点が出土している。うち，縄文土器１点，凹石１点を抽出・図示した。１は深鉢胴部片で中央部からやや北西よりに正位で埋設されている。２は凹石で１の深鉢内の覆土中層から出土している。土器は火を受けて赤変している。

所見　時期は，出土土器から，中期後葉(加曽利ＥⅠ式期)と考えられる。



第74図　第３号屋外炉実測図



第75図　第３号屋外炉出土遺物実測図

第３号屋外炉出土遺物観察表（第75図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B（11.7）	胴部片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部には３条一組の沈線による懸垂文が施されている。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P 2015　15%

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
2	凹石	(21.4)	(14.0)	5.3	(1631.5)	砂岩	機能面がわずかに凹む。裏面５穿孔。	Q 2006

第４号屋外炉（第76図）

位置　調査１区の中央部，Ｃ４a9区。

確認状況　確認面で炉を検出した。竪穴住居跡の可能性も考えられるが，住居の壁や床，ピットが確認されないことから，屋外炉とした。

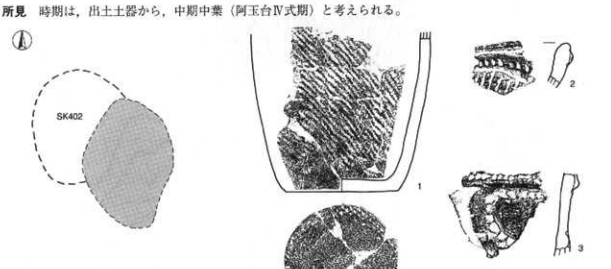
重複関係　第402号土坑を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　長径102cm，短径71cmであり，不整楕円形を呈する。

主軸方向　N－15°－W

遺物　縄文土器片84点が出土している。うち，縄文土器３点を抽出・図示した。１は深鉢底部から胴部片，２は深鉢口縁部片，３は深鉢胴部片で，いずれも覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から，中期中葉（阿玉台Ⅳ式期）と考えられる。



第76図　第４号屋外炉・出土遺物実測図

第４号屋外炉出土遺物観察表（第76図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B（12.5） C　8.8	底部から胴部片。胴部は外傾して立ち上がる。施文はLRの単節縄文を縦方向に施している。	石英・雲母・礫 橙色 普通	P2020　20%
2	深　鉢 縄文土器	B（3.6）	口縁部片。口縁部は外傾する。口縁部にはキザミを有する隆帯と隆帯に沿った結節沈線文を施している。	長石・石英・礫 明褐色 普通	TP2029　5%
3	深　鉢 縄文土器	B（6.3）	胴部片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部には隆帯と隆帯に沿った結節沈線文を施している。	長石・石英・雲母・礫・赤色粒子 褐色，普通	TP2030　5%

第５号屋外炉（第77図）

位置　調査１区の中央部，Ｂ５i2区。

確認状況　焼土及び埋設土器を検出した。竪穴住居跡の可能性も考えられるが，住居の壁や床，ピットが確認されないことから，屋外炉とした。

重複関係　第405号土坑を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　確認面において口径32cmの深鉢を検出した。確認できた掘り方の底面の幅は43cmであり，その平面形は不明である。埋設された深鉢口唇部からの深さは23cmである。

壁　内傾して立ち上がる。

底面　ほぼ平坦である。

覆土　６層からなる。

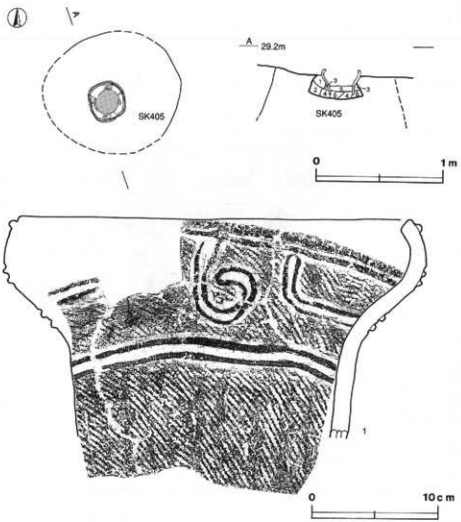
土層解説

1　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，炭化粒子少量，ローム粒子・炭化物微量
2　暗 褐 色　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量

3　橙褐赤褐色　焼土小ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子微量
4　暗赤褐色　炭化粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物少量，ローム粒子・焼土中ブロック微量
5　黒 褐 色　焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量
6　暗 褐 色　焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量

遺物　復元可能土器１点を含む縄文土器片13点が出土している。うち，縄文土器１点を抽出・図示した。１は深鉢口縁部から胴部片で正位に埋設されている。

所見　時期は，出土土器から，中期後葉(加曽利ＥⅠ式期)と考えられる。



第77図　第５号屋外炉・出土遺物実測図

第５号屋外炉出土遺物観察表（第77図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	A［28.6］ B（17.5）	口縁部から胴部片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は内彎する。口唇部外面直下に１条，口縁部と胴部の境に２条一組の隆帯を巡らしている。口縁部には２条一組の隆帯によりクランク文，渦巻文を施している。地文はＬＲの羊歯縄文を縦方向に施している。	長石・雲母・爆 灰褐色 普通	P2021　40% PL21

第６号屋外炉（第78図）

位置　調査１区の中央部，Ｃ５b2区。

確認状況　第10号溝を完掘後，精査したところ本跡の焼土及び埋設土器を検出した。竪穴住居跡の可能性も考えられるが，住居の壁や床，ピットが確認されないことから，屋外炉とした。

重複関係　第10号溝を完掘後，底面を精査したところ本跡を確認した。第10号溝の覆土下より検出しており本跡が古いと考えられる。

規模と平面形　長軸44cm，短軸32cmの不定形である。埋設された深鉢口唇部からの深さは16cmである。

主軸方向　N－73°－E

壁　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

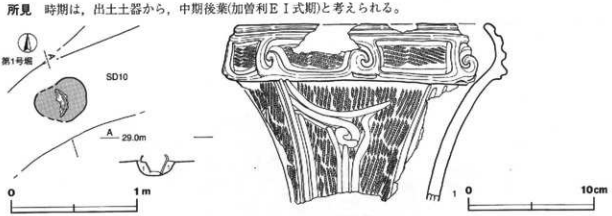
覆土　単層である。

土層解説

1　極暗赤褐色　ローム小ブロック多量

遺物　復元可能土器1点を含む縄文土器片5点が出土している。うち，縄文土器1点を抽出・図示した。1は底部から胴部を欠く深鉢で，正位に埋設されている。

所見　時期は，出土土器から，中期後葉(加曽利ＥⅠ式期)と考えられる。



第78図　第6号屋外炉・出土遺物実測図

第6号屋外炉出土遺物観察表（第78図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	A【20.0】 B（14.2）	口縁部から胴部片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は内湾する。口唇部外面直下及び口縁部と胴部の境に隆帯を巡らしている。口縁部には隆帯と沈線により区画文と渦巻文を描出している。胴部には3条一組の沈線により文様を描出している。地文は撚糸文である。	長石・石英 にぶい橙色 普通	P.2035　25% PL21

第7号屋外炉（第79図）

位置　調査1区の南部，Ｃ4e0区。

確認状況　焼土及び埋設土器を検出した。竪穴住居跡の可能性も考えられるが，住居の壁や床，ピットが確認されないことから，屋外炉とした。

規模と平面形　長径54cm，短径50cmであり，不整円形を呈する。確認面からの深さは25cmである。

壁　なだらかに立ち上がる。

底面　凹凸である。

覆土　4層からなる。

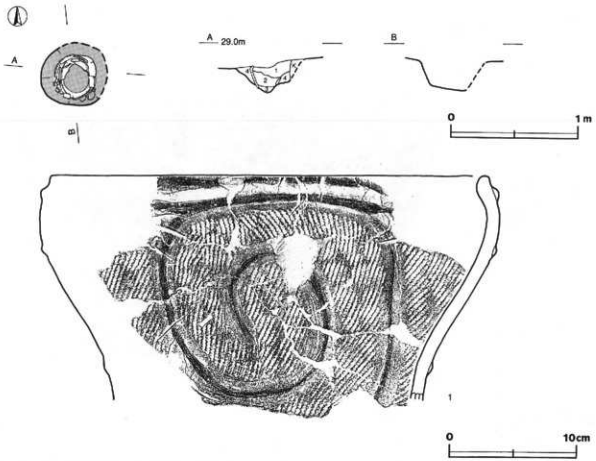
土層解説

1　黒褐色　ローム粒子少量，焼土小ブロック・炭化粒子微量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
4　暗褐色　焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量

遺物　縄文土器片32点が出土している。うち，縄文土器1点を抽出・図示した。1は深鉢口縁部から胴部片で，

正位に埋設されている。

所見　時期は，出土土器から，中期後葉(加曽利ＥⅢ式期)と考えられる。



第79図　第７号屋外炉・出土遺物実測図

第７号屋外炉出土遺物観察表（第79図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	A［34.0］ B（17.6）	口縁部から胴部片。口唇部外面直下に微隆帯を巡らしている。口縁部には微隆帯により文様を描出している。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英 にぶい赤褐色 普通	P2039　40% PL21

第８号屋外炉（第80図）

位置　調査４区の北部，Ｆ３j9区。

確認状況　焼土及び埋設土器を検出した。竪穴住居跡の可能性も考えられるが，住居の壁や床，ピットが確認されないことから，屋外炉とした。

規模と平面形　長径65cm，短径58cmであり，楕円形を呈する。確認面からの深さは47cmである。

壁　なだらかに立ち上がる。

底面　皿状である。

覆土　７層からなる。

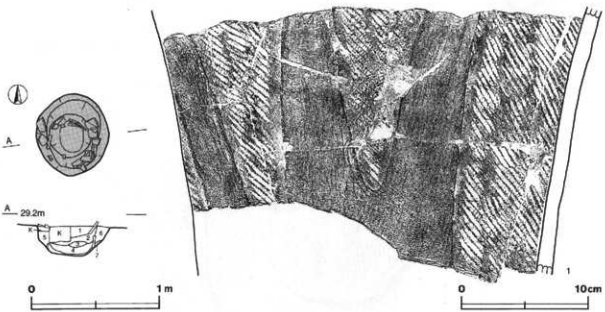
土層解説

1　暗 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
2　暗赤褐色　ローム粒子・焼土小ブロック中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量
3　にぶい褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

4　褐　色　ローム粒子多量，ローム大ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子少量
5　暗褐色　焼土粒子多量，ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子微量
6　暗褐色　ローム小ブロック中量，ローム粒子・焼土粒子少量
7　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量

遺物　縄文土器片20点が出土している。うち，縄文土器１点を抽出・図示した。１は深鉢胴部片で，ほぼ正位に埋設されている。

所見　時期は，出土土器から，中期後葉(加曽利ＥⅣ式期)と考えられる。



第80図　第８号屋外炉・出土遺物実測図

第８号屋外炉出土遺物観察表（第80図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B（21.2）	胴部片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部には微隆帯により文様を描出しており，微隆帯間を磨り消している。地文はＬＲの羊歯縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	P2049　30% PL21

屋外炉一覧表

屋外炉番号	位　置	長径方向(長軸方向)	平面形	規模 長径×短径(cm)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	出土遺物	重複関係(Ⅲ→新)	発掘番号
1	B 4 a6	N－52°－E	楕円形	118×60	13	外傾	平坦	深鉢	SK27→本跡	SI 2
2	B 4 e7	N－67°－E	不定形	101×55	31	外傾	凹凸	深鉢，磨製石斧	SK126→本跡	SI 7
3	C 4 h0	N－62°－E	不整楕円形	63×42	17	外傾	凹凸	深鉢，凹石	SK552→本跡	SI21
4	C 4 a9	N－15°－W	不整楕円形	102×71	32	外傾	平坦	深鉢	SK402→本跡	SI31
5	B 5 i2	－	－	－	23	内傾	平坦	深鉢	SK405→本跡	SI32
6	C 5 b2	N－73°－E	不定形	44×32	16	外傾	平坦	深鉢	本跡→SD10	SI61
7	C 4 e0	－	不整円形	54×50	25	緩斜	凹凸	深鉢		SI64
8	F 3 j9	N－15°－W	不整楕円形	102×71	32	外傾	平坦	深鉢		SI4017

3　土坑

1・3・4・5区の調査では，土坑545基を確認した。フラスコ状土坑は貯蔵穴であると規定し，同じ用途と考えられる円筒状土坑も含めた。土坑は，遺構の残存状況や遺物の出土状況が良好なものについて解説を加え，それ以外のものは一覧表で記載した。

（1）フラスコ状土坑

第1号土坑（第81～84図）

位置　調査1区の北西部，A 4 j2区。

規模と平面形　開口部は長径1.85m，短径1.25mの楕円形，底面は長径2.85m，短径2.50mの楕円形で，深さは102cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

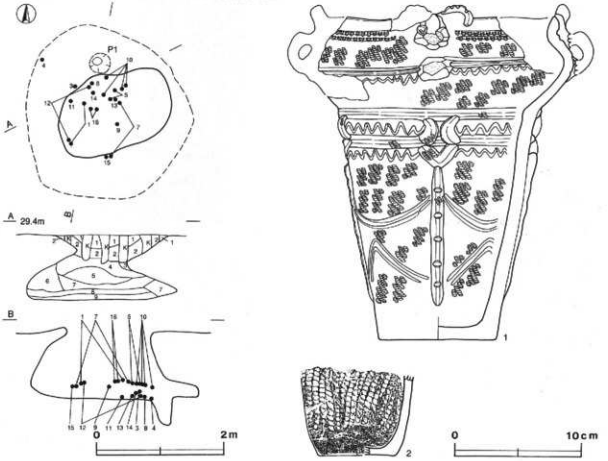
底　ほぼ平坦である。

ピット　1か所。P 1は北壁寄りに位置し，径34cmの円形で，深さは45cmである。

覆土　9層に分層され，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

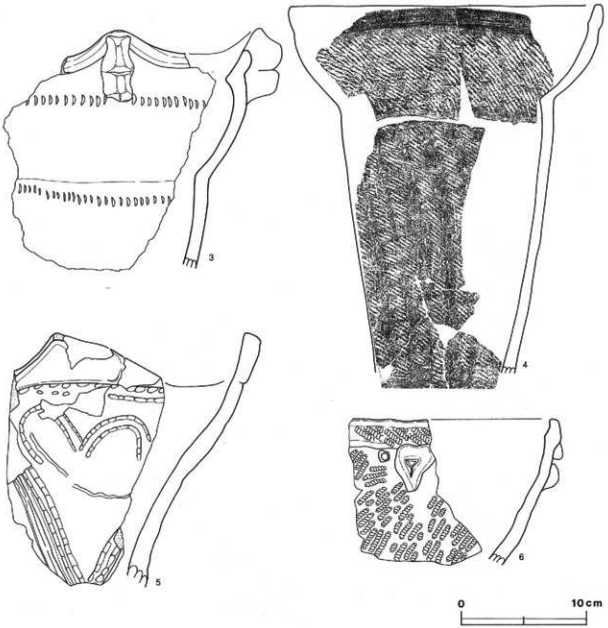
1　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・炭化粒子少量
3　褐　色　ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子多量
4　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子微量
5　暗褐色　炭化物中量，ローム小ブロック少量
6　暗赤褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子微量
7　暗褐色　炭化物・炭化粒子中量，ローム小ブロック少量
8　褐　色　ローム中ブロック・ローム粒子中量
9　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子中量



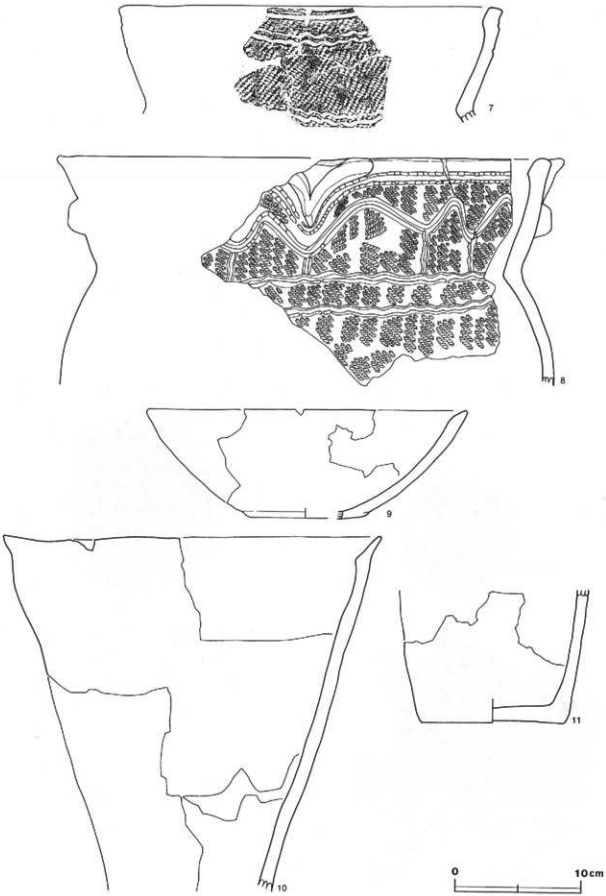
第81図　第1号土坑・出土遺物実測図

遺物　縄文土器片1186点，磨製石斧２点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器16点，打製石斧２点である。第83図８は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片，11は深鉢の胴部から底部にかけての破片，13は深鉢の胴部から底部にかけての破片で，それぞれ中央部の底面から横位で出土している。４は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，底面から出土している。１は口縁部が一部欠損する波状口縁を呈する深鉢で，南西部の覆土下層から出土している。３は波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，中央部の覆土下層から出土している。７は深鉢の口縁部片で，中央部の覆土下層から逆位で出土している。12は深鉢の胴部から底部にかけての破片で，西部の覆土下層から出土している。14・15は深鉢の胴部から底部にかけての破片で，それぞれ中央部の覆土下層から出土している。５・10は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，それぞれ北部の覆土中層から出土している。９は口縁部が一部欠損する浅鉢で，中央部の覆土中層から出土している。２は深鉢の胴部から底部にかけての破片，６は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片，16は深鉢の胴部片，17・18は打製石斧で，それぞれ覆土から出土している。

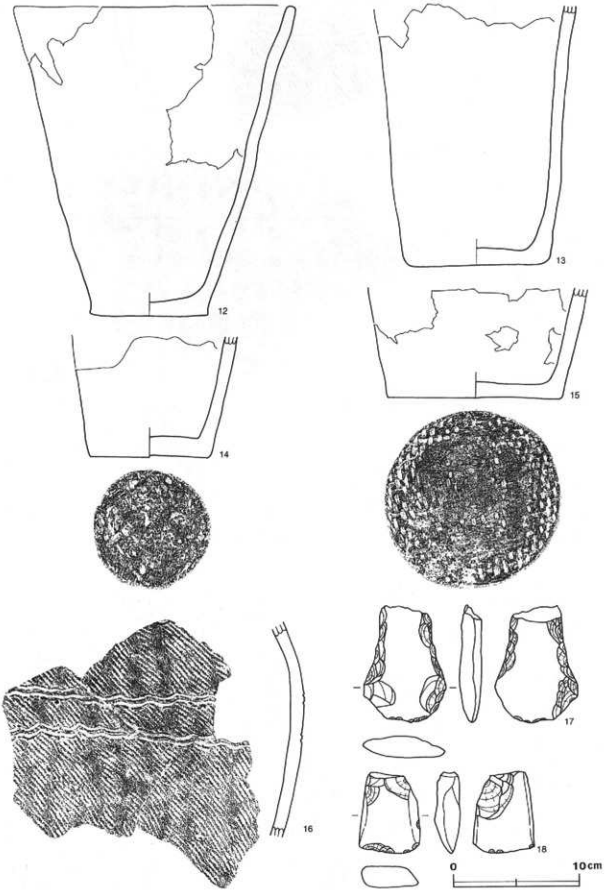
所見　時期は，出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅱ式期)と考えられる。



第82図　第１号土坑出土遺物実測図（１）



第83図　第１号土坑出土遺物実測図（２）



第84図　第１号土坑出土遺物実測図（３）

第1号土坑出土遺物観察表（第81～84図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A [18.4] B 25.7 C 9.2	口縁部の一部欠損。胴部はやや外傾して立ち上がり，口縁部は内弾して立ち上がる。口唇部直下には強状工具による刺突文を巡らしている。胴部には隆帯で格子形に区画文を施している。区画した隆帯内には波状沈線を施している。区画文から垂下した隆帯には指頭による押圧を施している。垂下した隆帯間にX字状の沈線を施している。地文はLRの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英 にぶい橙色 普通	P1 60% PL22
2	深鉢 縄文土器	B (6.3) C [5.8]	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。地文はLRの単節縄文を斜方向に施している。	長石・石英 にぶい橙色 普通	P8 10%
3	深鉢 縄文土器	B (19.0)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部はやや内弾する。小波状の口縁を呈し，そこに隆帯で山形状の突出部を作出している。胴部には，横位に連続爪形文を2段に巡らしている。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P5 5%
4	深鉢 縄文土器	A 24.6 B (29.0)	口縁部の一部欠損。底部欠損。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は内弾して立ち上がる。口縁部の内側に稜を持つ。地文はRLの単節縄文を横方向に施している。	長石・雲母 黒褐色 普通	P4 70% PL22
5	深鉢 縄文土器	B (20.0)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり，口縁部は内弾気味に立ち上がる。小波状の口縁を呈する。口縁部には複列の結節沈線文で楕円形の区画文を施している。	長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P6 5%
6	深鉢 縄文土器	B (11.5)	口縁部片。口縁部はやや内弾する。口縁部には隆帯が巡り，「V」字状の隆帯を貼付している。「V」字状の隆帯の脇には孔が穿けられている。口縁部の隆帯にはRLの単節縄文を横方向に施している。地文はRLの単節縄文を施している。	長石・石英 にぶい褐色 普通	P7 5%
7	深鉢 縄文土器	A [30.4] B (9.0)	口縁部片。口縁部はやや内弾して立ち上がる。口唇部は平坦である。口唇部直下に平行の波状沈線文を巡らしている。地文はRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・雲母 灰褐色 普通	P3 5%
8	深鉢 縄文土器	A [38.0] B (17.0)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は湾曲して，口縁部は内弾して立ち上がる。口唇部には隆帯が巡り，「V」字状の隆帯を貼付している。隆帯に付随し，複列の結節沈線文を施している。胴部には波状沈線を縦方向や横方向に施し，文様を描出している。地文はLRの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P2 5%
9	浅鉢 縄文土器	A [25.0] B 8.5 C [9.2]	口縁部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。口縁部の内側に弱い稜を持つ。胴部は無文。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P15 20%
10	深鉢 縄文土器	A [29.4] B (28.1)	底部，口縁部の一部欠損。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外傾する。口縁部の内側に稜を持つ。胴部は無文。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P9 30% PL22
11	深鉢 縄文土器	B (10.5) C 11.3	胴部から底部にかけての破片。胴部は緩やかに外傾して立ち上がる。胴部は無文。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P13 10%
12	深鉢 縄文土器	A [22.4] B 24.4 C 9.4	口縁部から胴部の一部欠損。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は内弾する。胴部は無文。	長石・石英 灰褐色 普通	P10 5%
13	深鉢 縄文土器	B (20.3) C 10.6	胴部から底部にかけての破片。胴部は緩やかに外傾して立ち上がる。胴部は無文。	長石・石英・雲母 暗赤褐色 普通	P11 30%
14	深鉢 縄文土器	B (9.5) C 9.1	胴部から底部にかけての破片。胴部は緩やかに外傾して立ち上がる。胴部は無文。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P14 10% 底部網代痕有り
15	深鉢 縄文土器	B (8.8) C 13.7	胴部から底部にかけての破片。胴部は緩やかに外傾して立ち上がる。胴部は無文。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P12 10% 底部網代痕有り
16	深鉢 縄文土器	B (20.7)	胴部片。胴部は内弾して立ち上がる。半截竹管による平行波状沈線を2段に巡らしている。	長石・雲母 にぶい橙色 普通	TP1 5%

図版番号	器　種	計測値				石　質	特　　徴	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
17	打製石斧	(9.3)	6.5	1.6	(122.8)	粘　板　岩	頭部欠損。両側縁の抉りが浅い。	Q 1
18	打製石斧	(6.4)	4.8	2.0	(71.5)	粘　板　岩	刃部のみ遺存。刃部平面形は円刃で，片刃。	Q 2

第２号土坑（第85図）

位置　調査１区の北西部，Ａ４i4区。

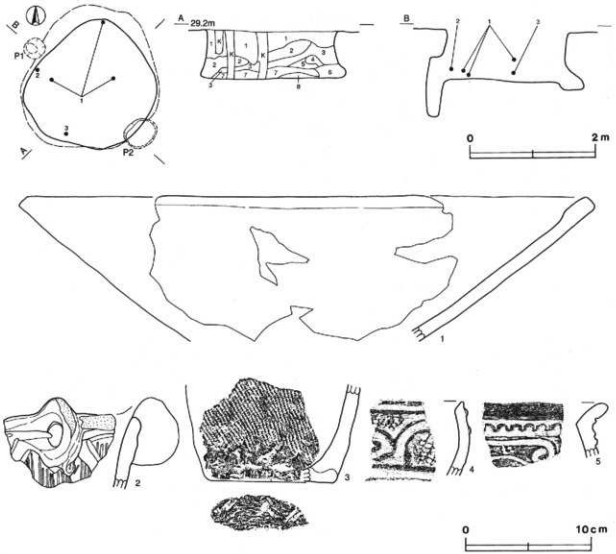
規模と平面形　開口部は長径2.04m，短径1.95mの円形，底面は長径2.40m，短径2.00mの楕円形で，深さは73cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

ピット　２か所。Ｐ１は北西壁際に位置し，径30cmの円形で，深さは60cmである。Ｐ２は南東壁際に位置し，長径50cm，短径43cmの楕円形で，深さは12cmである。

覆土　８層に分層され，不規則な堆積状況やロームブロック・鹿沼パミスブロックを多く含んでいることから，人為堆積と考えられる。



第85図　第２号土坑・出土遺物実測図

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，炭化物・炭化粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・炭化粒子・鹿沼パミス小ブロック少量
3　暗褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス粒子少量
4　暗褐色　ローム粒子多量，ローム大ブロック・ローム小ブロック中量，鹿沼パミス小ブロック少量
5　黒褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・炭化物少量
6　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，鹿沼パミス小ブロック少量
7　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，鹿沼パミス粒子少量
8　暗褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・鹿沼パミス小ブロック少量

遺物　縄文土器片249点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器5点である。第85図3は深鉢の胴部から底部にかけての破片で，南西部の底面から出土している。2は把手を有する深鉢の口縁部片で，北西部の覆土下層から出土している。1は浅鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，覆土下層から中層にかけて出土している。4・5は深鉢の口縁部片で，それぞれ覆土から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期後葉(加曽利E Ⅰ式期)と考えられる。

第2号土坑出土遺物観察表（第85図）

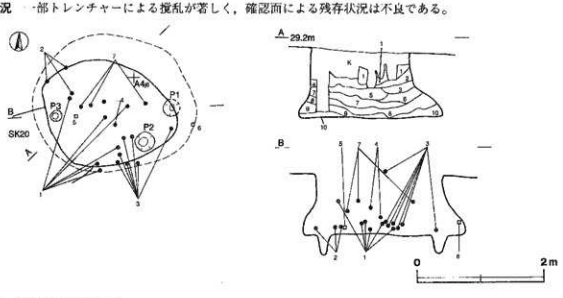
図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	浅鉢 縄文土器	A (43.6) B 11.4	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。口縁部の内側には稜を持つ。胴部は無文。	長石・石英・雲母 明褐色 普通	P18 15% 内・外面一部赤彩
2	深鉢 縄文土器	B (7.0)	把手部片。波頂部に付く橋状の突起で，突起の下に口縁に沿う隆帯が，この突起上まで伸びる。口唇部直下には隆帯を強し，その延長上に降帯で区画文を施している。区画内には縦位の沈線を施している。	長石・石英・雲母 明褐色 普通	P16 5%
3	深鉢 縄文土器	B (7.9) C [9.8]	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。地文はLRの単節縄文を縦方向に施している。	長石・雲母・赤色粒子 にぶい橙色，普通	P17 5% 底部網代痕有り
4	深鉢 縄文土器	B (5.7)	口縁部片。口縁部は内彎して立ち上がる。断面三角形の細い隆帯で楕円形の区画文を施している。区画内にはRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	TP3 5%
5	深鉢 縄文土器	B (5.4)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。口唇部直下には棒状工具による刺突文を巡らしている。そのドには沈線で，渦巻文を施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	TP2 5%

第3号土坑（第86～89図）

位置　調査1区の北西部，A 4 j5区。

重複関係　本跡が第20号土坑の東側部分を掘り込んでいることから，第20号土坑より新しい。

確認状況　一部トレンチャーによる撹乱が著しく，確認面による残存状況は不良である。



第86図　第3号土坑実測図

規模と平面形　撹乱が著しく，規模及び平面形はともに推定で，開口部は長径2.20m，短径1.70mの楕円形，底面は長径2.66m，短径2.20mの楕円形で，深さは92cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

ピット　3か所。P１は東壁寄りに位置し，径26cmの円形で，深さは33cmである。P２は南壁寄りに位置し，径30cmの円形で，深さは18cmである。P３は西壁寄りに位置し，径19cmの円形で，深さは35cmである。

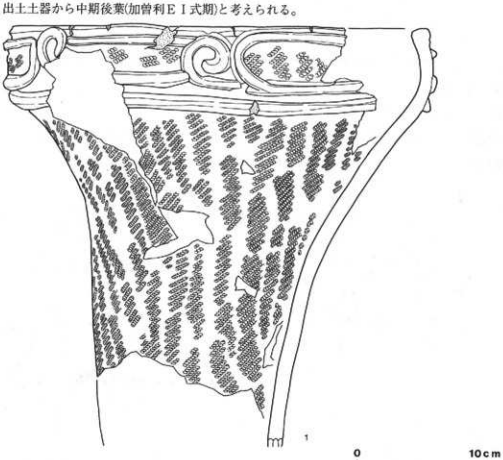
覆土　10層に分層され，上層は一部撹乱を受けている。ロームブロックや鹿沼パミスブロックを多く含んでいることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

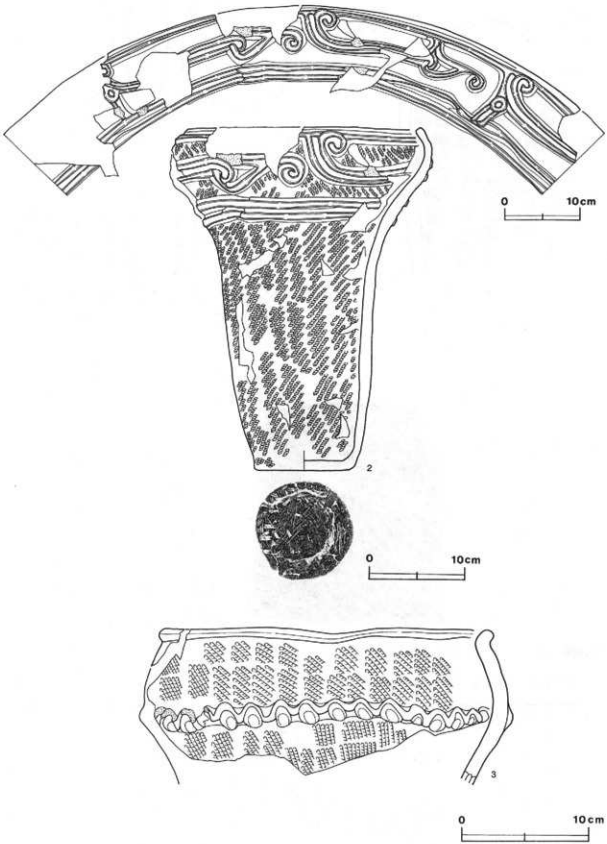
1　褐　色　ローム粒子・焼土大ブロック中量，炭化粒子微量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・鹿沼パミス小ブロック少量
3　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，炭化粒子少量
4　暗褐色　ローム大ブロック・ローム小ブロック中量，ローム粒子少量
5　黒褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
6　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・鹿沼パミス小ブロック少量
7　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・鹿沼パミス小ブロック少量
8　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム少ブロック少量
9　褐　色　ローム粒子・鹿沼パミス小ブロック中量，ローム小ブロック少量
10　褐　色　ローム粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック中量

遺物　縄文土器片406点，凹石２点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器５，凹石２点である。第87図２は口縁部が一部欠損する深鉢で，覆土下層から出土している。１・３は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，覆土下層から中層にかけて出土している。４は小波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部にかけての破片，７は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，それぞれ中央部の覆土中層から出土している。５・６は凹石で，それぞれ覆土下層から出土している。

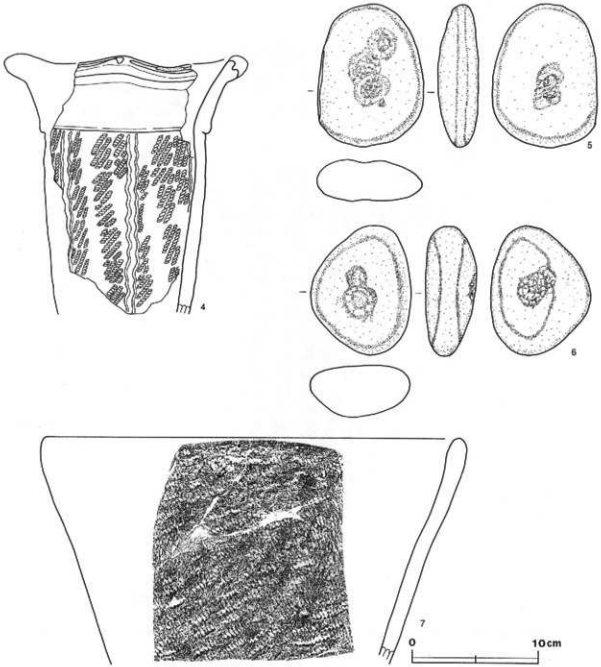
所見　時期は，出土土器から中期後葉(加曽利ＥⅠ式期)と考えられる。



第87図　第３号土坑出土遺物実測図（１）



第88図　第３号土坑出土遺物実測図（２）



第89図　第３号土坑出土遺物実測図（３）

第３号土坑出土遺物観察表（第87～89図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A 32.1 B (33.2)	胴部の一部欠損。底部欠損。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は内弯して立ち上がる。口唇部直下には沈線が巡る。口縁部は隆帯と沈線で渦巻文や楕円形の区画文を施している。その下には隆帯を巡らしている。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P20　80% ＰＬ22
2	深鉢 縄文土器	A 24.5 B 36.2 C 10.6	口縁部，底部の一部欠損。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は内弯して立ち上がる。口唇部直下には沈線が巡る。口縁部は隆帯と沈線で渦巻状の文様を巡らしている。口縁部と頸部との境には隆帯や棒状工具による沈線を巡らしている。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 明褐色 普通	P19　90% ＰＬ22 底部網代痕有り
3	深鉢 縄文土器	A 25.4 B (12.5)	胴部から底部の一部欠損。頸部は外傾して立ち上がり，口縁部は内弯する。口縁部に背の高い隆帯を巡らし，隆帯上に下方から指頭による押圧を加えている。地文はＬの無節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・パミス 明赤褐色 普通	P21　20% ＰＬ22

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
4	深鉢 縄文上器	A [19.5] B (20.3)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は内彎気味にのち上がり、口縁部に至る。口縁は小波状口縁を呈し、その下に沈線で装飾文を施している。胴部は波状の平行沈線文を垂下させている。地文はRLの単節縄文を横方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P22 30% P1.22
7	深鉢 縄文上器	A [33.3] B (18.0)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。地文はRLの単節縄文を横や斜方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P23 20%

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
5	凹石	11.3	8.4	3.3	452.6	砂岩	表面に3穿孔、裏面に2穿孔。	Q3
6	凹石	10.2	8.0	4.1	424.2	砂岩	表面に2穿孔、裏面に3穿孔。	Q4

第4号土坑（第90・91図）

位置　調査1区の北部，B 5a4区。

重複関係　第233号土坑と重複している。本跡が第233号土坑の北側部分を掘り込んでいることから，第233号土坑より新しい。

確認状況　一部トレンチャーによる撹乱が著しく，確認面による残存状況は不良である。

規模と平面形　撹乱が著しく，規模及び平面形はともに推定で，開口部は長径2.30m，短径2.10mの不整楕円形，底面は長径2.55m，短径2.30mの不整楕円形で，深さは60cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

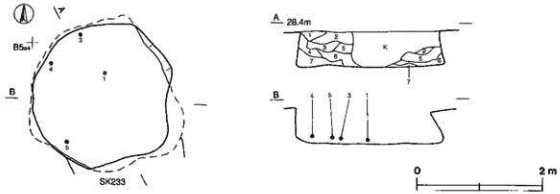
底　ほぼ平坦である。

覆土　7層に分層され，ローム・焼土・鹿沼パミスブロックの含有状況から，人為堆積と考えられる。

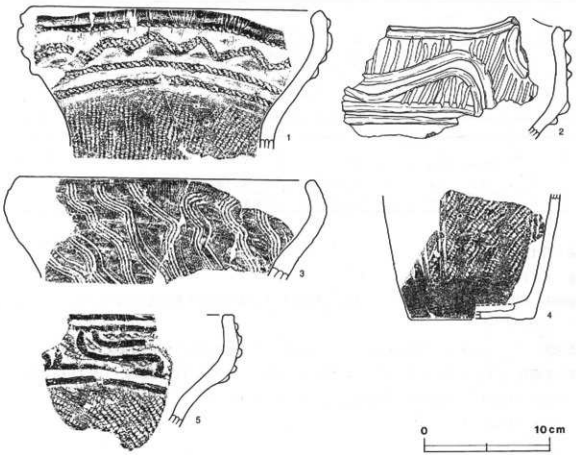
土層解説
1　黒褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量，鹿沼パミス小ブロック少量
2　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
3　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
4　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・鹿沼パミス粒子微量
5　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子中量，鹿沼パミス粒子微量
6　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・鹿沼パミス粒子微量
7　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・鹿沼パミス小ブロック少量

遺物　縄文土器片207点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器5点である。第91図1は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片で，中央部の覆土下層から出土している。3は深鉢の口縁部片で，北部の覆土下層から出土している。4は深鉢の胴部から底部にかけての破片で，北西部の覆土下層から出土している。5は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片で，南西部の覆土下層から出土している。2は深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期後葉(加曽利ＥⅠ式期)と考えられる。



第90図　第4号土坑実測図



第91図　第４号土坑出土遺物実測図

第４号土坑出土遺物観察表（第91図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	A 〔22.8〕 B （11.0）	口縁部から頸部にかけての破片。頸部は屈曲して立ち上がり，口縁部は内彎する。口縁部には隆帯と沈線で区画文を施している。区画内には，小波状の隆帯を施している。隆帯には縄文を施している。頸部にはＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	石英・雲母 黒褐色 普通	P24　5％
2	深　鉢 縄文土器	B （9.6）	口縁部片。口縁部は内彎して立ち上がる。２本の太い隆帯で区画文を作出し，その間を１条の凹線でナデている。区画内には鋭利な沈線を縦位に施している。	長石・雲母・赤色粒子 灰黄褐色 普通	P26　5％
3	深　鉢 縄文土器	A 〔23.4〕 B （7.8）	口縁部片。口縁部は内彎する。クシ状工具による波状沈線文を施している。	長石・石英・雲母・ 赤色粒子 にぶい橙色，普通	P25　5％
4	深　鉢 縄文土器	B （9.8） C 〔9.6〕	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施した後，その一部に平行沈線文を垂下させている。	長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P28　5％ 底部内面摩滅
5	深　鉢 縄文土器	B （8.9）	口縁部片。口縁部は内彎して立ち上がる。口唇部には沈線が巡っている。口縁部には断面三角形の細い隆帯で区画文を施している。区画の内・外にはＲＬの単節縄文を横方向に施している。	石英・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	ＴＰ255　5％

第６号土坑（第92図）

位置　調査１区の北部，Ｂ４a0区。

規模と平面形　開口部は長径2.25m，短径2.15mの円形，底面は長径2.47m，短径2.27mの不整楕円形で，深さは60cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

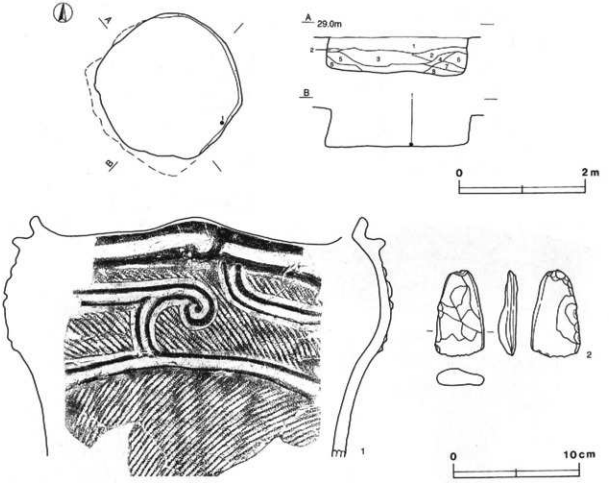
覆土　8層に分層され，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　暗褐色　ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量
2　暗褐色　ローム小ブロック多量，ローム粒子中量，ローム中ブロック・炭化粒子少量
3　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
4　褐　色　ローム粒子多量，ローム大ブロック・ローム小ブロック中量
5　褐　色　ローム中ブロック，ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化物・炭化粒子少量
6　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
7　暗褐色　ローム粒子多量，鹿沼土中量，ローム小ブロック少量
8　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック少量，炭化粒子微量

遺物　縄文土器片81点，磨製石斧１点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器１点，磨製石斧１点である。第92図１は小波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で，南東部の底面から出土している。２は磨製石斧で，覆土から出土している。底面から性格不明の粘土塊を２か所検出した。

所見　時期は，出土土器から中期後葉(加曽利ＥⅠ式期)と考えられる。



第92図　第６号土坑・出土遺物実測図

第６号土坑出土遺物観察表（第92図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	A〔25.8〕 B〔19.0〕	口縁部から頸部にかけての破片。頸部は外傾して立ち上がり，口縁部は内彎して立ち上がる。口縁部は小波状を呈する。波頂部下には２本の隆帯で渦巻文及び区画文を施している。隆帯には縄文を施している。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石 にぶい褐色 普通	P29　10%

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
2	磨製石斧	(6.8)	3.9	(1.4)	(40.8)	緑泥片岩	頭部欠損。刃部平面形は円刃で，片刃。	Q5

第11号土坑（第93～95図）

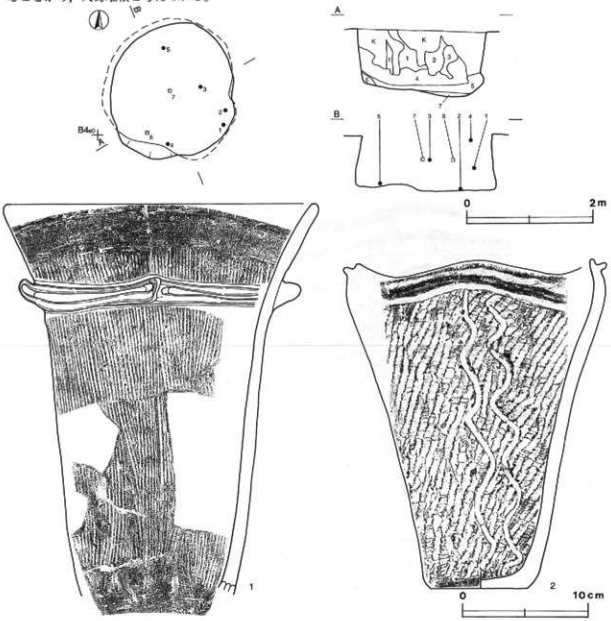
位置　調査１区の北部，Ｂ５d1区。

規模と平面形　開口部は長径2.20m，短径2.10mの不整円形，底面は長径2.30m，短径2.07mの不整楕円形で，深さは86cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

覆土　７層に分層され，上層は一部攪乱を受けている。ロームブロックや鹿沼パミスブロックを多く含んでいることから，人為堆積と考えられる。



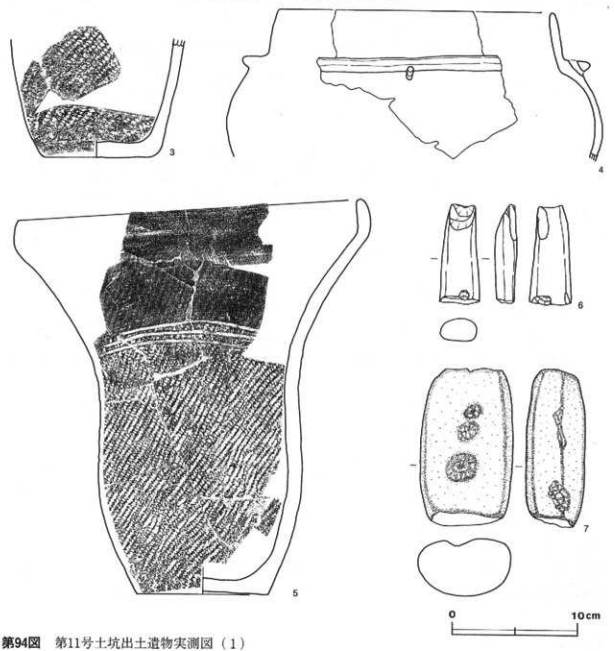
第93図　第11号土坑・出土遺物実測図

土層解説

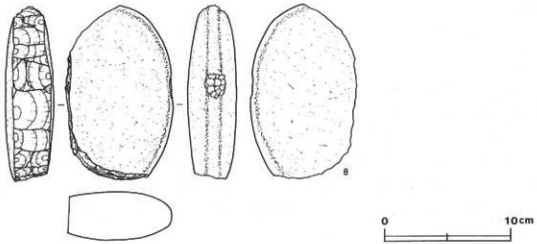
1　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
2　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム中ブロック・小ブロック・鹿沼パミス小ブロック少量
3　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量
4　暗褐色　ローム大ブロック中量，ローム小ブロック・ローム粒子・鹿沼パミス小ブロック少量
5　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
6　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，炭化物・鹿沼パミス小ブロック少量
7　褐　色　ローム粒子中量，炭化物・ローム小ブロック少量

遺物　縄文土器片328点，磨製石斧１点，凹石１点，磨石１点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器４点，磨製石斧１点，磨石２点である。第93図２はほぼ完形の深鉢で，東部の底面から出土している。５はほぼ完形の深鉢で，北部の底面から出土している。１は底部が欠損する深鉢で，南東部の覆土中層から出土している。３は深鉢の底部片，７は磨石(凹石)で，それぞれ中央部の覆土中層から出土している。８は磨石で，南部の覆土中層から出土している。４は有孔鍔付土器片で，南部の覆土上層から出土している。６は磨製石斧で，覆土から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期後葉(加曽利ＥⅠ～Ⅱ式)と考えられる。



第94図　第11号土坑出土遺物実測図（１）



第95図　第11号土坑出土遺物実測図（2）

第11号土坑出土遺物観察表（第93～95図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A［24.3］ B（31.0）	胴部の一部欠損。胴部はやや外傾して立ち上がり，口縁部はやや外傾する。口縁部には4単位の隆帯による楕円形の区画文を施し，それぞれの区画の境に隆帯で突出部を作出している。区画文の上下にには凹線のナデを入れた1本の沈線を巡らしている。口縁部から胴部にかけて，条線文を施している。	石英・雲母 にぶい橙色 普通	P30　40% PL22
2	深鉢 縄文土器	A　18.7 B　25.9 C　7.7	口縁部の一部欠損。4単位の波状口縁を呈する。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部はやや内彎する。口唇部から波頂部にかけて沈線を巡らしている。胴部は縦位の波状沈線を施している。地文はRLRの複節縄文を施している。	長石・石英 胴部上半黒褐色 胴部下半灰褐色 普通	P102　98% PL22 外面スス付着
3	深鉢 縄文土器	B（9.4） C　8.5	口縁部欠損。胴部の一部欠損。胴部はやや外傾して立ち上がる。地文はRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 橙色 普通	P32　10%
4	有孔鍔付土器 縄文土器	A［21.8］ B（11.6）	有孔鍔付土器片。胴部は内彎して鍔部に至り，口縁部は直立する。鍔部には，径5mm程度の小孔が穿たれている。	石英・長石・雲母・ 赤色粒子 にぶい赤褐色 普通	P33　5% PL22
5	深鉢 縄文土器	A　27.0 B　31.3 C　10.4	胴部の一部欠損。キャリパー形の器形である。胴部との境には棒状工具による沈線を施している。口縁部は無文で，胴部にはRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 胴部上半黒褐色 胴部下半にぶい褐色 普通	P31　90% PL22 外面スス付着

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
6	磨製石斧	(7.9)	3.2	1.7	(65.9)	砂岩	刃部欠損。頭部一部欠損。頭部に剥離痕有り。	Q6
7	磨石 (凹石)	12.5	7.2	4.6	661.4	砂岩	自然石を素材に，使用面は2側面。表面3穿孔。側面1穿孔。	Q8
8	磨石	13.8	8.1	4.0	697.1	砂岩	自然石を素材に，使用面は1側面。側面1穿孔。	Q7

第21号土坑（第96図）

位置　調査1区の北部，B4e9区。

確認状況　一部トレンチャーによる攪乱が著しく，確認面による残存状況は不良である。

規模と平面形　攪乱が著しく，規模及び平面形はともに推定で，開口部は長径2.05m，短径2.00mの円形，底面は長径2.10m，短径1.75mの楕円形で，深さは50cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

ピット　1か所。P1は南西壁寄り位置し，径35cmの円形で，深さ22cmである。

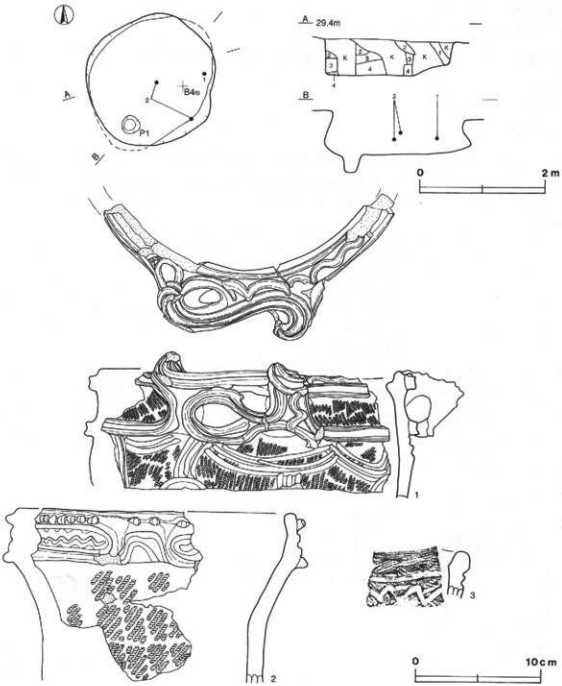
覆土　4層に分層され，ローム・鹿沼パミスブロックを含んでいることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

1　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・鹿沼パミス小ブロック少量
3　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　黒褐色　ローム粒子多量，ローム大ブロック・ローム小ブロック中量，炭化粒子・鹿沼パミス小ブロック微量

遺物　縄文土器片115点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器3点である。第96図1は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，覆土中層から出土している。2は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，覆土中層から出土している。3は深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅳ式期)と考えられる。



第96図　第21号土坑・出土遺物実測図

第21号土坑出土遺物観察表（第96図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A［24.6］ B（11.6）	口縁部片。口縁部はやや外傾して立ち上がる。口唇部に平坦で，蛇行隆帯を施行し，その一部にS字状の隆帯を垂出させている。口縁部は隆帯と沈線でS字状や楕円形の区画状を施した文様を作出している。地文はRLの半截縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P39　10% PL22
2	深鉢 縄文土器	A［22.0］ B（10.3）	口縁部から胴部にかけての破片。胴部はやや外傾して立ち上がる。口縁部は内弯気味に立ち上がる。口縁部には隆帯で楕円形の区画文を施している。区画内には波状沈線文を強位に施している。隆帯には指頭による押圧を施している。地文はRLの半截縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P40　5%
3	深鉢 縄文土器	B（4.5）	口縁部片。波状口縁を呈する。口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部には隆帯を巡らし，隆帯に平行して沈線と波状沈線を巡らしている。地文はRLの半截縄文を縦や横方向に施している。	長石・雲母 黒褐色 普通	TP7　5%

第23号土坑（第97～99図）

位置　調査1区の北西部，A4i7区。

規模と平面形　開口部は長径1.95m，短径1.65mの楕円形，底面は長径1.90m，短径1.70mの楕円形で，深さは82cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

ピット　3か所。P1は北壁寄りに位置し，径33cmの円形で，深さ54cmである。P2は北東壁寄りに位置し，径23cmの円形で，深さ29cmである。P3は南東壁寄りに位置し，径22cmの円形で，深さ62cmである。

覆土　8層に分層され，ロームブロックや鹿沼パミスブロックを含んでいることから，人為堆積と考えられる。

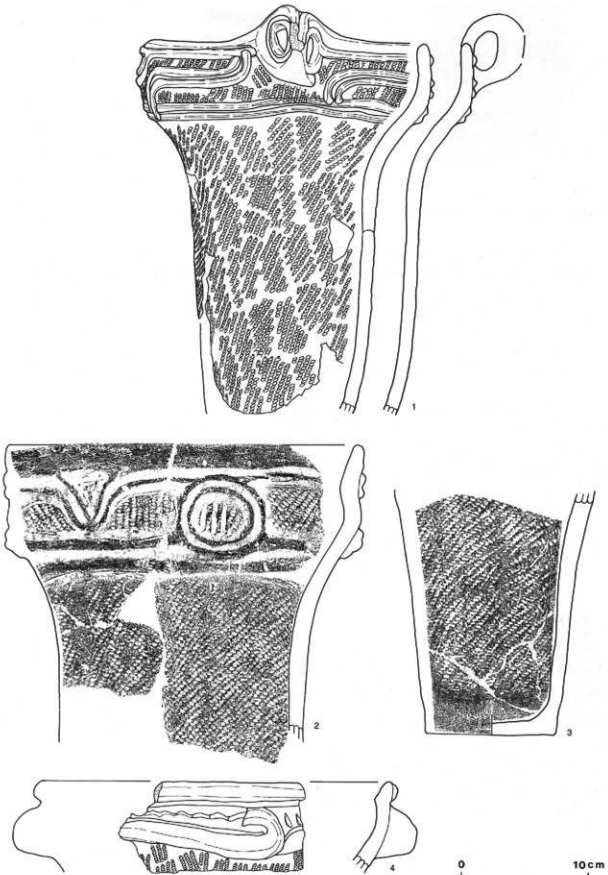
土層解説

1　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，焼土粒子・鹿沼パミス小ブロック微量
2　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，炭化粒子・ローム中ブロック少量，焼土粒子微量
3　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量
4　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子・鹿沼パミス小ブロック微量
5　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，炭化粒子少量，焼土粒子微量
6　褐　色　ローム粒子多量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
7　暗褐色　焼土粒子・ローム粒子中量，ローム小ブロック・鹿沼パミス小ブロック少量
8　暗褐色　ローム中ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子少量

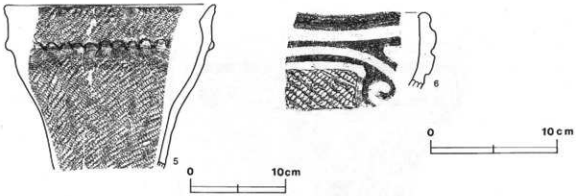
遺物　縄文土器片376点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器6点である。第98図1は胴部から底部が欠損する深鉢で，北東部の覆土下層から横位で出土している。3は深鉢の胴部から底部にかけての破片，5は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，北部の覆土下層からそれぞれ出土している。4は深鉢の口縁部片で，東部の覆土下層から出土している。2は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，東部の覆土中層から横位で出土している。6は深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期後葉(加曽利E Ⅰ式期)と考えられる。

第97図　第23号土坑実測図



第98図　第23号土坑出土遺物実測図（1）



第99図　第23号土坑出土遺物実測図（２）

第23号土坑出土遺物観察表（第98・99図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	A　21.3 B（32.2）	底部欠損。胴部はやや外傾して立ち上がり，口縁部は内彎する。口縁部には１つの浪鏡状把手を呈し，２本１組の隆帯で文様を描出している。地文はＲＬの羊節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P41　80% PL23
2	深　鉢 縄文土器	A［27.7］ B（23.6）	口縁部から胴部にかけての破片。胴部はやや外傾して立ち上がり，口縁部はやや内彎する。口縁部には「V」字状の隆帯を貼付し，隆帯と沈線で円形の区画文を施している。区画の内外にＲＬの羊節縄文を施し，胴部にはＲＬの羊節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P42　20% PL23
3	深　鉢 縄文土器	B（19.4） C　10.3	口縁部から瘤部一部欠損。胴部は外傾して立ち上がる。地文はＲＬの羊節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 橙色 普通	P43　30%
4	深　鉢 縄文土器	A［27.5］ B　（7.2）	口縁部片。口唇部直下には横Ｓ字状の隆帯を施している。波状沈線文を施している。胴部にはＲＬの羊節縄文を施している。	長石・石英・雲母 橙色 普通	P45　5%
5	深　鉢 縄文土器	A［22.0］ B（17.4）	口縁部から胴部にかけての破片。口縁部は内彎して立ち上がる。口唇部直下に隆帯が巡り，隆帯には指頭による押圧を施している。地文はＲＬの羊節縄文を縦方向に施している。	長石・雲母 にぶい橙色 普通	P44　10%
6	深　鉢 縄文土器	B　（6.1）	口縁部片。口縁部は内彎気味に立ち上がる。隆帯と沈線で渦巻文や区画文を施している。区画内にはＬＲの羊節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	TP8　5%

第24号土坑（第100図）

位置　調査１区の西部，Ａ４j2区。

重複関係　本跡が第25号土坑の南側部分を掘り込んでいることから，第25号土坑より新しい。

規模と平面形　開口部は長径2.50m，短径1.37mの不整楕円形，底面は長径2.20m，短径1.80mの楕円形で，深さは100cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

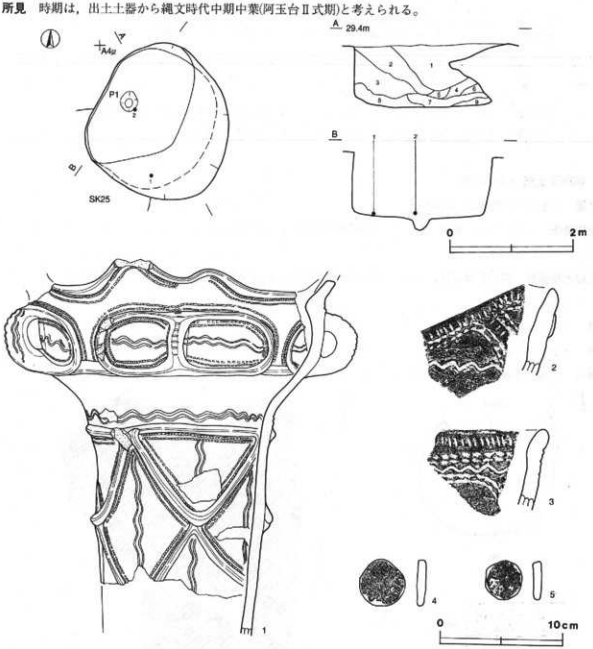
覆土　９層に分層され，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒褐色　炭化粒子中量，ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子少量
3　褐　色　ローム小ブロック・炭化粒子少量，炭化物微量
4　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
5　黒褐色　炭化物・炭化粒子少量，ローム粒子微量
6　黒褐色　炭化物中量，炭化粒子・ローム粒子少量
7　暗褐色　炭化物少量
8　褐　色　炭化物・炭化粒子少量，ローム粒子微量
9　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック微量

遺物　縄文土器片112点，土器片円盤２点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器３点，土器片円盤２点である。第100図１は底部が欠損する深鉢で，南壁際の覆土下層から出土している。２・３は深鉢の口縁部片，４・５は土器片円盤で，それぞれ覆土から出土している。

所見　時期は，出土土器から縄文時代中期中葉(阿玉台Ⅱ式期)と考えられる。



第100図　第24号土坑・出土遺物実測図

第24号土坑出土遺物観察表（第100図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B（30.2）	口縁部の一部欠損。底部欠損。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は内彎して立ち上がり，口唇部で外傾する。４単位の波状口縁を呈し，波頂部は双頭となる。口縁部は隆帯で楕円形に区画し，その中央に肥手部を作出している。区画された隆帯にはキザミを施し，隆帯に沿って，複列の結節沈線文を施している。口縁部と胴部との境には波状沈線文を横位に巡らしている。胴部には隆帯でＸ字状に施し，その隆帯に沿って，複列の結節沈線文を施している。	石英・雲母 にぶい橙色 普通	P46　60% PL23

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
2	深　鉢 縄文土器	B（6.9）	波状口縁を呈する口縁部片。波状部には隆帯を施し，隆帯に沿って結節沈線文を施している。口縁部には波状沈線を巡らしている。	石英・雲母 にぶい橙色 普通	TP9　5%
3	深　鉢 縄文土器	B（6.6）	口縁部片。口縁部はやや外傾して立ち上がる。隆帯が巡る。隆帯にはキザミを施している。隆帯に沿って，結節沈線文と波状沈線文を施している。	長石・雲母 褐色 普通	TP10　5%

図版番号	器　種	計測値				石　質	特　徴	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
4	土器片円盤	3.7	3.8	0.7	8.4	土　製	ほぼ円形で，無文。周縁部は部分的に研磨。	DP1
5	土器片円盤	3.1	3.0	0.7	10.2	土　製	ほぼ円形で，無文。	DP2

第26号土坑（第101図）

位置　調査1区の北東部，A4j5区。

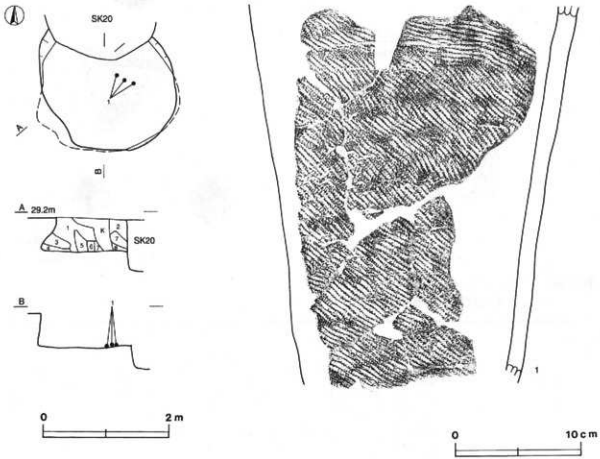
重複関係　第20号土坑と重複している。北側部分を第20号土坑に掘り込まれていることから，第20号土坑より古い。

規模と平面形　開口部は長径2.26m，短径1.98mの楕円形，底面は長径2.26m，短径2.04mの不整楕円形で，深さは55cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

覆土　8層に分層され，ロームブロックや鹿沼パミスブロックを含んでいることから，人為堆積と考えられる。



第101図　第26号土坑・出土遺物実測図

土層解説
1　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・炭化粒子中量，ローム中ブロック少量
3　黒褐色　ローム粒子多量，炭化粒子中量，ローム小ブロック・鹿沼パミス小ブロック少量
4　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック微量
5　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
6　暗褐色　ローム小ブロック・炭化物中量，鹿沼パミス小ブロック少量
7　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，鹿沼パミス小ブロック微量
8　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量

遺物　縄文土器片116点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器１点である。第101図１は深鉢の胴部片で，中央部の覆土下層から出土している。

所見　時期は，遺構の形態や出土土器から中期後葉(加曽利ＥⅠ式期)と考えられる。

第26号土坑出土遺物観察表（第101図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B（29.7）	胴部片。胴部は外傾して立ち上がる。地文はＲＬの単節縄文を横方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P47　20% PL23

第28号土坑（第102・103図）

位置　調査１区の西部，Ｂ３j8区。

規模と平面形　開口部は長径2.04m，短径1.90mの楕円形，底面は長径1.98m，短径1.84mの楕円形で，深さは56cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

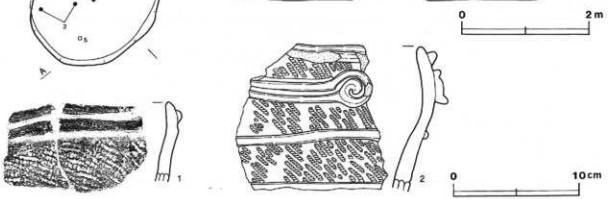
底　ほぼ平坦である。

覆土　４層に分層され，ロームブロックや鹿沼パミスブロックを含んでいることから，人為堆積と考えられる。

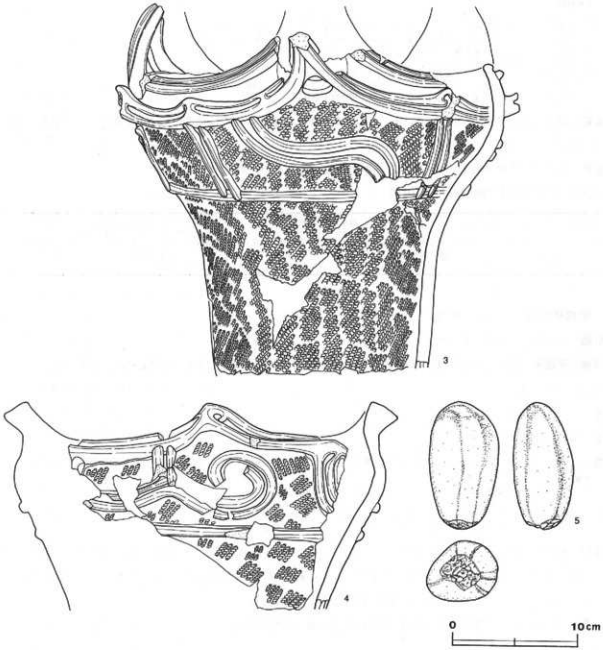
土層解説
1　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・炭化粒子中量，ローム中ブロック少量
3　黒褐色　ローム粒子多量，炭化粒子中量，ローム小ブロック・鹿沼パミス小ブロック少量
4　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック微量

遺物　縄文土器片366点，敲石１点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器４点，敲石１点である。第102・103図２・４は深鉢の口縁部片，３は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，覆土中層からそれぞれ出土している。５は敲石で，覆土中層から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期後葉(加曽利ＥⅠ式期)と考えられる。



第102図　第28号土坑・出土遺物実測図



第103図　第25号土坑出土遺物実測図

第28号土坑出土遺物観察表（第102・103図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B　(6.3)	口縁部片。口縁部は内彎して立ち上がる。口縁部直下には沈線と隆帯を巡らしている。地文はLRの単節縄文を縦や横方向に施している。	長石・石英・雲母 橙色	TP11　5%
2	深　鉢 縄文土器	B〔11.4〕	口縁部片。沈線が巡り，隆帯と沈線で渦巻文や区画文を施している。区画内にはLRの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P50　5%
3	深　鉢 縄文土器	A〔25.5〕 B〔29.8〕	底部欠損。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は内彎する。4単位の波状口縁を呈する。波底部には隆帯で突出部を作出している。口縁部には2本1組の隆帯で文様を描出している。地文はRLの単節縄文を縦方向に施している。	石英・雲母 にぶい橙色 普通	P48　70% PL23

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
4	深　鉢 縄文土器	A 〔27.3〕 B (16.5)	口縁部から胴部にかけての破片。波状口縁を呈する。口縁部は口唇すする。口唇部には沈線が巡り，波頂部に渦巻文を施している。波頂部直下には２本の隆帯で渦巻文や区画文を施している。口縁部には沈線が巡り，渦巻状の隆帯を施している。区画された隆帯の内外には，ＲＬの単節縄文を縦や横方向に施している。	石英・雲母 にぶい橙色 普通	P49　5％ PL43

図版番号	器　種	計測値				石　質	特　徴	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
5	敲　石	10.0	5.6	4.7	357.44	砂　岩	長軸方向の一端に敲打痕。加熱を受けて赤変。	Q10

第30号土坑（第104図）

位置　調査１区の北部，Ｂ５b1区。

規模と平面形　開口部は長径2.40m，短径2.04mの楕円形，底面は長径2.48m，短径2.08mの楕円形で，深さは56cmである。

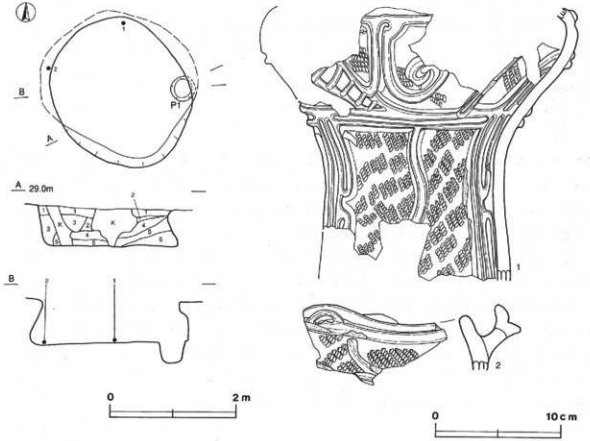
壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

覆土　６層に分層され，上層は攪乱を受けている。ロームブロックや鹿沼パミスブロックを含んでいることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

1　褐　　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量，鹿沼パミス粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・鹿沼パミス小ブロック少量
3　明 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，鹿沼パミス粒子微量
4　明 褐 色　ローム粒子中量，ローム大ブロック少量，ローム小ブロック・鹿沼パミス粒子微量
5　極暗褐色　ローム中ブロック・ローム粒子微量
6　極暗褐色　炭化物微量



第104図　第30号土坑・出土遺物実測図

遺物　縄文土器片333点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器２点である。第104図１は深鉢の胴部片で，北壁際の覆土下層から出土している。２は深鉢の口縁部片で，西壁際の覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期後葉(加曽利Ｅ１式期)と考えられる。

第30号土坑出土遺物観察表（第104図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B（21.5）	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は内彎する。口縁部には隆帯と沈線による渦巻文及び楕円形の区画文を施している。区画された隆帯の内外には，RLの単節縄文を横方向に施している。	長石・石英 褐灰色 普通	P51　40% PL23
2	深鉢 縄文土器	B（5.2）	波状口縁を呈する口縁部片。口唇部には深い沈線を施している。口縁部には渦巻状の隆帯や楕円形状に区画した隆帯を施している。区画された隆帯の内外には，RLの単節縄文を横方向に施している。	石英・雲母 にぶい橙色 普通	P52　5%

第36号土坑（第105～108図）

位置　調査１区の北西部，Ｂ４e6区。

重複関係　第37号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

確認状況　一部トレンチャーによる撹乱が著しく，確認面による残存状況は不良である。

規模と平面形　撹乱が著しく，規模及び平面形はともに推定で，開口部は長径2.20m，短径1.90mの不整楕円形，底面は長径3.06m，短径2.40mの不整楕円形で，深さは77cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

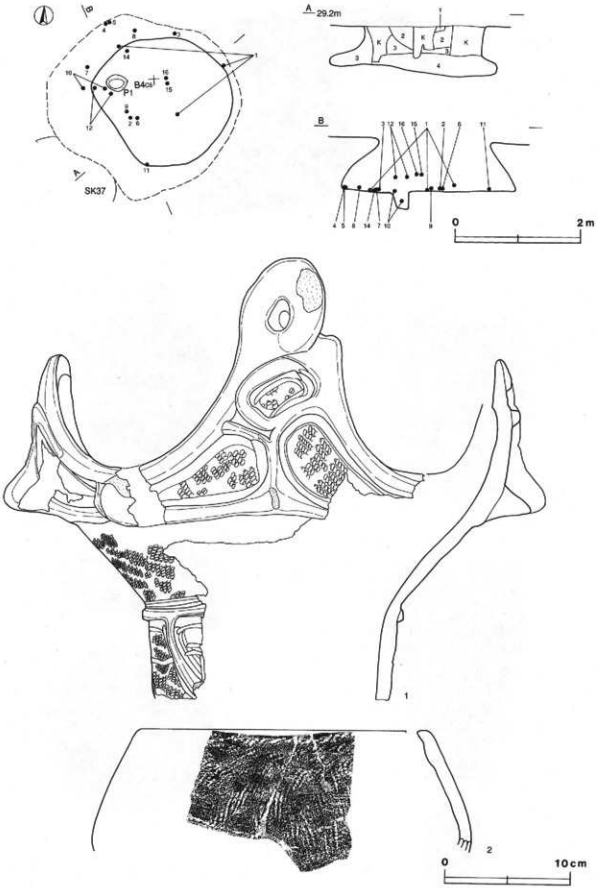
ピット　１か所。Ｐ１は西壁寄りに位置し，長径34cm，短径24cmの楕円形で，深さ26cmである。

覆土　４層に分層され，上層は撹乱を受けている。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
3　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子少量
4　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子微量

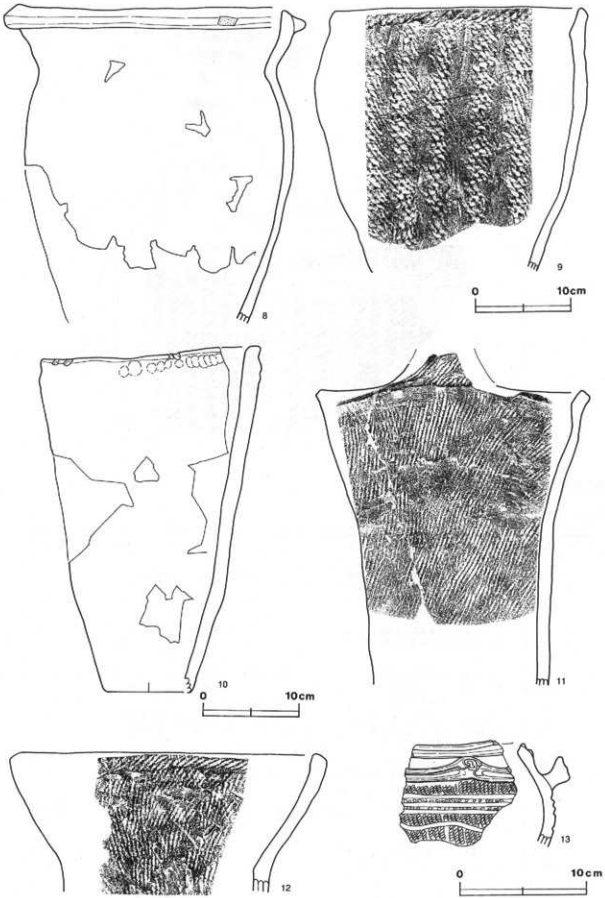
遺物　縄文土器片1193点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器16点である。第106図１は大波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部に欠けての破片で，覆土下層から出土している。２・９は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片，６は口縁部から頸部が欠損する深鉢で，中央部の覆土下層から出土している。３は甕の口縁部から胴部にかけての破片で，北東部の覆土下層から出土している。４は口縁部の一部と胴部から底部が欠損する深鉢，５は口縁部から頸部が欠損する深鉢，８は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片，14は口縁部が一部欠損する鉢で，それぞれ北部の覆土下層から出土している。７は深鉢の底部片，10は口縁部が一部欠損する深鉢で，西部の覆土下層から出土している。11は底部が欠損する小波状口縁を呈する深鉢で，南壁際の覆土下層から横位で出土している。12は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片，13は深鉢の口縁部片，15・16は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，それぞれ中央部の覆土中層から出土しているが，流れ込んだものと考えられる。

所見　時期は，出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期)と考えられる。

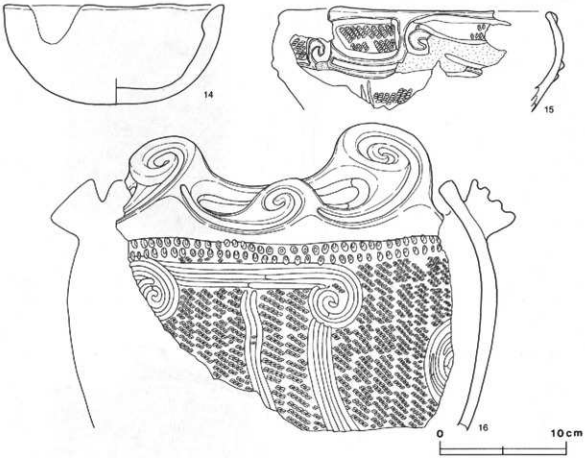


第105図　第36号土坑・出土遺物実測図

第106図　第36号土坑出土遺物実測図（1）



第107図　第36号土坑出土遺物実測図（2）



第108図　第36号土坑出土遺物実測図（3）

第36号土坑出土遺物観察表（第105～108図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A［35.0］ B（34.7）	口縁部から胴部にかけての破片。4単位の波状口縁を呈する。その内の1単位には円錐状の把手を呈する。波状部には隆帯と沈線で楕円形の区画文を施し、文様を描出している。胴部には隆帯と沈線で区画文を施している。地文はRLの半節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 明褐色 普通	P53　20% PL23
2	深鉢 縄文土器	A［22.8］ B（9.6）	口縁部片。口縁部は内弯して立ち上がる。地文はLRの半節縄文を斜方向に施している。	長石・石英 にぶい赤橙色 普通	P59　5%
3	壺 縄文土器	A［39.0］ B（20.0）	口縁部から胴部にかけての破片。胴部はやや内弯して立ち上がり，口縁部は「く」の字状に外短する。地文はLRの半節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P58　10%
4	深鉢 縄文土器	A［16.6］ B（16.5）	底部欠損。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。口唇部直下には隆帯が巡り，隆帯上に指頭による押圧を施している。胴部にはRLの半節縄文を縦方向に施している。	石英・雲母 にぶい橙色 普通	P61　50% PL23
5	深鉢 縄文土器	B（15.1） C　7.9	口縁部の一部欠損。胴部はやや外傾して立ち上がり，口縁部は内弯気味に立ち上がる。胴部には縦位の波状沈線と結節沈線文を施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P63　40% PL23
6	深鉢 縄文土器	B（19.8） C　6.5	口縁部欠損。胴部の一部欠損。底部から胴部にかけて外傾して立ち上がる。地文はLの無節縄文を縦や横方向に施している。	長石 にぶい橙色 普通	P64　30% 底部網代痕有り
7	深鉢 縄文土器	B　（7.6） C　13.5	口縁部から頸部欠損。底部から胴部にかけて外傾して立ち上がる。胴部には条線文を縦位に施している。	長石・雲母 にぶい橙色 普通	P65　10% 底部網代痕有り
8	深鉢 縄文土器	A　27.9 B（33.8）	底部欠損。胴部は内弯して立ち上がり，口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部直下には隆帯を巡らしている。胴部は無文。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P55　50%

図版番号	器種	法量値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
9	深鉢 縄文土器	A 26.1 B (27.9)	底部欠損。胴部は内弯して立ち上がり，口縁部に至る。口縁部には隆帯が巡り，丸味をもって立ち上がる。地文はLRの単節縄文を縦方向に施している。	長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P54 60% PL23
10	深鉢 縄文土器	A [22.4] B 36.4 C [9.3]	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。口唇部には擬似工具による刻文を施している。口唇部直下には指頭による押圧を施している。	長石・雲母 にぶい橙色 普通	P56 50%
11	深鉢 縄文土器	A 20.7 B (25.2)	底部欠損。2単位の波状口縁を呈している。波頂部は欠損するが平方は鋭角と思われる。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部はやや外傾して立ち上がる。口縁部の内側に段を持つ。地文はLRの単節縄文を縦や斜方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P57 60% PL23
12	深鉢 縄文土器	A [23.6] B (10.9)	口縁部から胴部にかけての破片。頸部は湾曲的に立ち上がり，口縁部は内弯する。口縁部の内側に段を持つ。地文はLRの無節縄文を斜方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P60 5%
13	深鉢 縄文土器	B (8.3)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は内弯して立ち上がる。口唇部には沈線が巡る。口縁部には隆帯で渦巻文を施し，隆帯は円環でナデている。その隆帯に平行して沈線や波状沈線を巡らしている。地文はRLの単節縄文を横方向に施している。	長石・石英 にぶい褐色 普通	P62 5%
14	鉢 縄文土器	A 17.3 B 7.8	口縁部の一部欠損。底部丸底。底部はやや内弯して立ち上がり，口縁部に至る。口縁部の内側に段を持つ。胴部は無文。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P66 60% PL23
15	深鉢 縄文土器	A [21.2] B (7.9)	口縁部片。口縁部は内弯して立ち上がる。隆帯と沈線で区画文を施している。隆帯で渦巻文を配し，そこから楕円形の区画文に連結している。地文はRLの単節縄文を横方向に施している。	長石・雲母・白色粒子 にぶい赤褐色，普通	P68 5%
16	深鉢 縄文土器	A [26.4] B [24.2]	口縁部から胴部にかけての破片。口縁は波状を呈する。口縁部には隆帯で渦巻文を配し，横位の隆帯に連結している。口唇部直下には刻文を2段施している。胴部には波状の沈線と波状沈線を縦位に施している。地文はLRLの縄節縄文を施している。	長石・石英 にぶい橙色 普通	P67 15% PL43

第37号土坑（第109図）

位置　調査1区の北西部，B4c6区。

重複関係　本跡は第36号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

確認状況　一部トレンチャーによる撹乱が著しく，確認面による残存状況は不良である。

規模と平面形　撹乱が著しく，炭模及び平面形はともに推定で，開口部は長径2.12m，短径1.80mの楕円形，底面は長径2.10m，短径1.77mの楕円形で，深さは32cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

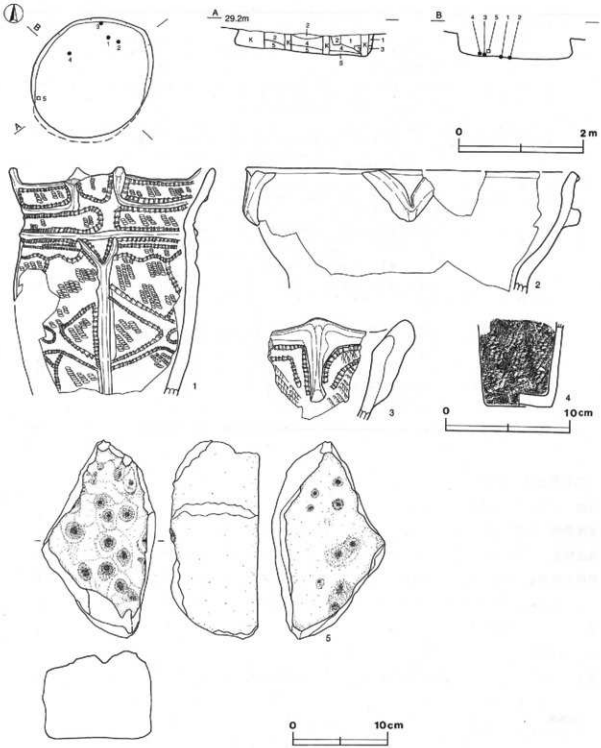
覆土　5層に分層され，上層は撹乱を受けている。不規則な堆積状況やローム ブロックを多く含んでいることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

1　暗褐色　ローム小ブロック中量，ローム粒子・極上粒子・炭化粒子少量
2　黒褐色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロック少量
3　褐　色　ローム大ブロック多量
4　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
5　暗褐色　ローム中ブロック・ローム粒子中量，炭化物少量

遺物　縄文土器片159点，凹石1点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器4点，凹石1点である。第109図1は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片，2は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片，4は深鉢の胴部から底部にかけての破片で，それぞれ北部の覆土下層から出土している。3は深鉢の口縁部片で，北壁際の覆土下層から出土している。5は凹石で，西壁際の覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅲ式期)と考えられる。



第109図　第37号土坑・出土遺物実測図

第37号土坑出土遺物観察表（第109図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A 16.1 B (18.0)	口縁部から胴部にかけての破片。口縁部は4単位の小波状口縁を呈する。口唇部直下には細い隆帯で，楕円形の区画文を配し，隆帯に沿って結節沈線文を施している。胴部には「V」字状の隆帯を貼付し，結節沈線文で波状や円形に文様を描出している。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P69　60% PL24
2	深鉢 縄文土器	A [26.0] B (9.7)	口縁部から頸部にかけての破片。頸部は外傾して立ち上がる。口縁部はわずかに肥厚し，内側に棱を持つ。口唇部直下には「V」字状の隆帯を貼付している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P70　5%

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
3	深　鉢 縄文上器	B（8.0）	波状口縁を呈する口縁部片。波頂部から隆帯を垂下させ、隆帯で区画文を施している。隆帯に沿って半截竹管の内側を押引きした結節沈線文を施している。地文はRの無節縄文を施している。	石英・雲母 暗褐色 普通	P71　5%
4	深　鉢 縄文上器	B（6.8） C　5.2	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。地文はRの無節縄文を横方向に施している。	長石・雲母 にぶい褐色 普通	P72　10%

図版番号	器　種	計測値				石　質	特　徴	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
5	凹　石	21.3	12.0	9.5	2946.6	花　崗　岩	表面１９穿孔，裏面９穿孔。	Q11 PL.47

第38号土坑（第110図）

位置　調査１区の北西部，B４b6区。

重複関係　第39号土坑と重複している。本跡が第39号土坑の南側部分を掘り込んでいることから，第39号土坑より新しい。

規模と平面形　開口部は長径1.68m，短径1.20mの不整楕円形，底面は長径1.65m，短径1.36mの不整楕円形で，深さは62cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

ピット　１か所。Ｐ１は北壁寄りに位置し，長径31cm，短径21cmの楕円形で，深さは55cmである。

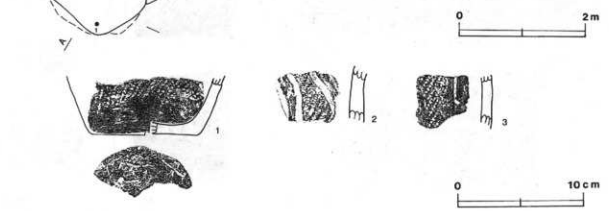
覆土　４層に分層され，不規則な堆積状況から，人為堆積と考えられる。

土層解説

1　暗褐色　ローム中ブロック多量，ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
3　暗褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
4　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量

遺物　縄文土器片128点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器３点である。第110図１は深鉢の胴部から底部にかけての破片で，南部の覆土中層から出土している。２・３は深鉢の胴部片で，覆土から出土している。礫石が南壁際の覆土下層から長径75cm，短径45cmの楕円形の範囲内で集中して出土している。

所見　時期は，出土土器から中期後葉(加曽利ＥⅡ式期)と考えられる。



第110図　第38号土坑・出土遺物実測図

第38号土坑出土遺物観察表（第110図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B（4.7） C［8.4］	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P73　10% 底部網代痕有り
2	深　鉢 縄文土器	B（4.3）	胴部片。胴部には，ＬＲの横位回転による単節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。	長石・石英・雲母 褐色 普通	TP15　5%
3	深　鉢 縄文土器	B（4.3）	胴部片。胴部には磨消手法による幅の狭い懸垂文を施している。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	石英・雲母 にぶい褐色 普通	TP16　5%

第39号土坑（第111図）

位置　調査１区の北西部，Ｂ４b6区。

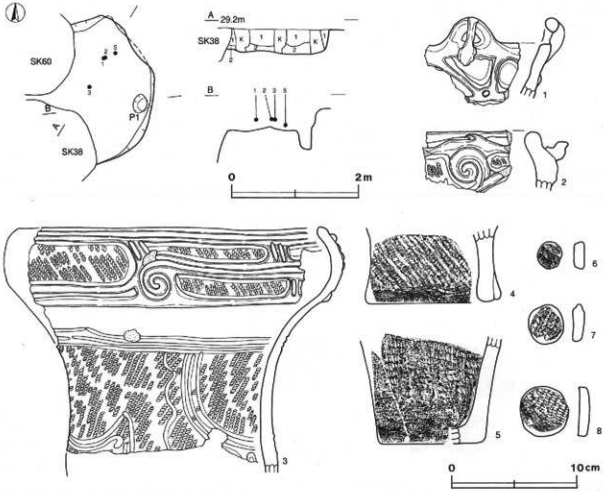
重複関係　第38・60号土坑と重複している。本跡は南側部分を第38号土坑に掘り込まれていることから，第38号土坑より古い。第60号土坑との新旧関係は不明である。

規模と平面形　開口部は長径2.30m，短径1.88mの不整楕円形，底面は長径2.22m，短径1.85mの楕円形で，深さは38cmである。

壁　外傾して立ち上がる。

底　ほぼ平坦である。

覆土　２層に分層され，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。



第111図　第39号土坑・出土遺物実測図

土層解説
1　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック少量
2　黒褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子微量

遺物　縄文土器片166点，土器片円盤３点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器５点，土器片円盤３点である。第111図３は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，中央部の覆土中層から出土している。５は深鉢の胴部から底部にかけての破片で，北部の覆土下層から出土している。１・２は深鉢の口縁部片で，それぞれ中央部の覆土中層から出土している。４は台付鉢の脚部片，６～８は土器片円盤で，それぞれ覆土から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期後葉(加曽利Ｅ１式期)と考えられる。

第39号土坑出土遺物観察表（第111図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B（7.0）	把手部を呈する口縁部片。口縁部は内弯して立ち上がる。把手部には眼鏡状把手を呈している。把手部下方には隆帯で区画文を施し，部に刺突を施している。	雲母 黒褐色 普通	P75　5%
2	深鉢 縄文土器	B（4.7）	口縁部片。口縁部は内弯して立ち上がる。口唇部面下には深い沈線を巡らし，隆帯で渦巻文を突出させている。突出部から下位に隆帯及び沈線で渦巻文を施している。地文はＬＲの単節縄文を横方向に施している。	長石・雲母 にぶい褐色 普通	P76　5%
3	深鉢 縄文土器	A（23.8） B（20.0）	口縁部一部欠損。胴部から底部にかけて欠損する深鉢。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は内弯する。口縁部には沈線で渦巻文や楕円形の区画文を施している。口縁部と胴部との境には３条の沈線を巡らしている。胴部には波状沈線や２条の沈線で区画状に施している。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石・雲母 にぶい褐色 普通	P74　30% PL24
4	台付鉢 縄文土器	B（6.0） C　9.6	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開ん張る。脚部にはＬＲの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P78　5%
5	深鉢 縄文土器	B（8.3） C（7.8）	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。地文はＲＬの単節縄文を横方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P79　10%

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
6	土器片円盤	2.2	2.0	0.8	4.2	土製	ほぼ円形で，無文。周縁部は部分的に研磨。	ＤＰ３
7	土器片円盤	3.1	2.8	1.0	9.4	土製	ほぼ円形で，無文。	ＤＰ４
8	土器片円盤	3.9	3.8	0.9	16.0	土製	ＲＬの単節縄文を施している。	ＤＰ５　PL44

第41号土坑（第112・113図）

位置　調査１区の北西部，Ｂ４c7区。

重複関係　第279号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

確認状況　一部トレンチャーによる攪乱が著しく，確認面による残存状況は不良である。

規模と平面形　開口部は長径2.00m，短径1.96mの円形，底面は長径2.10m，短径2.05mの不整楕円形で，深さは50cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

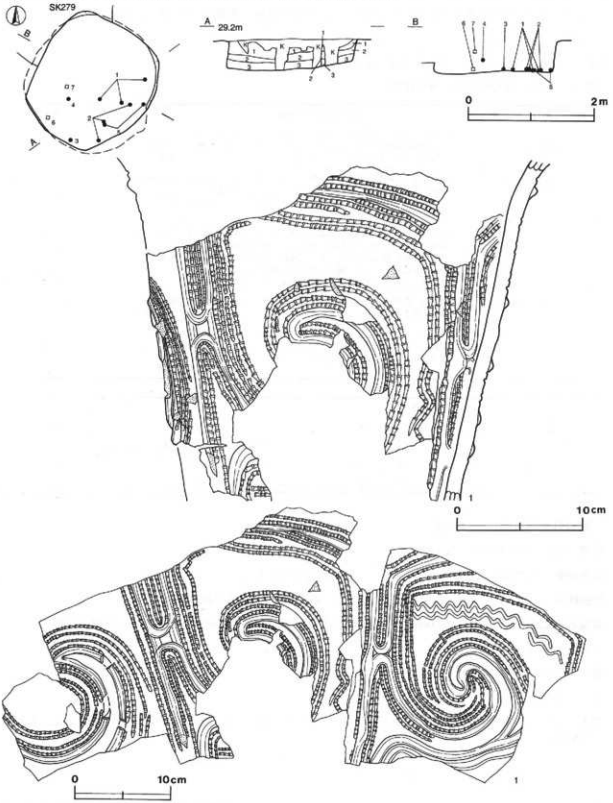
底　ほぼ平坦である。

覆土　３層に分層され上層は攪乱を受けている。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

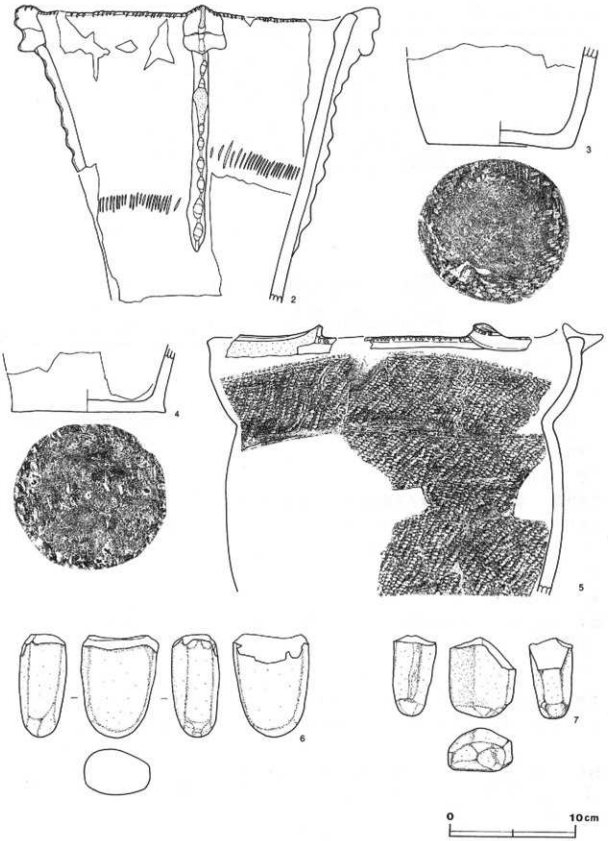
土層解説
1　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量，ローム中ブロック・炭化物微量
3　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，ローム小ブロック・炭化物微量

遺物　縄文土器片264点，磨石２点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器５点，磨石２点である。第112図１は深鉢の胴部片で，覆土下層から出土している。２・５は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片，３は深鉢の底部片，６は磨石で，それぞれ覆土下層から出土している。４は深鉢の底部片，７は磨石で，それぞれ覆土中層から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅱ～Ⅲ式期)と考えられる。



第112図　第41号土坑・出土遺物実測図



第113図　第41号土坑出土遺物実測図

第41号土坑出土遺物観察表（第112・113図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B（27.0）	胴部片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部には隆帯と沈線で3単位の渦巻文を施している。一部渦巻文の上部に波状沈線を横位に施している。渦巻文の周りには縦列の楕円沈線文を施している。また，隆帯で楕円形の区画文を縦位に施し，区画内・外に縦列の楕円沈線文を施している。	長石・雲母 褐色 普通	P80　40% PL24
2	深鉢 縄文土器	A［23.7］ B（23.5）	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。口縁部にはきざみを施している。口縁部には隆帯で山形状の突出部を作出し，そこから垂下する隆帯には撚糸による押圧を施している。胴部には横位にキザミ目列を巡らしている。	石英・雲母・白色粒子 橙色 普通	P81　30% PL24
3	深鉢 縄文土器	B（8.1） C　11.4	胴部から底部にかけて破片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部は無文。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P84　10% 底部網代痕有り
4	深鉢 縄文土器	B（5.3） C　12.1	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部は無文。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P85　10% 底部網代痕有り
5	深鉢 縄文土器	A［26.8］ B（21.3）	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は内弯して立ち上がり，口縁部は内弯する。口縁部には山形状の突起が付き，隆帯が巡る。隆帯にはキザミを施し，隆帯に平行して，縦列の楕円沈線文を施している。波状の平行沈線文を縦位に施している。地文はRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P82　20%

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	特徴	備考
6	磨石	8.1	6.1	3.7	288.8	砂岩	自然石を素材にして，使用面は一側面。	Q12
7	磨石	(6.3)	5.3	3.4	(146.3)	砂岩	自然石を素材にして，使用面は長軸の一端。	Q13

第42号土坑（第114・115図）

位置　調査1区の北西部，B5c2区。

確認状況　一部トレンチャーによる撹乱が著しく，確認面による残存状況は不良である。

規模と平面形　撹乱が著しく，規模及び平面形はともに推定で，開口部は長径1.90m，短径1.77mの楕円形，底面は長径1.75m，短径1.65mの不整楕円形で，深さは77cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

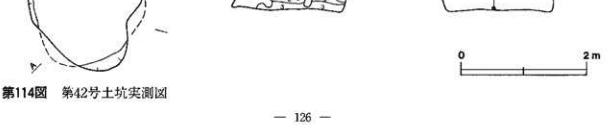
底　ほぼ平坦である。

覆土　3層に分層され，上層は撹乱を受けている。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

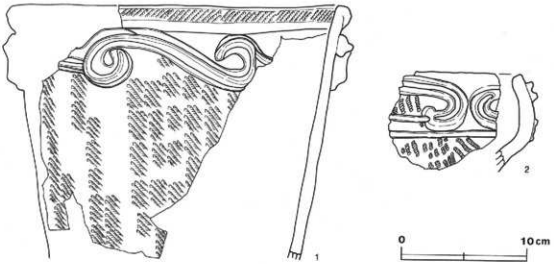
土層解説
1　黒褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子中量，焼土粒子少量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量・炭化粒子微量
3　褐　色　ローム大ブロック・ローム中ブロック中量，ローム小ブロック少量

遺物　縄文土器片132点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器2点である。第115図1は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，北壁際の底面から出土している。2は深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期後葉(加曽利EⅠ式期)と考えられる。



第114図　第42号土坑実測図



第115図　第42号土坑出土遺物実測図

第42号土坑出土遺物観察表（第115図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	A［25.8］ B（20.1）	口縁部から胴部にかけての破片。口縁部には隆帯が巡る。隆帯には無節縄文を施している。口唇部直下には横S字状の隆帯を施している。地文はLの無節縄文を施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P86　30% PL24
2	深　鉢 縄文土器	B（7.8）	口縁部片。口縁部には1本の隆帯に凹線の沈線を施し，区画文を施している。区画の内外には，RLの単節縄文を横方向に施している。	石英・パミス 黒褐色 普通	P87　5%

第46号土坑（第116・117図）

位置　調査1区の北西部，B4c5区。

重複関係　第22号土坑と重複している。本跡は西側部分を第22号土坑に掘り込まれていることから，第22号土坑より古い。

規模と平面形　開口部は長径1.88m，短径1.10mの楕円形，底面は長径1.90m，短径1.70mの不整楕円形で，深さは63cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

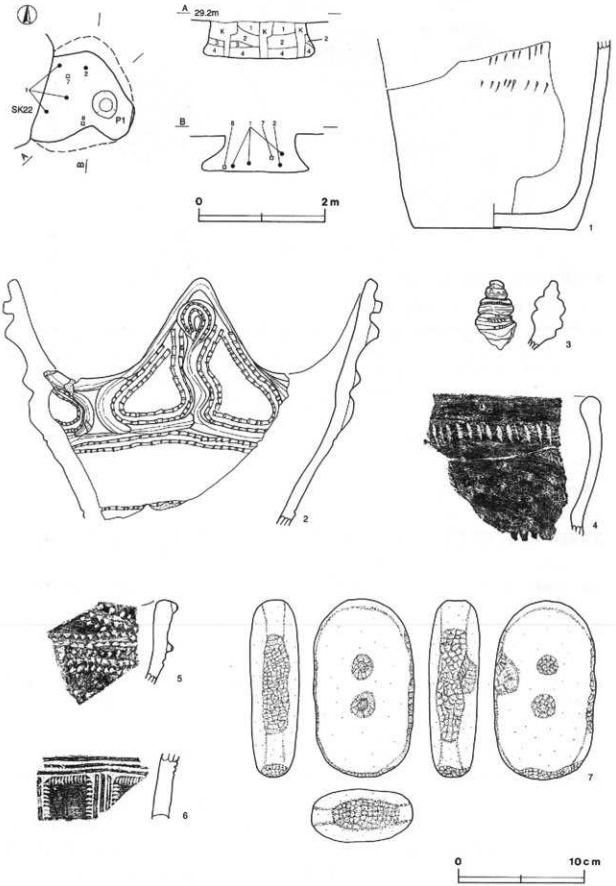
覆土　4層に分層され，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

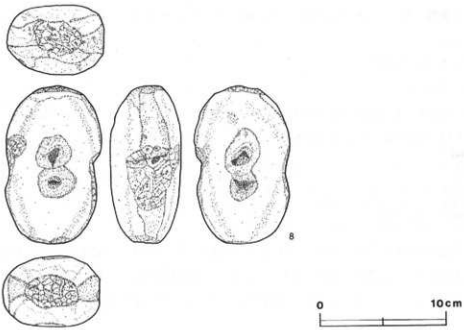
1　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量
2　暗褐色　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量，炭化物微量
3　暗褐色　ローム大ブロック・ローム中ブロック中量，炭化粒子少量
4　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物　縄文土器片262点，敲石1点，凹石1点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器6点，敲石1点，凹石1点である。第116図1は口縁部から頸部が欠損する深鉢で，中央部の覆土下層から中層にかけて出土している。2は波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，北部の覆土下層から出土している。7は敲石，8は凹石で覆土下層から出土している。3は深鉢の把手部片，4は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片，5は深鉢の口縁部片，6は深鉢の胴部片で，それぞれ覆土から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅱ式期)と考えられる。



第116図　第46号土坑・出土遺物実測図



第117図　第46号土坑出土遺物実測図

第46号土坑出土遺物観察表（第116・117図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B（14.0） C　12.7	胴部から底部にかけての破片。胴部は外短して立ち上がる。胴部には爪形文を2段に施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P89　10%
2	深　鉢 縄文土器	A［28.0］ B（19.3）	口縁部から頸部にかけての破片。口縁部は内彎して立ち上がる。大波状を呈する口縁部で，波状部には隆帯で渦巻文を施している。渦巻きには結節沈線文を施している。口縁部直下には隆帯によって区画文を施し，隆帯に沿って，2列の結節沈線文を施している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P88　5%
3	深　鉢 縄文土器	B（5.4）	把手部片。隆帯及び結節沈線文で螺旋状に渦巻いたものを作出している。	雲母 黒褐色 普通	P90　5%
4	深　鉢 縄文土器	B（11.0）	口縁部片。口縁部は内彎して立ち上がる。口唇部直下にはキザミ目列を高らしている。	長石・石英・雲母 明褐色 普通	TP17　5%
5	深　鉢 縄文土器	B（6.5）	口縁部片。口縁部は内彎気味に立ち上がる。口唇部は平坦で，口縁部直下には隆帯に沿って複列の結節沈線文を施している。隆帯にはキザミを施している。	長石・雲母 褐色 普通	TP18　5%
6	深　鉢 縄文土器	B（5.0）	胴部片。胴部はやや外張して立ち上がる。縦や横方向に隆帯と沈線を施し，区画状の文様を描出している。それらに沿って爪形文を施している。	長石・雲母 にぶい橙色 普通	TP19　5%

図版番号	器　種	計測値				石　質	特　徴	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
7	敲石(磨石)	14.1	7.5	4.2	732.7	安　山　岩	長軸の一端を敲打。表面・裏面2穿孔。	Q14　PL47
8	凹　石	12.4	7.6	5.6	743.5	砂　　岩	表面2穿孔，裏面2穿孔，側面1穿孔。	Q15　PL47

第51号土坑（第118図）

位置　調査1区の北西部，B4c4区。

重複関係　第47・78号土坑と重複している。本跡が第78号土坑の北西側を掘り込んでいることから，第78号土坑より新しい。第47号土坑との新旧関係は不明である。

規模と平面形　開口部は長径2.24m，短径1.88mの楕円形，底面は長径2.44m，短径2.34mの円形で，深さは77cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

ピット　1か所。P 1は西壁際に位置し，径65cmの円形と推定され，深さ42cmである。

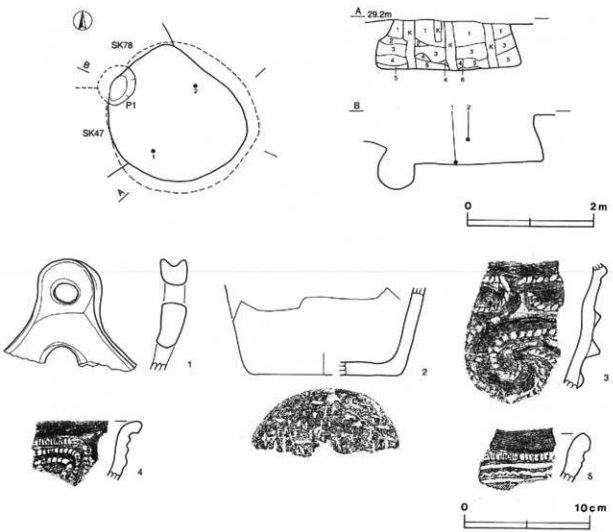
覆土　6層に分層され，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　暗褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，ローム粒子・焼土粒子微量
2　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック・炭化物少量，焼土粒子微量
3　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
4　黒褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
5　黒褐色　炭化粒子少量，ローム小ブロック・ローム粒子微量
6　暗褐色　焼土粒子中量，ローム粒子少量

遺物　縄文土器片195点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器5点である。第118図1は深鉢の把手部片で，南部覆土下層から出土している。2は深鉢の胴部から底部にかけての破片で，北部の覆土中層から出土している。3・4は深鉢の口縁部片，5は小波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で，それぞれ覆土から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅱ～Ⅲ式期)と考えられる。



第118図　第51号土坑・出土遺物実測図

第51号土坑出土遺物観察表（第118図）

図版番号	器種	器高(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B (8.8)	把手部片。波状口縁の波頂部には隆帯で円環状の突起を作出している。	長石 にぶい赤褐色 普通	P91 5%
2	深鉢 縄文土器	B (6.9) C [12.0]	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。	長石・雲母・黒色粒子 にぶい赤褐色 普通	P92 15% 底部網代痕有り
3	深鉢 縄文土器	B (9.9)	口縁部片。口唇部欠損。口縁部は内彎気味に立ち上がる。隆帯で渦巻文を施している。隆帯に沿って結節沈線文を施している。	長石・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	TP22 5%
4	深鉢 縄文土器	B (4.6)	口縁部片。口縁部はやや外傾して立ち上がる。隆帯で区画文を施し，区画内には疑列の結節沈線文を施している。	長石・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	TP21 5%
5	深鉢 縄文土器	B (3.3)	口縁部片。口縁部はやや外傾して立ち上がる。口唇部直下には結節沈線文を巡らし，その下に平行沈線文と小波状沈線を巡らしている。	長石・雲母 にぶい橙色 普通	TP20 5%

第52号土坑（第119・120図）

位置　調査1区の北西部，B 4 c3区。

重複関係　第75号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　開口部は長径2.60m，短径1.80mの楕円形，底面は長径2.30m，短径1.93mの楕円形で，深さは75cmであると推定される。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

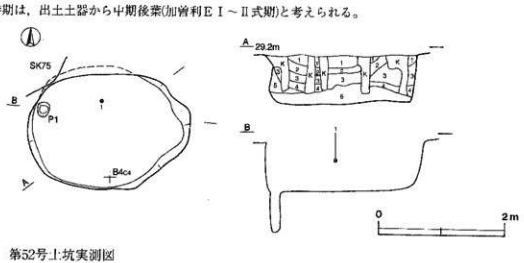
ピット　1か所。P 1は西壁際に位置し，長径24cm，短径19cmの楕円形で，深さ62cmである。

覆土　6層に分層され，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物少量
2　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子少量，ローム大ブロック微量
3　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック微量
4　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック微量
5　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，炭化粒子少量
6　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量

遺物　縄文土器片36点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器5点である。第120図1は深鉢の胴部から底部にかけての破片で，北部の覆土中層から出土している。2～4は深鉢の口縁部片，5は深鉢の胴部片で，それぞれ覆土から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期後葉(加曽利E Ⅰ～Ⅱ式期)と考えられる。



第119図　第52号土坑実測図

第120図　第52号土坑出土遺物実測図

第52号土坑出土遺物観察表（第120図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B（4.4） C　7.0	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部には撚糸文を施している。	長石・石英・雲母 橙色 普通	P93　10%
2	深　鉢 縄文土器	B〔4.3〕	口縁部片。口縁部は内彎して立ち上がる。口唇部直下には沈線が巡る。口縁部には隆帯と沈線で区画文を施し，区画内にはＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	ＴＰ23　5%
3	深　鉢 縄文土器	B〔5.5〕	口縁部片。口縁部は内彎気味に立ち上がる。クシ状工具による条線を施している。	長石・石英 にぶい黄橙色 普通	ＴＰ24　5%
4	深　鉢 縄文土器	B〔3.8〕	口縁部片。口縁部は内彎気味に立ち上がる。口唇部直下には沈線で区画文を施している。区画内にはＲＬの単節縄文を横方向に施している。	長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	ＴＰ25　5%
5	深　鉢 縄文土器	B〔6.7〕	胴部片。胴部は内彎気味に立ち上がる。３条の沈線を縦方向に垂下させている。地文はＬＲＬの複節縄文を施している。	長石・石英 橙色 普通	ＴＰ26　5%

第61号土坑（第121図）

位置　調査１区の北西部，Ｂ４d8区。

重複関係　第99号土坑と重複している。本跡が第99号土坑の東側部分を掘り込んでいることから，第99号土坑より新しい。

規模と平面形　開口部は長径2.45m，短径1.95mの楕円形，底面は長径3.04m，短径2.44mの楕円形で，深さは103cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

ピット　１か所。Ｐ１は東壁寄りに位置し，長径30cm，短径21cmの楕円形で，深さ40cmである。

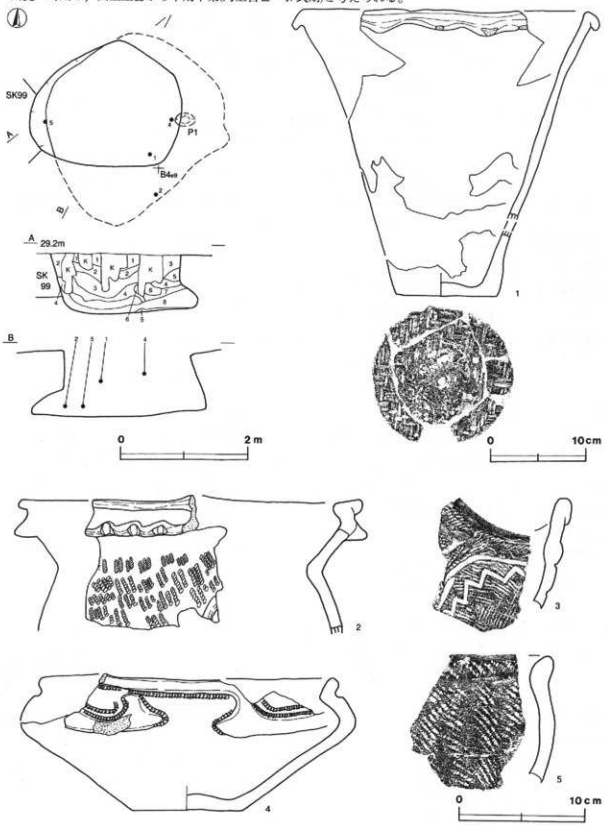
覆土　９層に分層され，ロームブロックを多く含んでいることから，人為堆積と考えられる。

土層解説
1　暗褐色　ローム小ブロック中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量
3　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
4　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子中量，ローム小ブロック少量
5　暗褐色　ローム大ブロック中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量
6　褐　色　ローム大ブロック・ローム粒子多量
7　暗褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量，焼土中ブロック・炭化物少量
8　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子少量
9　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物　縄文土器片365点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器５点である。第121図２は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片で，南壁際の覆土下層から出土している。５は深鉢の口縁部片で，西壁際

の覆土下層から出土している。1は口縁部から胴部の一部が欠損する深鉢で，南部の覆土中層から出土している。4は口縁部が一部欠損する浅鉢で，東部の覆土中層から出土している。3は深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期)と考えられる。



第121図　第61号土坑・出土遺物実測図

第61号土坑出土遺物観察表（第121図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A〔30.5〕 B〔30.2〕 C 10.7	口縁部,胴部の一部欠損。胴部は外傾して立ち上がり,口縁部に至る。口縁部は折り返している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P94 60% 底部網代痕有り
2	深鉢 縄文土器	A〔27.0〕 B〔10.2〕	口縁部から胴部にかけての破片。口縁部は内傾する。口縁部直下には指頭による押圧を加えた隆帯が巡る。胴部にはRLの単節縄文を横方向に施している。	長石・雲母 灰褐色 普通	P95 5%
3	深鉢 縄文土器	B〔8.7〕	波状を呈する口縁部片。波状部には隆帯と沈線で区画文を施している。区画内に楕円状に沈線による沈線と波状沈線を施している。地文に縄文を施している。	長石・石英・赤色粒子・針状鉱物 黒褐色 普通	TP28 5%
4	浅鉢 縄文土器	A〔22.8〕 B 10.5 C 8.8	口縁部,胴部の一部欠損。胴部は外傾して立ち上がり,口縁部は内傾して立ち上がる。口唇部は外傾する。口唇部直下には隆帯で区画文を施し,隆帯に添って,複列の結節沈線文を施している。	長石・石英 にぶい橙色 普通	P96 60% PL24
5	深鉢 縄文土器	B〔9.7〕	口縁部片。口縁部は内傾気味に立ち上がる。隆帯が巡る。地文はLRの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 赤褐色 普通	TP27 5%

第63号土坑（第122図）

位置　調査1区の北西部，B4e7区。

重複関係　第114・125号土坑と重複している。本跡が第114号土坑の北東側を掘り込んでいることから，第114号土坑より新しい。第125号土坑との新旧関係は不明である。

規模と平面形　開口部は長径2.55m，短径2.10mの楕円形，底面は長径2.60m，短径2.04mの楕円形で，深さは63cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

ピット　3か所。P1は南東壁際に位置し，径31cmの円形で，深さは36cmである。P2は南壁際に位置し，長径43cm，短径38cmの楕円形で，深さは35cmである。P3は北側に位置し，径47cmの円形で，深さは22cmである。

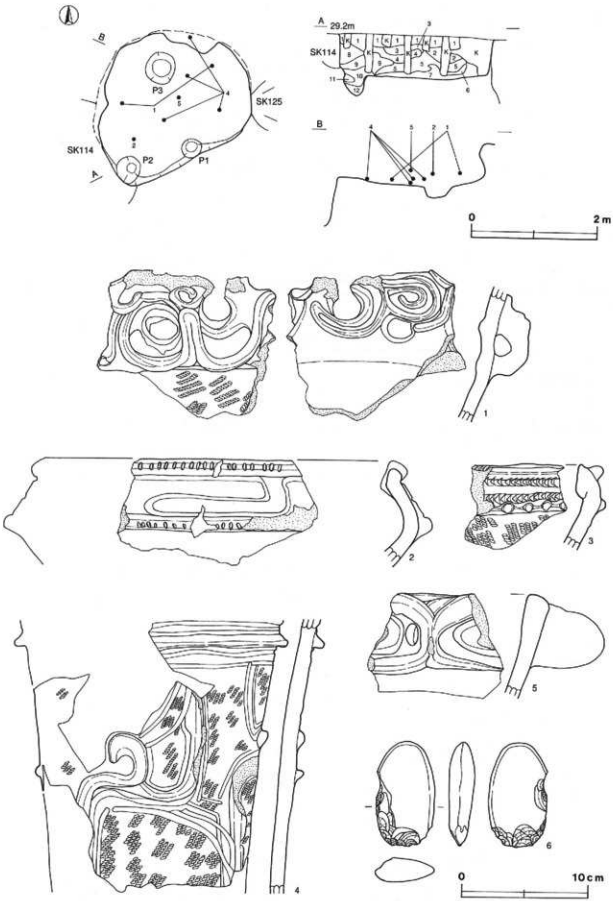
覆土　12層に分層され，不規則な堆積状況やロームブロック・炭化粒子を多く含んでいることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

1　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　暗褐色　ローム小ブロック中量，炭化粒子・ローム粒子少量
4　黒褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子少量
5　黒褐色　ローム小ブロック中量，炭化粒子・ローム粒子少量
6　暗褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量
7　暗褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，ローム粒子少量
8　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
9　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム大ブロック・ローム中ブロック少量
10　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
11　暗褐色　ローム小ブロック中量，ローム粒子少量
12　明褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，炭化粒子微量

遺物　縄文土器片228点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器5点，礫石1点である。第122図1は深鉢の口縁部片で，北東部から西部にかけての覆土下層から出土している。2は浅鉢の口縁部片で，南西部の覆土下層から出土している。4は深鉢の胴部片で，中央部の覆土下層から出土している。5は深鉢の口縁部片で，中央部の覆土中層から出土している。3は浅鉢の口縁部片，6は礫石で覆土から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期)と考えられる。



第122図　第63号土坑・出土遺物実測図

第63号土坑出土遺物観察表（第122図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B（11.7）	把手部を呈する口縁部片。把手部は張出状把手を呈する。口唇部直下には隆帯を巡らし，口縁部の内側には沈線で渦巻文を施している。地文はLRの羽節縄文を縦方向に施している。	長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P98　10%
2	浅鉢 縄文土器	A［27.0］ B（8.2）	口縁部片。口縁部は内彎して立ち上がり，口唇部で外傾して立ち上がる。口縁部には隆帯及び沈線でクランク状に区画文を施している。隆帯にはきざみを施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P100　5%
3	浅鉢 縄文土器	B（6.7）	口縁部片。口唇部直下には先の鋭い工具による施列の三角押文を施し，その下に指圧による押圧を加えた隆帯を横位に巡らしている。頸部にはLRの羽節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P101　5%
4	深鉢 縄文土器	B（23.7）	胴部片。胴部には断面三角形の隆帯を横位に巡らし，その一部を渦巻状に施している。渦巻状の隆帯を包み込むように沈線で区画文を施している。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P99　30% P L 24
5	深鉢 縄文土器	B（8.2）	地文はRLの羽節縄文を縦方向に施している。波状口縁を呈する口縁部片。波状部欠損。波底部に把手が付く。把手の片方に円形の孔が有り，その周囲に沈線を施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P97　5%

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
6	磨石	8.2	4.7	2.1	115.9	緑色凝灰岩	自然石を素材に剥離面有り。	Q16

第64号土坑（第123・124図）

位置　調査１区の北部，Ｃ４区。

重複関係　本跡は第９号溝と重複している。本跡は南西側上面を第９号溝に掘り込まれていることから，第９号溝より古い。

規模と平面形　開口部は長径2.65m，短径[1.85]mの楕円形と推定され，底面は長径2.35m，短径1.98mの楕円形で，深さは58cmである。

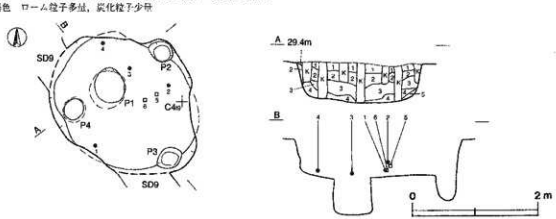
壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

ピット　４か所。Ｐ１は中央部に位置し，径58cmの円形で，深さ62cmである。Ｐ２は東壁際に位置し，長径60cm，短径30cmの楕円形で，深さ60cmである。Ｐ３は南壁寄りに位置し，長径40cm，短径32cmの楕円形で，深さ44cmである。Ｐ４は西壁寄りに位置し，径40cmの楕円形で，深さ40cmである。

覆土　５層に分層され，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

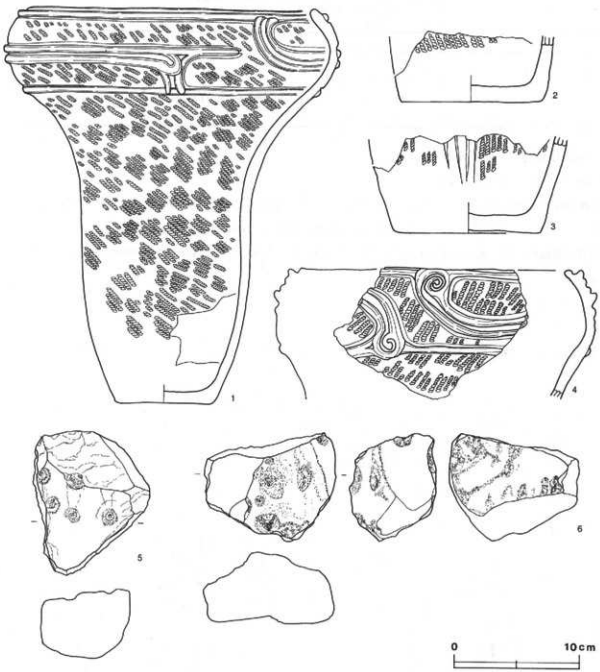
土層解説
1　黒褐色　ローム粒子中量，炭化物・炭化粒子少量
2　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子・炭化物微量
3　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック少量
4　黒褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　暗褐色　ローム粒子多量，炭化粒子少量



第123図　第64号土坑実測図

遺物　縄文土器片193点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器４点，凹石２点である。第124図１はほぼ完形の深鉢で，南西部の覆土下層から出土している。３は深鉢の底部片で，４は深鉢の口縁部片，それぞれ北部の覆土下層から出土している。５・６は凹石で，それぞれ東部の覆土下層から出土している。２は深鉢の底部片で，東部の覆土中層から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期後葉(加曽利Ｅⅰ式期)と考えられる。



第124図　第64号土坑出土遺物実測図

第64号土坑出土遺物観察表（第124図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	A　22.5 B　31.4 C　7.5	口縁部,胴部の一部欠損。キャリパー形の器形を呈する。口唇部は平担で,平坦部には沈線が巡っている。口縁部には隆帯と沈線で区画文を施している。地文はLRの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい黄褐色 普通	P103　80% PL24

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
2	深鉢 縄文土器	B〔5.2〕 C 11.0	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。地文はLRの単節縄文を縦方向に施している。	石英・雲母 にぶい黄褐色 普通	P106 10%
3	深鉢 縄文土器	B (7.6) C 11.7	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部には縦位に沈線を施している。地文はRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P105 10% 底部網代痕有り
4	深鉢 縄文土器	A〔21.3〕 B (10.1)	口縁部片。口縁部は内湾して立ち上がる。口唇部直下には隆帯を巡らし，渦巻文や楕円形の区画文を施している。地文はRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英 にぶい赤褐色 普通	P104 5%

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
5	凹石	11.3	9.3	5.5	573.9	花崗岩	自然石を素材に表面5穿孔。	Q18 PL47
6	凹石	8.6	10.3	6.8	543.9	花崗岩	表面7穿孔，裏面8穿孔，側面4穿孔。	Q17

第65号土坑（第125・126図）

位置　調査1区の北部，B4b1区。

重複関係　第109・120・132・273号土坑と重複している。本跡が北東側の第273号土坑，西側の第109号土坑を掘り込んでいることから，両土坑より新しい。第120・132土坑との新旧関係は不明である。

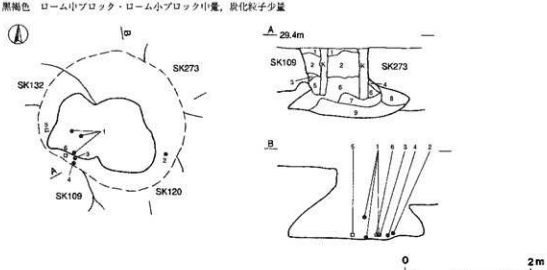
規模と平面形　開口部は長径1.64m，短径1.04mの楕円形，底面は長径2.34m，短径1.86mの楕円形で，深さは109cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

覆土　9層に分層され，不規則な堆積状況やロームブロックを多く含んでいることから，人為堆積と考えられる。

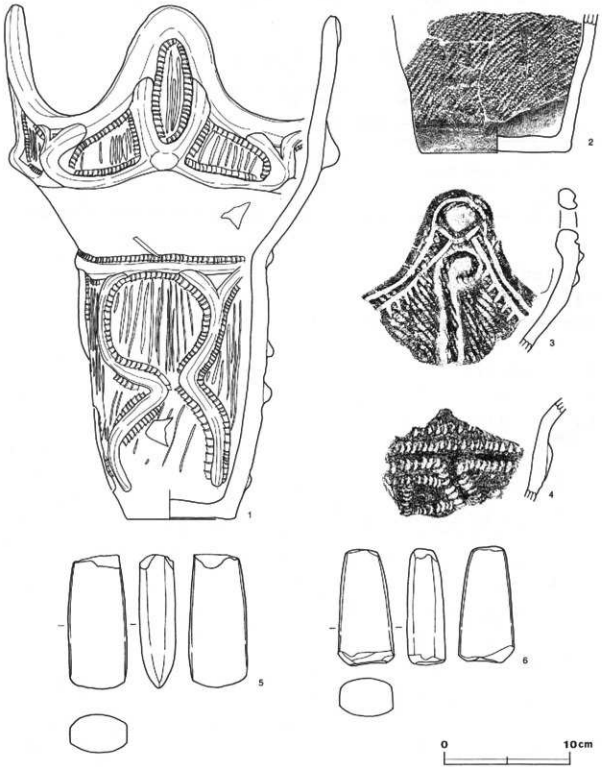
土層解説
1　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子・炭化物微量
2　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子少量
3　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
4　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量
5　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子少量
6　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化物少量，ローム中ブロック微量
7　黒褐色　炭化物・炭化粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量
8　黒褐色　炭化物中量，炭化粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量
9　黒褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，炭化粒子少量



第125図　第65号土坑実測図

遺物　縄文土器片178点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器４点，磨製石斧２点である。第126図１は大波状口縁を呈する深鉢，３は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片，４は深鉢の胴部片で，それぞれ西壁際の覆土下層から出土している。２は深鉢の胴部から底部にかけての破片で，東部の覆土下層から出土している。５・６は磨製石斧で，それぞれ西部の覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器から縄文時代中期中葉(阿玉台Ⅲ式期)と考えられる。



第126図　第65号土坑実測図

第65号土坑出土遺物観察表（第126図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A 23.5 B 40.4 C 8.7	頂部の一部欠損。胴部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外傾する。4単位の大波状口縁を呈する。波状部は隆帯で楕円形の区画文を施し，区画内には結節沈線文と棒状工具による縦沿の沈線で文様を描出している。胴部には結節沈線文で楕円形状に区画し，区画内には棒状工具による沈線を縦位に施している。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P107 60% P L24
2	深鉢 縄文土器	B (10.7) C 11.6	胴部から底部にかけての破片。胴部は内彎気味に立ち上がる。地文は RL の単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P108 10%
3	深鉢 縄文土器	B (12.9)	波状口縁を呈する口縁部片。波状部には孔が穿たれ，その周りを結節沈線文を区画状に施している。波底部には過剰文を施し，そこから隆帯を垂下させている。地文は LR の単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	T P29 5%
4	深鉢 縄文土器	B (8.0)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，頸部で外傾する。胴部には 'Y' 字状の隆帯を施している。隆帯に沿って爪形文を施している。胴部には爪形文で楕円形の区画文を施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	T P30 5%

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	特徴	備考
5	磨製石斧	(10.5)	4.5	2.9	(263.8)	緑色凝灰岩	基部欠損。刃部平面形は円刃で，斜刃。	Q19 P L45
6	磨製石斧	(9.2)	4.4	3.1	(217.1)	緑色凝灰岩	基部及び，刃部欠損。	Q20

第66号土坑（第127～129図）

位置　調査1区の北西部，B 5h2区。

規模と平面形　開口部は長径1.28m，短径1.14mの楕円形，底面は長径1.94m，短径1.80mの円形で，深さは57cmである。

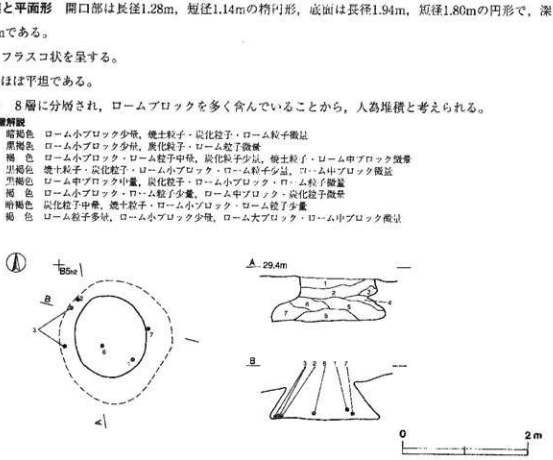
壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

覆土　8層に分層され，ロームブロックを多く含んでいることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

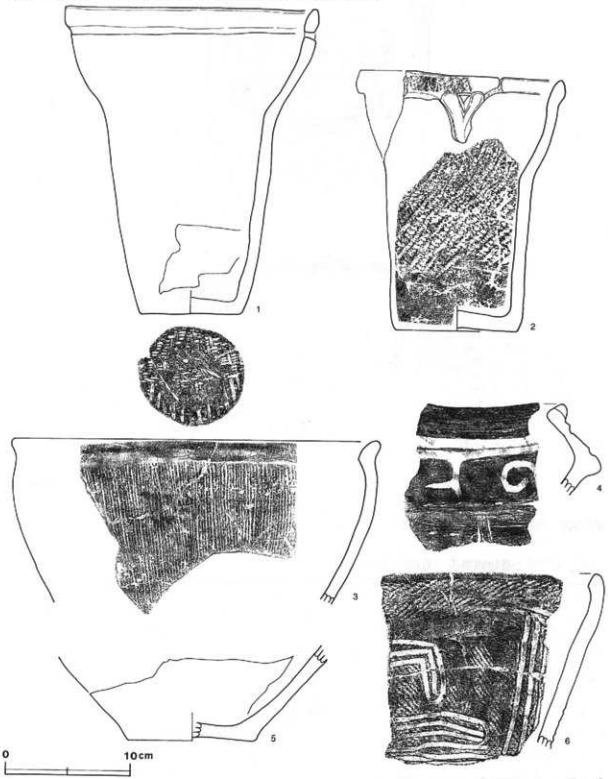
1　暗褐色　ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
2　黒褐色　ローム小ブロック少量，炭化粒子・ローム粒子微量
3　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子・ローム中ブロック微量
4　黒褐色　焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
5　黒褐色　ローム中ブロック中量，炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
6　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック・炭化粒子微量
7　暗褐色　炭化粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
8　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック・ローム中ブロック微量



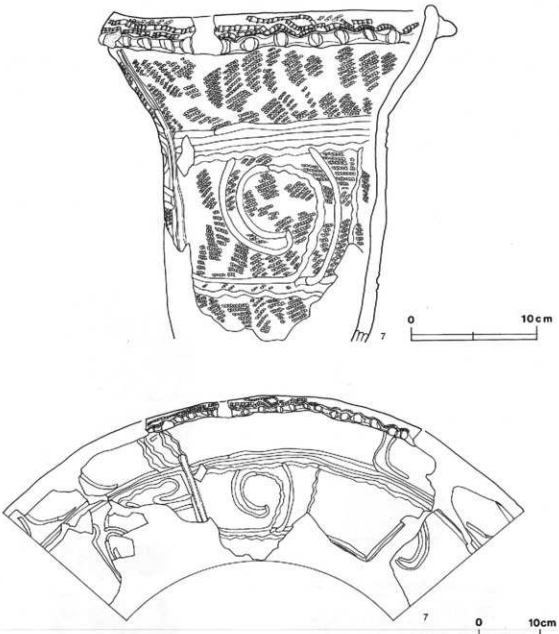
第127図　第66号土坑実測図

遺物　縄文土器片258点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器７点である。第128図２は口縁部が一部欠損する深鉢で，北壁際の底面から出土している。３は深鉢の口縁部片で，西壁際の覆土下層から出土している。６は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，中央部覆土下層から出土している。７は底部が欠損する深鉢で，東部の覆土下層から出土している。１はほぼ完形の深鉢で，南東部の覆土中層から出土している。４は浅鉢の口縁部片，５は鉢の底部片で，それぞれ覆土から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅲ式期)と考えられる。



第128図　第66号土坑出土遺物実測図（１）



第129図　第66号土坑出土遺物実測図（２）

第66号土坑出土遺物観察表（第128・129図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	A　20.0 B　24.2 C　7.8	口縁部の一部欠損。胴部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は内彎する。口縁部には隆帯が巡る。口唇部直下には２つの穿孔を施している。胴部に無文。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P109　95% P L24 底部縄代痕有り
2	深　鉢 縄文土器	A［16.0］ B　20.7 C　9.6	口縁部，胴部一部欠損。胴部は直線的に立ち上がり，口縁部は内彎する。口縁部には隆帯が巡り，隆帯の延長上に「V」字状の隆帯を貼付している。地文は異条縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P110　70% P L24
3	深　鉢 縄文土器	A［28.7］ B（13.0）	口縁部片。口縁部は内彎して立ち上がる。口縁部の内側には稜を持つ。口縁部には縦位に条線文を施している。	長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P112　5%
4	浅　鉢 縄文土器	B（7.0）	口縁部片。口縁部は内彎して立ち上がる。棒状工具で沈線による渦巻文や区画状の文様を描出している。	長石・石英・雲母・ 赤色粒子 にぶい褐色，普通	T P32　5% 内・外面赤彩

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
5	鉢 縄文土器	B（7.6） C［10.2］	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部は無文。	長石・石英・雲母 にぶい黄褐色 普通	P113　5% 底部網代痕有り
6	深鉢 縄文土器	B（13.8）	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がり，口唇部で内傾する。棒状工具による沈線で区画文を施したり，3条の沈線を垂下させている。施文はLRの単節縄文で横方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	TP31　5%
7	深鉢 縄文土器	A　25.0 B（26.6）	口縁部，胴部の一部欠損。底部欠損。胴部は内傾気味に立ち上がり，口縁部は内傾する。口唇部直下には隆帯が巡り，隆帯には指頭による押圧を加えている。また，隆帯に沿って爪形文が施されている。口縁部と胴部との境には2条の沈線と波状沈線を巡らしている。胴部には沈線と一部波状沈線で渦巻状の文様を描出している。口縁部にはRLの単節縄文を縦方向に，胴部にRLの単節縄文を横や縦方向に施している。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P111　60% PL24

第69号土坑（第130・131図）

位置　調査1区の北西部，B 4 d3区。

重複関係　第82・196号土坑と重複しているが，両土坑との新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径2.17m，短径1.58mの楕円形で，深さは40cmである。

壁　外傾して立ち上がる。

底　ほぼ平坦である。

ピット　2か所。P 1は北東壁際に位置し，径52cmの円形で，深さ23cmである。P 2は東壁際に位置し，長径72cm，短径53cmの楕円形で，深さ33cmである。

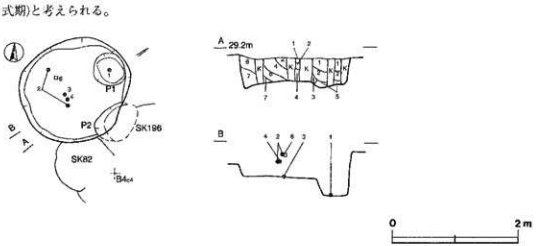
覆土　7層に分層され，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

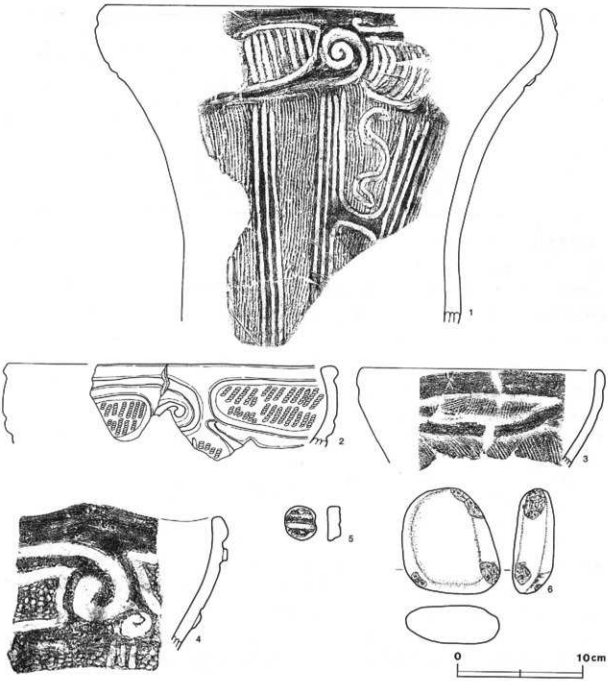
1　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子微量
2　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　褐　色　ローム粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
4　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
5　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
6　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム大ブロック・ローム中ブロック微量
7　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物　縄文土器片120点，敲石1点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器4点，敲石1点である。第131図3は深鉢の口縁部片で中央部の底面から出土している。1は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，北東部のP 1内から出土している。2・4は深鉢の口縁部片，6は敲石で，それぞれ中央部の覆土上層から出土している。5は土器片円盤で覆土から出土している。

所見　復元可能土器は，覆土上層の堆積時に一括廃棄されたものと思われる。時期は，出土土器から中期後葉（加曽利EⅡ式期）と考えられる。



第130図　第69号土坑実測図



第131図　第69号土坑出土遺物実測図

第69号土坑出土遺物観察表（第131図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	A［34.7］ B（24.9）	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は内彎して立ち上がる。口縁部には隆帯と沈線で楕円形の区画文や渦巻文を施している。区画内には縦位の太い沈線を施している。胴部には縦位に沈線を施している。また「S」字状の沈線を施している。地文は燃糸文を施している。	雲母 黒褐色 普通	P114　20%
2	深　鉢 縄文土器	A［26.0］ B（7.5）	口縁部片。口縁部はやや内彎して立ち上がる。隆帯と沈線による渦巻文と区画文を配している。地文はRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P115　5%
3	深　鉢 縄文土器	A［19.0］ B（7.7）	口縁部片。口縁部は内彎気味に立ち上がる。隆帯と沈線で区画文を配している。区画内には縦位にクシ状工具による沈線を施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P116　5%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
4	深鉢 縄文土器	B（10.4）	小波状を呈する口縁部片。口縁部に内彎して立ち上がる。口縁部には沈線と隆帯で渦巻文や区画文を施している。地文は RL の単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母にぶい褐色 普通	TP33　5%

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
5	土器片円盤	2.7	2.4	1.0	8.3	土製	2条の沈線を施し，縁部は部分的に研磨。	DP6

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
6	磨石	8.3	7.8	3.2	200.1	安山岩	側面に敲打痕。	Q21

第71号土坑（第132・133図）

位置　調査1区北部，B 4 e3区。

重複関係　第76号土坑と重複している。本跡は南東側の第76号土坑に掘り込まれていることから，第76号土坑より古い。

規模と平面形　重複していることから，規模及び平面形は一部推定で，開口部は長径1.77m，短径0.79mの楕円形，底面は長径1.58m，短径1.09mの楕円形で，深さは44cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

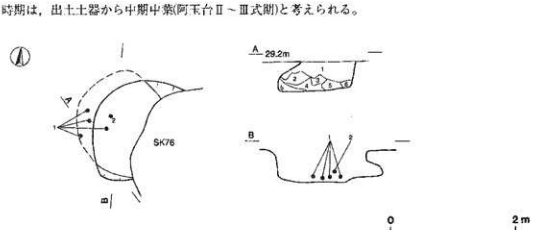
覆土　6層に分層され，不規則な堆積状況やロームブロックを多く含んでいることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

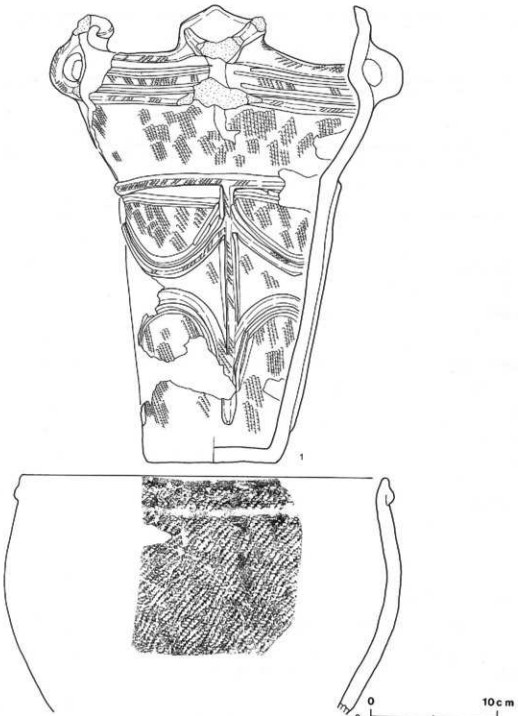
1　褐　色　ローム大ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子多量
2　暗褐色　ローム小ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量
3　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
4　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
5　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
6　褐　色　ローム大ブロック・ローム小ブロック多量，ローム中ブロック中量

遺物　縄文土器片210点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器2点である。第133図1は口縁部，胴部が一部欠損する深鉢で，中央部から西部にかけての覆土下層から出土している。2は深鉢の口縁部片で，中央部の覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅱ～Ⅲ式期)と考えられる。



第132図　第71号土坑実測図



第133図　第71号土坑出土遺物実測図

第71号土坑出土遺物観察表（第133図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	A　22.0 B　35.8 C　10.2	口縁部,胴部の一部欠損。胴部は外傾して立ち上がり,口縁部で内彎気味に立ち上がる。4単位の眼鏡状把手を呈する。口唇部直下には2条の沈線を横位に施している。胴部には沈線で楕円形状に区画文を施している。また,隆帯を縦位に垂下させている。口唇部直下には上の無節縄文を横方向に施している。地文は上の無節縄文を縦方向に施している。	長石・雲母 に赤い褐色 普通	P117　60% PL25
2	深　鉢 縄文土器	A〔28.5〕 B〔18.8〕	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり,口縁部に至る。口縁部には隆帯を巡らしている。口縁部の内側には稜を持つ。地文はRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・雲母・パミス に赤い赤褐色 普通	P118　30%

第77号土坑（第134図）

位置　調査１区の北西部，Ｂ４e4区。

重複関係　本跡は北側部分を第106号土坑に掘り込まれていることから，第106号土坑より古い。また，第76・87号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　北側部分を第106号土坑に掘り込まれていることから，規模及び平面形はともに推定で，長径1.15m，短径1.12mの円形で，深さは45cmである。

壁　円筒状を呈し，やや外傾して立ち上がる。

底　ほぼ平坦である。

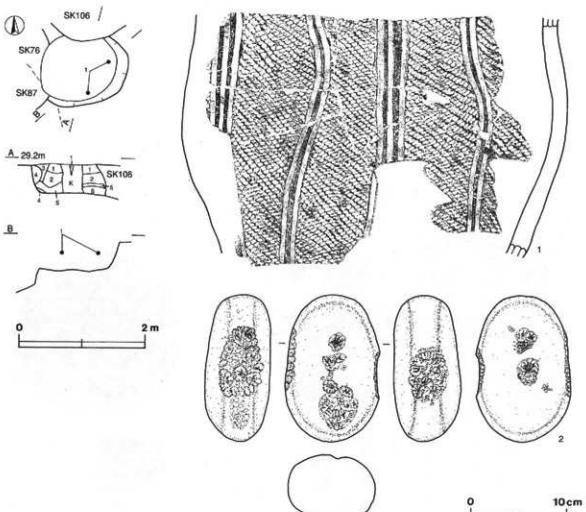
覆土　６層に分層され，ロームブロックや鹿沼パミスブロックを含んでいることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

1　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
2　暗褐色　ローム粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子微量
3　褐　色　ローム粒子少量・ローム小ブロック・鹿沼パミス小ブロック微量
4　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，鹿沼パミス小ブロック微量
5　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・鹿沼パミス小ブロック微量
6　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，鹿沼パミス小ブロック微量

遺物　縄文土器片216点，凹石１点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器１点，凹石１点である。第134図１は深鉢の胴部片で，南部の覆土中層から出土している。２は凹石で，覆土から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期後葉(加曽利ＥⅡ式期)と考えられる。



第134図　第77号土坑・出土遺物実測図

第77号土坑出土遺物観察表（第134図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	B（25.5）	胴部片。胴部は内彎して立ち上がる。2条から3条の太い沈線を垂下させている。地文には複節縄文を施している。	長石・石英 にぶい褐色 普通	P119　10%

図版番号	器　種	計測値				石　質	特　徴	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
2	敲石(凹石)	15.7	10.1	6.7	1660.0	砂　岩	長軸の両端を敲打。表面2穿孔。裏面3穿孔。	Q24　PL47

第79号土坑（第135・136図）

位置　調査1区の北西部，A4g0区。

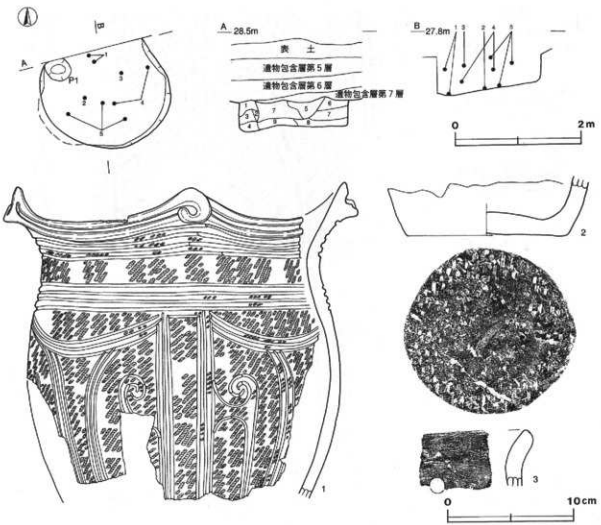
重複関係　本跡は第1号遺物包含層と重複している。

規模と平面形　一部トレンチャーによる撹乱から，規模及び平面形はともに推定で，平面形は長径2.04m，短径1.60mの楕円形，底面は長径2.00m，短径1.58mの不整楕円形で，深さは38cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

ピット　1か所。P1は西壁寄りに位置し，長径42cm，短径36cmの楕円形で，深さは23cmである。



第135図　第79号土坑・出土遺物実測図

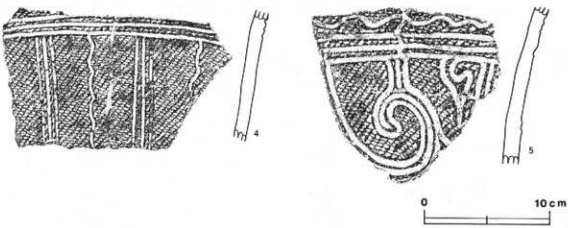
覆土　9層に分層され，ロームブロックや粘土粒子を多く含んでいることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

1　褐　色　ローム粒子・粘土粒子微量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・粘土粒子微量
3　暗褐色　ローム粒子・粘土粒子微量
4　褐　色　ローム粒子多量，炭化物・粘土粒子・鹿沼パミス小ブロック微量
5　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック中量，粘土粒子微量
6　褐　色　ローム中ブロック・ローム粒子少量，ローム小ブロック・粘土粒子微量
7　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・粘土粒子微量
8　暗褐色　ローム大ブロック・ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
9　黒褐色　ローム中ブロック少量，ローム小ブロック・ローム粒子微量

遺物　縄文土器片315点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器5点である。第135図1は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，北部の底面から出土している。2は深鉢の底部片，5は深鉢の胴部片で，それぞれ南西部の覆土下層から出土している。3は深鉢の口縁部片で，東部の覆土上層から出土している。4は深鉢の胴部片で，中央部から北部にかけての覆土上層から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期後葉(加曽利ＥⅠ式期)と考えられる。



第136図　第79号土坑出土遺物実測図

第79号土坑出土遺物観察表（第135・136図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	A 25.6 B (25.0)	口縁部から胴部にかけての破片。4単位の小波状口縁を呈する。口縁部に は隆帯と沈線で渦巻文を配し，口縁部直下には半截竹管による平行沈線文を巡らしている。胴部には縦位の沈線や沈線による渦巻文を施している。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 橙色 普通	P120　40% PL25
2	深　鉢 縄文土器	B (4.7) C 12.9	底部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部は無文。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P121　5% 底部網代痕有り
3	深　鉢 縄文土器	B (4.5)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。補修孔と考えられる1つの穿孔がある。無文。	長石・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	TP34　5%
4	深　鉢 縄文土器	B (10.3)	胴部片。胴部は外傾して立ち上がる。3条の沈線が巡り，3条の沈線と波状沈線を垂下させている。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	TP35　5%
5	深　鉢 縄文土器	B (12.3)	胴部片。胴部は外傾して立ち上がる。波状沈線と3条の平行沈線を巡らし，その下方に沈線で渦巻状の文様を描出させている。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	TP36　5%

第80号土坑（第137・138図）

位置　調査1区の北西部，Ａ4j5区。

重複関係　本跡は東側部分を第20・26号土坑に掘り込まれていることから，第20・26号土坑より古い。

規模と平面形　開口部は長径2.50m，短径1.70mの楕円形，底面は長径2.87m，短径2.70mの楕円形で，深さは107cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

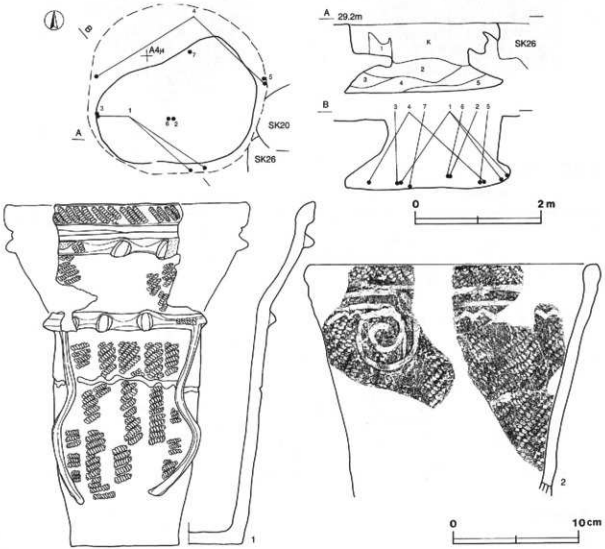
覆土　5層に分層され，ローム・炭化物・鹿沼パミスブロックの含有状況から，人為堆積と考えられる。

土層解説

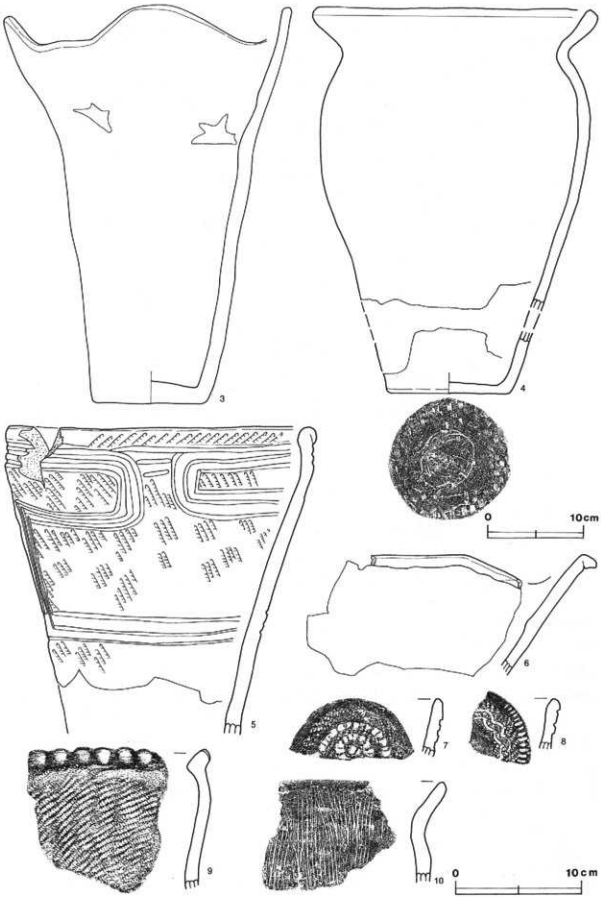
1　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子微量
3　暗褐色　ローム大ブロック・ローム中ブロック中量，鹿沼パミス小ブロック少量
4　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子少量，焼土粒子微量
5　褐　色　ローム粒子多量，炭化物中量，ローム小ブロック・鹿沼パミス小ブロック少量

遺物　縄文土器片373点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器10点である。第137図1・3は口縁部，胴部が一部欠損する深鉢で，それぞれ覆土下層から横位で出土している。2は底部が欠損する深鉢で，覆土下層から横位で出土している。4は胴部が一部欠損する甕で，覆土下層から出土している。6は浅鉢の口縁部片で覆土下層から出土している。5は胴部から底部が欠損する深鉢，7・8・9・10は深鉢の口縁部片で，それぞれ覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期)と考えられる。



第137図　第80号土坑・出土遺物実測図



第138図　第80号土坑出土遺物

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A［19.3］ B 27.0 C 8.4	口縁部、胴部の一部欠損。胴部は緩やかに外開して立ち上がり、口縁部はやや肉厚する。口縁部直下には複列の結節沈線文を巡らしている。その下に指頭による押圧を加えた隆帯を巡らしている。頸部には指頭による押圧を加えた隆帯を施している。胴部には波状沈線が巡り、波状の隆帯を垂下させている。口縁部にはＲＬの単節縄文を横方向に、胴部にはＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	石英・雲母 にぶい褐色 普通	Ｐ123　40% ＰＬ25
2	深鉢 縄文土器	A［22.6］ B（18.2）	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外開して立ち上がり、口縁部はやや肉厚する。口縁部の内面に唇を持つ。口唇部直下には2条の沈線と波状の沈線を巡らしている。胴部には赤彩管を押し引きした渦巻文を施している。口縁部にはＲＬの単節縄文を横方向に、胴部にはＬＲの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	Ｐ125　10%
3	深鉢 縄文土器	A 22.1 B 31.3 C 8.5	口縁部、胴部の一部欠損。4単位の波状口縁を呈する。胴部は外開して立ち上がり、口縁部は肉厚する。胴部は無文で、縦方向に精磨している。	長石 橙色 普通	Ｐ122　90%
4	鉢 縄文土器	A 29.2 B［41.0］ C 12.6	頸部、一部欠損。胴部は内傾して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外開する。口唇部は平坦。胴部は無文。	雲母・石英・雲母 にぶい褐色 普通	Ｐ126　85% ＰＬ25 縄部網代痕有り
5	深鉢 縄文土器	A［23.4］ B（24.4）	頸部の一部欠損。底部欠損。胴部は外開して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部には隆帯が巡る。口縁部直下には沈線で区画された区画文を施している。口縁部の隆帯にはＬの無節縄文を横方向に、頸部にはＬの無節縄文を縦方向に施している。	雲母・雲母 にぶい橙色 普通	Ｐ124　70% ＰＬ25
6	浅鉢 縄文土器	B（9.5）	口縁部片。口縁部は外開して立ち上がる。小波状の口縁を呈する。口唇部は外開して立ち上がる。口縁部の内面に稜を持つ。口縁部は無文で、横方向に精磨している。	雲母・雲母 にぶい黄色 普通	Ｐ127　5% 口縁部内面赤彩
7	深鉢 縄文土器	B（4.5）	底部破片。半截竹管を押し引きした渦列の結節沈線文を配した渦巻文を施している。ＬＲの単節縄文を施している。	長石・石英 褐色 普通	ＴＰ37　5%
8	深鉢 縄文土器	B（4.5）	把手部片。円盤状の把手の一部と思われる。波頂部にはキザミを施している。波状部には半截竹管による波状沈線を施している。地文はＲＬの単節縄文を横方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	ＴＰ38　5%
9	深鉢 縄文土器	B（11.0）	口縁部片。口縁部は内傾して立ち上がり、口唇部は外開する。口唇部には押圧を加えた隆帯を巡らしている。地文はＲＬの単節縄文を縦方向に施している。	長石・雲母 灰褐色 普通	ＴＰ39　5%
10	深鉢 縄文土器	B（7.8）	口縁部から頸部にかけての破片。頸部はやや内傾して立ち上がり、口縁部はやや外開する。口縁部にはクシ状工具による条線文を縦位に施している。	長石・石英・雲母 暗褐色 普通	ＴＰ40　5%

第87号土坑（第139～141図）

位置　調査1区の北西部，Ｂ4e4区。

重複関係　本跡は上面を第76号土坑に掘り込まれていることから，第76号土坑より古い。

規模と平面形　開口部は長径2.09m，短径1.48mの楕円形，底面は長径3.07m，短径2.85mの楕円形で，深さは130cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

覆土　15層に分層され，第1～5層は第76号土坑の覆土である。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。第6～15層は本跡の覆土で，不規則な堆積状況やローム ブロック・鹿沼パミスブロックを多く含んでいることから，人為堆積と考えられる。

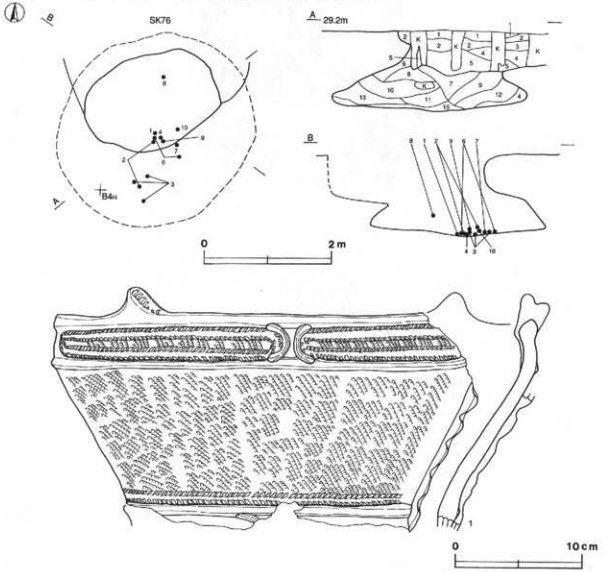
土層解説

1　暗褐色　ローム中ブロック・小ブロック中量，焼土粒子少量
2　暗褐色　焼土粒子多量，炭化物・炭化粒子中量，ローム中ブロック・ローム粒子少量

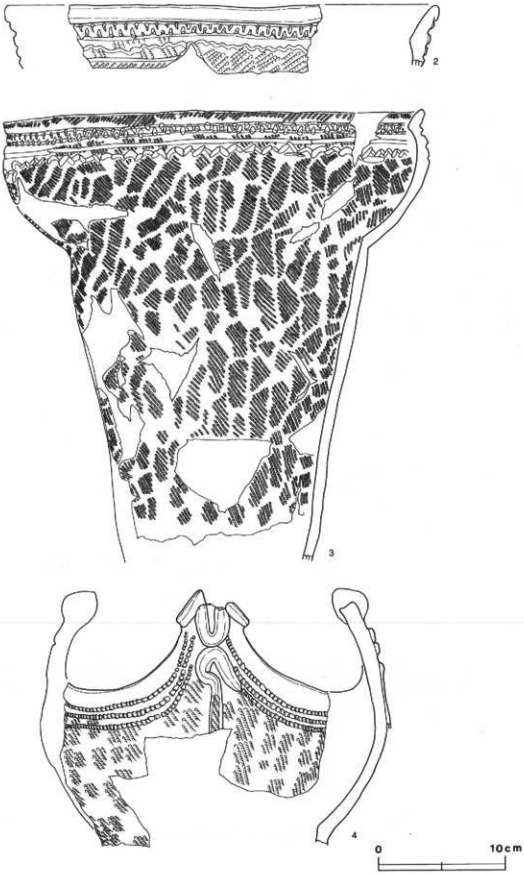
3　暗褐色　ローム中ブロック・炭化物中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量
4　明褐色　ローム粒子多量，ローム大ブロック・ローム小ブロック中量，炭化粒子・鹿沼パミス小ブロック少量
5　黒褐色　炭化粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量
6　暗褐色　ローム粒子・炭化物・炭化粒子中量，ローム小ブロック少量
7　褐　色　ローム中ブロック・ローム粒子少量
8　黒褐色　ローム大ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
9　黒褐色　ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子中量
10　暗褐色　炭化物多量，炭化粒子中量，ローム中ブロック・ローム粒子微量
11　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
12　褐　色　ローム粒子少量
13　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
14　黒褐色　ローム小ブロック・炭化粒子中量
15　黒褐色　ローム中ブロック・ローム粒子・鹿沼パミス小ブロック少量

遺物　縄文土器片220点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器11点である。第140図2は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片，1・3は底部が欠損する深鉢，4は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片，6は口縁部から頸部が欠損する深鉢，7は底部が欠損する甕，9は深鉢の口縁部片，10は深鉢の頸部片で，それぞれ中央部から南西部の底面及び覆土下層から集中して出土している。8は口縁部が欠損する浅鉢で北部の覆土中層から出土している。5は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片，11は深鉢の口縁部片で，それぞれ覆土から出土している。

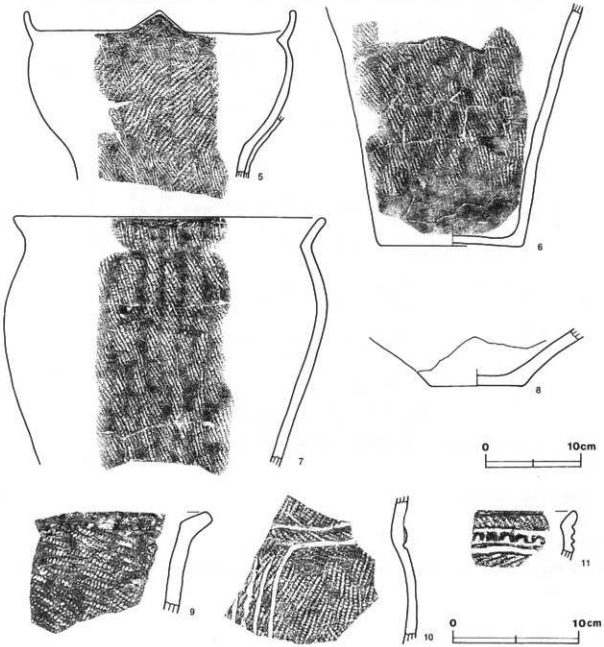
所見　時期は，出土土器から中期中葉(阿玉台式Ⅱ式期)と考えられる。



第139図　第87号土坑・出土遺物実測図



第140図　第87号土坑出土遺物実測図（1）



第141図　第87号土坑出土遺物実測図（２）

第87号土坑出土遺物観察表（第139～141図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	A［37.5］ B（19.0）	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部の内側に棒を持つ。波頂部には爪形文を施している。口縁部には隆帯で楕円形に区画した区画間に「X」字状を施している。区画内には半截竹管による刺突文を施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P130　20% PL25
2	深　鉢 縄文土器	A［33.9］ B　（5.0）	口縁部片。口縁部はやや外傾して立ち上がる。口縁部の内側に棒を持つ。口縁部には波状の隆帯と直線的な隆帯を巡らしている。波状の隆帯には上下から棒状工具で交互に刺突を加えている。隆帯に平行して波状の沈線や直線的な沈線を巡らしている。地文はLの無節縄文を横方向に施している。	長石・雲母 橙色 普通	P133　5%
3	深　鉢 縄文土器	A　33.0 B　35.7	胴部の一部欠損,底部欠損。胴部は外傾して立ち上がり,口縁部で内彎する。口唇部直下には交互刺突による連続コの字状文を巡らしている。口唇部直下には0段多条でLRの羊節縄文を横方向に,それ以下には縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P129　30% PL25

関版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
4	深　鉢 縄文土器	A〔21.8〕 B〔20.2〕	口縁部から頸部にかけての破片。頸部は外傾して立ち上がり，口縁部は内彎する。大波状口縁を呈する。波状部には「字状の隆帯を貼付し，稍釣状の隆帯を垂下させている。口唇部直下には縦列の結節沈線文を施している。地文はLの無節縄文を縦方向に施している。	長石・雲母 黒褐色 普通	P132　20%
5	深　鉢 縄文土器	A〔28.2〕 B〔17.8〕	口縁部から頸部にかけての破片。頸部は外傾して立ち上がり，口縁部は内彎する。4単位の小波状を呈する。口縁部の内面に稜を持つ。口縁部から胴部にかけて隆帯を垂下させている。地文はRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・雲母 にぶい橙色 普通	P131　20%
6	深　鉢 縄文土器	B〔25.7〕 C　15.2	口縁部欠損。胴部は外傾して立ち上がる。地文はLRの単節縄文を縦方向に施している。	石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P134　40%
7	壺 縄文土器	A　32.5 B〔26.4〕	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり，口縁部は「く」の字状に外傾する。地文はRLの単節縄文を横方向に施している。	長石・石英 にぶい褐色 普通	P135　80% PL25
8	浅　鉢 縄文土器	B〔6.2〕 C　9.9	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部は無文。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P136　10%
9	深　鉢 縄文土器	B〔8.0〕	口縁破片。口縁部はやや外傾して立ち上がり，口唇部で外傾する。口唇部は平坦である。地文はLRの単節縄文を縦方向に施している。	長石・雲母 黒褐色 普通	TP41　5%
10	深　鉢 縄文土器	B〔12.0〕	胴部から胴部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。胴部と頸部との境に隆帯を巡らしている。その隆帯の下方には棒状工具による沈線で区画文や波状沈線を確認に施している。地文はRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	TP43　5%
11	深　鉢 縄文土器	B〔4.0〕	口縁破片。口縁部は内彎して立ち上がり，口唇部で外傾する。隆帯を上下から交互に連続した刻目文を施し，刻目文に沿って平戟竹管による平行沈線文を施している。口縁部はRLの単節縄文を横方向に，地文はRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・雲母 灰褐色 普通	TP42　5%

第89号土坑（第142図）

位置　調査1区の北部，B4b5区。

重複関係　本跡は第81号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　開口部は長径2.12m，短径1.76mの楕円形，底面は長径2.40m，短径2.15mの楕円形で，深さは83cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

ピット　1か所。P1は北東壁寄りに位置し，径18cmの円形で，深さは9cmである。

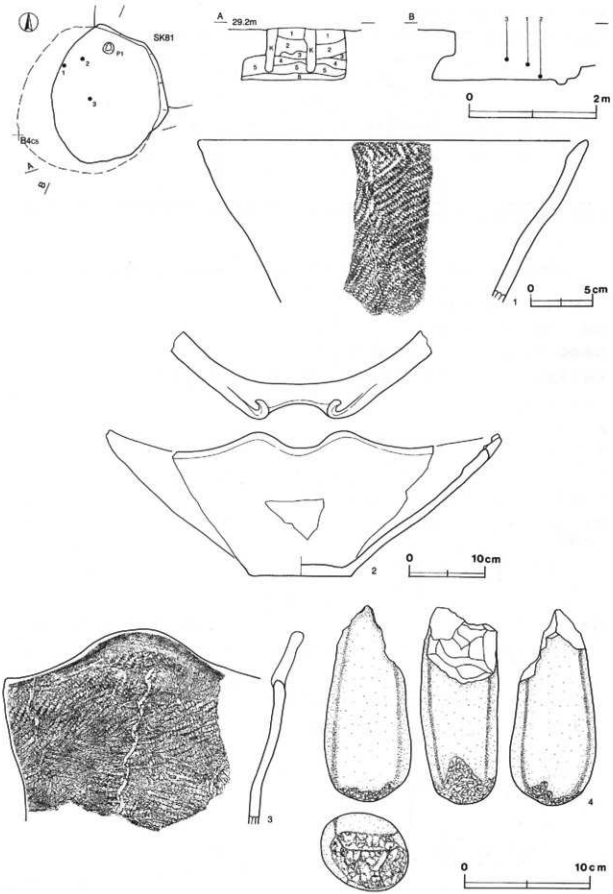
覆土　6層に分層され，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子少量
2　褐　色　ローム小ブロック多量，ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
3　褐　色　ローム中ブロック・ローム粒子中量，ローム大ブロック・ローム小ブロック中量
4　暗褐色　炭化粒子中量，ローム粒子・焼土粒子少量
5　黒褐色　炭化物・炭化粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量
6　黒褐色　炭化物・炭化粒子中量，ローム中ブロック少量

遺物　縄文土器片153点，敲石1点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器3点，敲石1点である。第142図2は口縁部から胴部が一部欠損する浅鉢で，覆土下層から出土している。1は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で，北部の覆土中層から出土している。3は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で，中央部の覆土中層から出土している。4は敲石で，南部の覆土から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅳ式期)と考えられる。



第142図　第89号土坑・出土遺物実測図

第80号土坑出土遺物観察表（第142図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A〔30.6〕 B〔12.8〕	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部はやや外傾する。口縁部の内面に稜を持つ。口唇部は平坦。胴部には縦を波状に縦方向に押圧している。地文はRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P137　5％
2	浅鉢 縄文土器	A〔51.1〕 B　19.3 C　13.3	口縁部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部はやや内彎する。小波状の口縁を呈する。口唇部の内側には渦巻状の隆帯を貼付している。口縁部から胴部に施文。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P139　40％ PL25
3	深鉢 縄文土器	B〔15.0〕	口縁部から胴部にかけての破片。波状口縁を呈する。胴部はやや内傾して立ち上がり，口縁部に至る。波状部はやや外傾する。胴部には縄文を縦に施している。地文はLRの単節縄文を横方向に施している。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P138　5％

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
4	敲石	(15.6)	6.8	6.2	(900.0)	安山岩	自然石を素材にしている。使用痕は先端部。	Q26

第91号土坑（第143・144図）

位置　調査1区の北部，B 4 c6区。

重複関係　本跡は南側部分を第3号住居跡に掘り込まれていることから，第3号住居跡より古い。

規模と平面形　開口部は長径2.33m，短径2.08mの不整楕円形，底面は長径2.30m，短径2.22mの円形で，深さは40cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

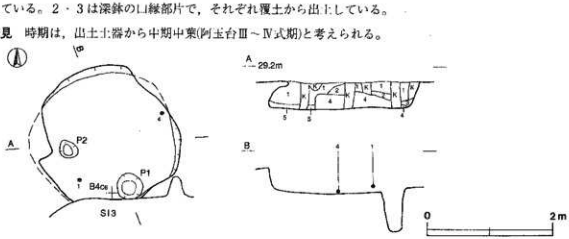
ピット　2か所。P 1は南壁寄りに位置し，径40cmの円形で，深さは63cmである。P 2は西壁寄りに位置し，長径34cm，短径24cmの楕円形で，深さは10cmである。

覆土　5層に分層され，不規則な堆積状況やロームブロックを多く含んでいることから，人為堆積と考えられる。

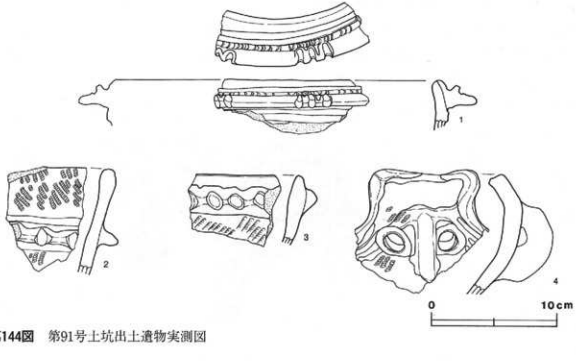
土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量
2　暗褐色　ロー.小ブロック・ローム粒子多量，炭化粒子少量
3　黒褐色　ローム粒子中量，ロー.小ブロック・炭化粒子中量，ローム中ブロック少量
4　褐　色　ローム大ブロック・ローム粒子多量
5　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・炭化物少量

遺物　縄文土器片55点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器4点である。第144図1は深鉢の口縁部片で，北西部の底面から出土している。4は深鉢の把手を有する口縁部片で，東部の底面から出土している。2・3は深鉢の口縁部片で，それぞれ覆土から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期)と考えられる。



第143図　第91号土坑実測図



第144図　第91号土坑出土遺物実測図

第91号土坑出土遺物観察表（第144図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	A［25.4］ B　(3.9)	口縁部片。口縁部は内彎して立ち上がる。口唇部は平坦で，そこに太い沈線と爪形文を巡らしている。口唇部の突出部にはキザミを施している。	長石・雲母・パミスにぶい黄橙色 普通	P140　5％
2	深　鉢 縄文土器	B　(8.2)	口縁部片。口縁部はほぼ直線的に立ち上がる。口唇部は平坦。口縁部直下には沈線と隆帯を巡らしている。隆帯には指頭による押圧を加えている。地文はRLの単節縄文を横方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P141　5％
3	深　鉢 縄文土器	B　(5.4)	口縁部片。口縁部はほぼ直線的に立ち上がる。口縁部直下には指頭による押圧を加えた隆帯を巡らしている。地文はRの無節縄文を縦方向に施している。	長石・雲母・赤色粒子 にぶい黄橙色，普通	P142　5％
4	深　鉢 縄文土器	B　(9.7)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は内彎する。波状部には短い隆帯を縦位に突出させ，その両側に孔を施している。孔の周りには隆帯を貼付し，地文はRLの単節縄文を縦方向に施している。	石英・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P143　5％

第95号土坑（第145図）

位置　調査1区の北部，B4d8区。

規模と平面形　開口部は長径1.98m，短径1.88mの円形，底面は長径2.10m，短径2.08mの円形で，深さは54cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

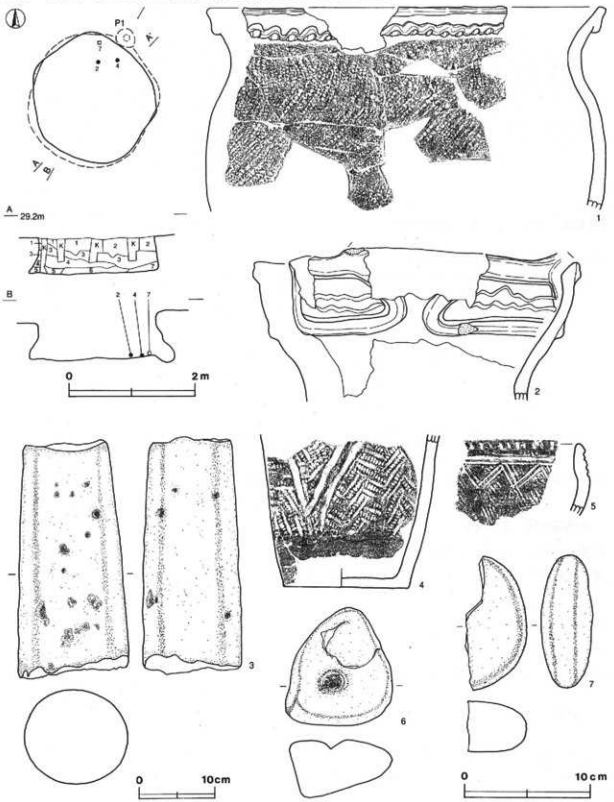
覆土　7層に分層され，上層は一部攪乱を受けている。ロームブロックや鹿沼パミスブロックを多く含んでいることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

1　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2　黒褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
3　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
4　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量
5　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス小ブロック微量
6　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・鹿沼パミス小ブロック微量
7　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，ローム大ブロック少量

遺物　縄文土器片181点，石棒１点，磨石１点，凹石１点が出土している。そのうち抽出・図示したものは縄文土器４点，石棒１点，磨石１点，凹石１点である。第145図２は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片，４は深鉢の胴部から底部にかけての破片，７は磨石で，それぞれ北部の底面から出土している。１・５は深鉢の口縁部片，３は石棒，６は凹石で，それぞれ覆土から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期中葉(阿玉台式Ⅳ式期)と考えられる。



第145図　第95号土坑・出土遺物実測図

第95号土坑出土遺物観察表（第145図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	深　鉢 縄文土器	A［31.0］ B（16.0）	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は内弾して立ち上がり，口縁部は外傾して立ち上がる。口唇部直下には隆帯を巡らしている。隆帯には指頭による押圧を施している。地文はLの無節縄文を施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P144　10%
2	深　鉢 縄文土器	A［25.3］ B（12.0）	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は内弾して立ち上がる。小波状口縁を呈する。口縁部の内側に稜を持つ。口縁部には隆帯で楕円形の区画文を施している。区画内には波状沈線を施している。	長石・石英・雲母 赤色粒子 にぶい橙色 普通	P145　10%
4	深　鉢 縄文土器	B（12.0） C　9.7	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部には「V」字状の沈線を施している。地文はRLの単節縄文を施文方向を変えることにより，羽状縄文を施している。	長石・石英 明赤褐色 普通	P146　30%
5	深　鉢 縄文土器	B（5.8）	口縁部片。口縁部は内弾して立ち上がる。口唇部にはキザミを施している。口唇部直下には平行沈線と波状沈線を巡らしている。地文はLRの単節縄文を横方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	TP44　5%

図版番号	器　種	計測値				石　質	特　徴	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
3	石　棒	(31.3)	(14.8)	(12.1)	(8940.0)	安　山　岩	軸部中位のみ遺存。	Q29　PL48
6	凹　石	9.3	8.4	4.5	400.0	安　山　岩	表面1穿孔。	Q28
7	磨　石	10.5	(4.8)	(4.1)	(260.0)	安　山　岩	自然石を素材にしている。使用痕は一側面。	Q27

第96号土坑（第146図）

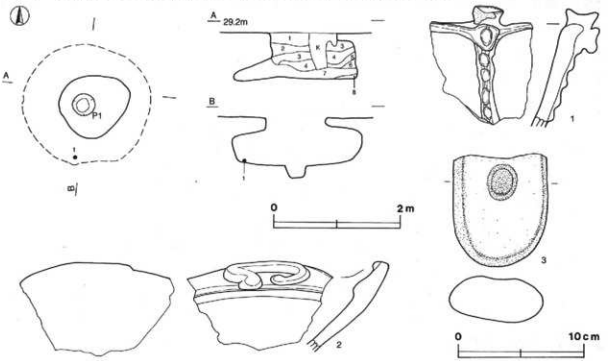
位置　調査1区の北部，B4d6区。

規模と平面形　開口部は長径1.10m，短径0.98mの円形，底面は長径2.00m，短径1.98mの円形で，深さは68cmである。

壁　フラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。

ピット　1か所。P1は中央部に位置し，径35cmの円形で，深さは19cmである。



第146図　第96号土坑・出土遺物実測図